
ネギまで夜天の主(偽)

開店休業状態

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまで夜天の主（偽）

【Zコード】

Z8229L

【作者名】

開店休業状態

【あらすじ】

テンプレ通りに死んでしまったと思ったら、目の前に現れた超ファンキーな爺さん。

爺さんは神を自称して、テンプレ通りに死んだのはミスだといいながら。

しかし、異世界でチートオリ主になれるというので、仕方なく諦めてやる。仕方なくだぞ、仕方なく！

この小説といつのもおこがましい作品には、原作レイプ、テンプレ、

チート、オリ主最強の要素が入っています。そう言ったものが嫌いな方はお気をつけ下さい。

プロローグ（前書き）

拙い作品ではあります。読んで頂けると嬉しいです。

プロローグ

日常。どうという事も無い平和な日々。
俺は日常を楽しく謳歌していた。時折、大事件がおきたりなんかしないかなと、物騒なことを考えたりもするが、楽しく生活していたのだ。

高校に入学し、平凡に生きていた俺は、その日、妙に運が悪かつた。朝に靴を履こうとしたら靴紐が切れる、家を出たら、何も無いのに躓く。信号無視の車に轢かれかけ、ヤクザっぽい人にぶつかって謝り倒したり。

朝から散々な気分になつて。工事現場の横を歩いているときは、誰かにぶつかったりしないように細心の注意を払つて歩いた。

けれど、現実は俺を裏切つた。

ぱつんっ。という、硬いものがちぎれるような音が響いたと思つたら、肩に激痛が走り、地面に倒れこんだ。

ゆっくりと時が流れる感覚を味わいながら、俺は頭上から大量の鉄骨が降り注いで来るのを見た。

次に目覚めたときには、俺は真っ白な空間に居た。まったく何も無い空間だった。

そう、なんと言つか、鋼の鍊金術師の真理が居た空間のような場所だった。

「Hey!」

まあ、目の前にギラギラと輝いているおっさんが居るんだがな。
キラキラとかじやないのは、なんと言つかあれだ。

魔法使いが着るよつたなローブなのに、スパンコールドレスのよつな装飾がされているのだ。

「じこれど……あなた、輝いてるな……！」

「ふつ……お主、輝いてるやー。」

自分の姿を見ると、血塗れぬらぬらとしている。まあ、確かに輝いてる事には間違いないけど、こやな方向の輝きだな。

「さて、わしひ神じや」

「ヤツカ」

「ふお？なんじや、驚かんのか」

「まあ、信じてないし」

「ひどつーわし、本当に神なんじやけど？」

「いや、証拠が無いし。だつてさ、俺がナイトラートホテッフだつて言つても信じないだろ？」

「言われてみれば、それもそうじやな。ところが、よくそんなマイナーな神をしつとのの？」

「こや、『モンベイン』でな……」

「なるほど」

そういうと、じいさんは手を振る。そうすると、田の前に窓のような物が現れ、そこでは俺が火葬されていた。

俺の姉。ぽやぽやした家族思いの人が、俺が好きだつて言つてたハーブを俺の棺に……。

いやいや、人間の香草焼きを作るつもりですか？いや、あの量だと鶏も香草焼きに出来ない量だけど。

「どうじゅ？」

「わかつたわかつた。信じたよ。で、何かよつかい？」

「うむ、実はな。お主が死んだのは手違いなんじや」

ハ?ナンテスト?

「じゃから、お主が死んだのは手違いなんじや。ほんとーに申し訳ない！」

そういうと、じいさんはトリプルアクセル土下座をした。
み、見事一惚れ惚れするような土下座だつた……！
クツ、怒るに怒れねーぜ……あそこまで見事な土下座をされちまつたら……。

「それでじやな？おぬしには異世界に転生する権利と、このまま死んで元の世界に転生するといつ、一つの選択肢があるんじや」

ふむ？

「元の世界に転生するのならば記憶は消すが、様様な才能を君には付加しようと思つておる

「異世界なら？」

「つむ、俗に言つチートオリ主になれる」

「異世界でお願いします」

「即決かの。まあ、決断が早いのは美德じゃ。転生する世界と、能力を三つやつづけ

世界か。うーむ、そういうえば、明日はネギまの新刊の発売日だったな。ネギまでいいか。

えーっと、創作物全ての魔法とかは把握し切れないからやめとこう。そうすると、たくさんの魔法が記されてる魔道書とかがあるといよいよな。デモンベインは危ないから駄目だな。

ああ、リリカルなのはにいいものがあつたな。夜天の魔道書でいいか。当然、守護騎士プログラムもないとな。

そうなると、魔力とかも欲しいな。それに、肉弾戦もあるだろ？ から、身体能力も高くないと。

「うむ。分かつたぞい」

「え？ 何も言つてないけど？」

「(E)IJは狭間の世界じゃからの。人と人の精神の狭間もないのじゃよ。

まあ、簡単に言つと、エヴァンゲリオンのあれじゃ。融合しないのは人と神といつ区別にあるからの」

なるほど。

「さて、夜天の魔導書じゃな？それに守護騎士システムは一括りじや。闇の書となっていた時点での魔法は全て記録されておる。しかしまあ、バグはわしの力で修正しておくれわい」

「おお、さすがは神様だな。

「讃めるない。照れるじやろ。そして、魔力じやが……ネギまとやらの世界の木乃香ちゃんの20倍もあればいいじやろ。気とやらぬラカンとやらの10倍ひとつ。これだけあれば十分じやの。

「もう一つあるが……」

「む……わづだ、俺の容姿つて変えられる？』

「よござれ」

「えーっと……不老にして、肉体年齢を変えられて、男の娘のよつな容姿で頼む……」

「オッケー。とこつか、男の娘かの……」

「いいだら、別に。』

「わーて、送る時間帯じやが、何時頃がいい？」

「やうだなあ。ラカンが襲撃する少し前で』

「あい分かつた』

じいさんが手を振ると、空間に黒い穴が。手渡された夜天の書を持ち、俺は穴に飛び込んだ。

プロローグ（後書き）

なんだか急ぎすぎた感があります。

登場人物紹介（前書き）

単行本しか読んでいなかつた為、アスナの設定を全然知らずに適当書いてました。修正しました。

登場人物紹介

国後要。

日本人の男。肉体年齢を自由に変更できる。容姿はリリなのはやでそつくり。

夜天の魔導書の主。魔力ランクはもはや測定不能。はやての三十倍近い魔力がある。

広域殲滅魔法を得意としており、ウォルケンリッターの主としての戦闘能力に特化している。

だが、近接戦闘が苦手なわけではない。ラカンを超える莫大な量の気を持ち、拳の一振りで数十メートルの範囲を更地に出来る。騎士甲冑のデザインはリリなのはやてと同じであり、違いといえばリインとユニゾンすると、銀髪紅眼になる。

基本的に戦闘中はリインとユニゾンしており、銀色の閃光というあだ名はここから来た。

ネギまの魔法も使えるが、あまり好きではないので使うことは少ない。リリカル魔法では得意分野は収束。拡散や広域攻撃とは正反対だが、あくまでも収束が得意というだけなので、問題は無い。

最強といって差し支えない強さの持ち主だが、本人の性格は至って温厚。趣味は料理と音楽を聴くこと。また、音ゲーが異常に上手いが、格ゲーは苦手である。

10歳前後の姿で殆ど「」していたので、今となつては年齢を上げると上手く動けなくなる。なので、基本的に10歳程度の年齢にしてある。

生前の幼い頃は京都近くの関西に住んでいたが、七歳の頃に関東地方に引っ越しした。なので、基本的に標準語を使う。意識すれば関西医が使える。

使用デバイスは夜天の書。夜天の書とは、シユベルトクロイツ、リ

インフォース、夜天の書。この二つ全てを総合したコニゾンデバイスの事である。

独特の死生觀を持つており、本で読んだ『今日は死ぬにはいい日だ』という言葉を座右の銘にしている。

今日は死ぬにはいい日だというのは、その日に心残りを作ったりしない事である。今日死んだとしても悔いは無い。そういう意味である。だからといって死ぬつもりは毛頭無い。

また、彼は一流のロリコンもある。性転換魔法で女になつた場合は一流のショタコンになつてしまつ。ザフィーラのショタフォームを開発させたのは、潜在意識によるもの。

ちゃん付けで呼ばれる事や女装する事に抵抗はあまり無い。彼の家は古い仕来りのある家だったので、小学校に入る前まで、女の子の格好をして過ごしていたらしい。

また、ぽやぽやした姉に着せ替え人形にさせられていたので、ある意味で女装に慣れてるとも言える。前世では男の娘という程ではなかつたが、可愛いという容姿であった事は確か。

転生の際に開き直つて男の娘になつた。アルゴスロリメイドやスクール水着を着せられていたりする。しかし逆に楽しんでいる始末。既に80年近く生きている。不老化しているため、ヘイフリック限界が存在していない。その為、細胞の活性化による治癒魔法でもどんなに酷い傷でも治る。

流石に体の欠損は治せないので、魂の情報を元に体を大量の魔力で再構成する魔法を使う。ちなみに、この魔法はAランク以上の魔導師を五人以上用意して使用する儀式魔法。

本来、人間の脳は150年程度の記憶が限界なのだが、そこらへんはよく分からぬ神の力で何とかなつてゐるらしい。既に確認済み。基本的に髪型はショートボブ程度。肉体年齢変化の要領で髪を自由に伸ばせる。服装によつて髪型を変えるという馬鹿げた真似が出来てしまつ。

魔力値の数値化、5600万。ラカン風戦闘力の数値、40～50万前後。

魔力ランクSSS遠距離戦闘SSS近接戦闘SSS総合評価SSS。

烈火の将、剣の騎士シグナム。

ピンクのストレートヘアをポニー テールにしており、非常に均整の取れたプロポーションをしている。刃のような雰囲気の女性で美人というよりもカッコイイという形容詞が似合う。

外見年齢は20歳前後。和食好き。バトルジャンキー。剣を振つてれば幸せな人。剣術バカ一代という不名誉な渾名をつけられる始末。使用デバイスは剣型アームドデバイス『レヴァンティン』魔力変換資質、炎熱があり、ウォルケンリッターでは最も攻撃に特化している。そもそも防御という考えがあんまり無い。

レヴァンティンはセットアップ時は通常の剣としてのシユベルトフォルムになっている。また、シユベルトフォルムは両手でも片手でも扱えるサイズである。

カートリッジは二重構造になっていると思われる柄の中に装填されており、ボルトアクション式だと思われる。どうでもいいが、放り投げたカートリッジを同じサイズの穴に的確に放り込むコントロールは恐るべき物がある。

カートリッジをロードし、刀身を分離。内部に通されているワイヤーらしきものによつての操作を行うシユランゲルフォルムが存在する。どれだけ伸びるのかは不明だが百メートル以上は確実。

ベルカの騎士は近接戦闘に特化している為に、中距離戦に対応する為のフォルムであり、敵を薙ぎ払うといった事も出来る。しかし、制御が難しくなるため、移動、防御が困難になる。

鞘を柄と接続する事によつて、大型の弓。ボーゲンフォルムとなる。遠距離攻撃が可能になるが、防御は不可能になるし、カートリッジは大量に使うし、移動も口クに出来ないと弱点だらけ。

しかしながら、近距離特化のベル力の騎士にしては遠距離の対策を練ったのは賞賛に値するのではないだろうか。ここまで来ると何処らへんがレヴァンティンなのか分からなくなる。

風呂好き。平日休日問わず、家でやる事が無い。料理も掃除も洗濯も得意ではなく（出来ないわけではない）たいていの場合剣を振つてゐるか、将棋盤か囲碁盤相手ににらめっこである。

日課は新聞の詰め囲碁を解く事。テーブルに向かつてゐる時はたいていの場合お茶を飲んでゐる。恐らくウォルケンリッターで一番日本文化にかぶれてゐる。

また、彼女はゲーム全般が得意ではない。そして、誰も彼女にゲームをやらせない。格ゲームやアクションゲームで負けると、自分ならこうだとか言い始め、拳句の果てにはゲームを破壊する。

囲碁や将棋などの理詰めのゲームは得意らしい。何故かオセロは弱い。

羞恥心が薄いというよりも、あまり気にしない。なので、要と風呂に入つたりする事に抵抗が無い。というよりも、要の容姿が男を意識させるような容姿ではない。

十数年間碁を打ち続けるうちに神の一手を会得（本人談）。もうこの人、騎士じゃなくて棋士になつたほうがいいんじゃないかな。

魔力値の数値化、5400万。ラカン風戦闘力の数値、40~45万。

魔力ランクSSS遠距離戦闘A+近接戦闘SSS。総合評価SS+。

紅の鉄騎、鉄槌の騎士、ヴィータ。

ベル力の騎士にしては珍しく、近・中・遠の全てをこなせるオールラウンダタイプだが、前面での突破を好む。

シグナムは手数の多さで敵を圧倒するタイプで、制圧力は高いが突破力が低いため、ヴィータは突破力に優れ、それを補う事が出来る。

突破力が高く攻撃に優れる反面。防御に徹すれば盾の守護獣たるザフィーラに勝るとも劣らぬ力を発揮する。拠点制圧攻撃に等しい攻撃も出来る万能タイプ。

使用デバイスはハンマー型アームドデバイス『グラーファイゼン』ゲートボールのステイックに見えるという人も居るが、まずはゲートボールのステイックの形を調べよう。

グラーファイゼンの基本形態はハンマーフォルムであり、両手での打撃が主な戦闘方法になっている。片手で扱う事も出来るが、慣れていないと体が振り回される。

ハンマーフォルムは魔法の補助にも優れしており、シユワルベフリーゲンの誘導制御や防御魔法の補助も得意とする。

突破力に優れる強襲形態のラケーテンフォルムがあり、ハンマーの片方に推進器が、その反対側がスパイクに変形する。

両手でしっかりと握り、回転してからの攻撃のラケーテンハンマー専用のフォルムとも言える。また、この形態は魔法補助機能が落ちる。というか、いらないからオミットしたのではないだろうか。

本来ならば変形時にカートリッジを一発使用するが、要のバカみたいな魔力のお陰で彼女は魔力ランクSSSとなつており、カートリッジを使用せずとも即座に変形可能。

とはいっても、カートリッジを使用したほうが攻撃力が上昇するため、相手によつてはカートリッジを使用する。魔力ランクは保有量であり、一度に使える量が変化するわけではないのだ。

突破力、面制圧、打撃力の超特化とも言える、ギガントフォルムが存在する。ハンマーフォルムが金槌ならば、ギガントフォルムは杭打ちハンマーである。

更に巨大化し、恐らくは20メートル前後の大ささにまで変化させ事が可能。ただし、重量が増大し、取り回しも悪くなり、上段からの打ち下ろし位しか出来なくなる上に、魔力使用量が多い。

そのため、多用できる形態ではない。はずなのだが、魔力が増えたためにいくらでも使えてしまう。今までの五十倍近い魔力があるの

だから当然ともいえる。

家事はそれなりに出来るが、料理は要の独壇場であり、これといってやる事はあまり無い。なので、家ではたいてい遊んでいる。というか、他の皆も遊んでいる。

要の次にゲームが上手い。ショットチャウガセ情報に踊らされる。新しいゲームよりも古いゲームのほうが好きらしい。お気に入りは星のカービィスペデラ。しおりちゅうデータが消えては要に泣き付く。原作と同じくのろいさぎを持っている。店に売つていなかつたので要お手製。ヴィータが欲しがつたのではなく、要がふと思いついて作ったもの。

赤毛を三つ編みにしている。毎朝要が嬉しそうに、ヴィータの髪の毛をまとめている。そりゃあもう、お母さんという表現がピッタリなくらい。

外見年齢は八歳前後。ヴォルケンリッターの中では一番のちびっこ。外見年齢に関しては要に一番近かつたりもする。

口が悪く、手も早く、直情的な負けず嫌い。子供っぽい性格をしているが、戦闘の利害を冷静に見極める事も出来る面がある。また、口が悪く手も早いが、別に悪い子ではない。心根は優しい子であり、要に非常に懐いている。この点は原作と変わらないのではないかだろうか。

たいていの場合、風呂は要と入る。性的な知識を持ち合わせてはいるが、要に対する嫌悪感は無いらしい。そこらへん、彼女の懐き具合が伺える。

魔力値の数値化、5300～5400万。ラカン風戦闘力の数値、40～50万。

魔力ランクSSS遠距離戦闘S+近距離戦闘SS+総合評価SSS

-。

風の癒し手、湖の騎士シャマル。

金髪のショートボブのほんわかした雰囲気の美人さん。美女ではなく美人さんである。ここへん重要。

外見年齢22歳前後。しかし、三歳くらいの違いでどうとこう事もなく、シグナムよりも年下に見られる事もしばしば。

全員の中で一番目に年上で、お母さん。というよりはつかり屋さんなお姉さんという立場がピッタリ。

ほんわか優しいお姉さんで、少しうつかり屋さん。ちょっとと気が弱い。ヴォルケンリッターでは直接戦闘に参加しない参謀。その性格からか、権謀術策をめぐらせるタイプではない。しかし、それは人間としての感情があるからであり、本来のヴォルケンリッター。つまり、プログラムとしての彼女は冷徹非情である。

ヴォルケンリッターの中では唯一家事を担っているが、料理はあまり得意ではない。しかし、食べた人が気絶する程の下手糞さではない。そもそもそんな料理が作れるわけがない。しかしミラクルでワンドフォーな料理を作る事がある（塩チヨコならぬ出汁チヨコ）そのため、担当している家事は掃除と場合によつては洗濯。基本的に洗濯は要がやつている。やつぱり要がお母さんである。

使用デバイスはペンデュラム（振り子）型デバイス『クラルヴィント』一切の攻撃力を持たない、完璧な補助特化デバイスである。基本形態のリングフォルムは両手の人差し指と薬指にはめており、この形態では強力な魔法補助と妨害機能を有する。

また、公共の通信施設。つまる所は携帯電話等に接続しての通話が出来たりもする。携帯がいらない。と思いきや、受信が出来ない。もう一つの形態であるペンドルフォルムは指輪の石が分離して、紐でつながって動かす事が出来る。これで攻撃も出来るが大した攻撃力は無い。

特殊な転送魔法、旅の鏡はこの形態でしか使用できない。ちなみにだが、旅の鏡は転送魔法というよりも取り寄せ魔法といったほうが正しいかもしない。

魔力値の数値化、5000～5200万。ラカン風戦闘力の数値、
3000～5000。

魔力ランクSSS遠距離戦闘・近距離戦闘・治癒魔法SSSランク。

蒼き狼、盾の守護獣ザフィーラ。

灰色の頭髪に褐色の肌で男性と、ウォルケンリッターの中では浮いていたりする。

外見年齢は20代半ば。ウォルケンリッターの中では一番年上。性格は寡黙で実直。頼れるおとーさんといった所だろうか。

狼形態と人間形態があり、原作とは違つて基本的に人間形態で過ごしている。しかし、スーツを着るとホストに見えるのが悩み。

要はザフィーラの狼形態でも人間形態でも背中に乗るのが好きらしい。広い背中に憧れるのだそうだ。

ウォルケンリッターの中で唯一デバイスを持たない。そもそも、守護獣は使い魔と同じような存在であり、守護獣はデバイスが必要ない。

近接格闘に優れており、ナギやラカンとの殴り合いで勝利した事もある。魔法戦闘では防御に徹する事が多い。

盾の守護獣の名を冠する通り、彼の防御魔法は鉄壁であり、生半な魔法では輝を入れる事すら適わない。

さり気なく要の次に家事が上手い。彼は真面目な性格なので、料理は本の通りにやるので、まず失敗しないのだ。

家では特にやる事も無いので、ヴィータのゲームに付き合っている。また、要がドラゴンボールを読ませた結果、自分の戦闘力がサイバインマン程度と落ち込んだりもした。要でもベジータ戦のピッコロ程度だから仕方ない。

物静かな性格で、やる事が無いと読書をしている。また、何でも読む。官能小説を真面目な顔で読んでいてシグナムに殴られたことが

ある。

要が思いつきで言つたショタフォームを習得。そうすると魔力の消費が少ないので、家ではその格好で過ごしている。

読む本すら無くなると昼寝を始める。日の差し込む窓際で体を丸めて眠るので、人によつては垂涎の姿だつたりする。主に委員長とかまた、要もそれに付き合つて昼寝をしたりする。一番ほのぼのしてゐる二人組みだつたりする。

魔力値の数値化、5200～5300万。ラカン風戦闘力の数値、30～45万

魔力ランクSSS近距離戦闘SS・遠距離戦闘AA+総合評価S+。

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース

銀髪に暗紅色の瞳。シグナムよりも少し年下に見える女性で、最後の守護騎士。

本来ならば400ページ以上の蒐集を行わなければ、主の魔力が枯渇してしまうので、安全装置として400ページ以降から呼び出せる。

守護騎士とは言うものの、古代に存在した人間を元に形成された人格プログラムではなく、古代ベルカのユニゾンデバイス。

本来ならば、彼女も夜天の書には付加されていない機能。何時、何処で、誰が彼女を追加したのかは不明。

ユニゾンデバイスとしての性能は非常に高い。また、神からの贈り物と言う事になつてゐるので、要とのユニゾンの適合率が100%という馬鹿げた数値になつてゐる。

彼女単体での魔法行使も可能で、性質、運用の方向性は要とまったく同じ。というよりも、要がリインフォースの戦い方を模倣したようなものだ。ただ、要は収束系統に才能があり、リインフォースは拡散系統に秀でている。

なので、二人が戦うと先が読めてしまうので、どちらが上手く不意を突くかしか決着がつかない。大抵の場合は引き出しの多い要が勝つ。

広域殲滅魔法を連射したり、蒐集した魔法を即座に改竄する馬鹿げた処理速度、事実上最高のユニゾンデバイスである。

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、というのはリインフォースという名前の意味である。直訳では強化や援軍であるが、意訳の仕方ではそうなるのではないか。

援軍は戦域を支える者達であったり、仕事を手伝つたり、幸運の追い風というのも後方から来る事であり、援軍とは当然ながら後方から来る。

また、守護騎士であり、ユニゾンデバイスである彼女は戦う為の存在。なので、リインフォースと言つ名も頷ける。

要に髪型を遊ばれる人筆頭。ひまな時は本を読むか座つてボーッとしてるので、ゲームをしてたり剣を振るか頭を抱えて唸る二人よりも、髪を弄るのに調度よかつたりするのだ。

本人も本人で外に出る事が今までに一度もなかつたので、いろいろと新鮮らしい。ファッショニも料理にもお菓子にもお洒落にも何でもかんでも興味を示す。

外に出ればあちこち見回し、あっち行つたりこっち行つたり、まるで子供か外国人。実際のところ外国人ではあるのだが。

物静かな性格だが、不思議な物を見つけたり新しい物を見つけると興味心身で目を輝かせる子供のような人。ヴォルケンリッターの記憶を共有出来ていたりもするのだが、食べる事やお洒落などの、人間的な楽しみをしたのは殆どなかつた事なので、かなり樂しいらしい。特に食べる事が好きらしく、暇で外に出ていいのならば大抵おいしそうなものを求めて旅に出る。

また、ヴォルケンリッターはプログラム。厳密に言えば生命体ではないので、太る事がない。質量保存の法則は何処に行つたとか言いたくなるが、デバイスの時点で喧嘩を売つてるのでお察しください。

い。

なので、色々と女性を敵に回してしたりする。また、永遠の十代後半なので世の中の女性の百パーセント近くに喧嘩を売っている。合計すると全人類の推定六割以上に喧嘩を売っている。

魔力値の数値化、5400万。ラカン風戦闘力の数値、40～50万前後。

魔力ランクS S S S 遠距離戦闘S S S S 近距離戦闘S - 総合評価S S -。

ネギ・スプリングフィールド

ナギ・スプリングフィールドの息子。村を襲撃された折に要に弟子入りした。要は紅き翼の所属だという事を明かしては居ない。非常に優秀な生徒で、反則レベルの習得速度を誇る。既に上位古代語魔法も扱える。

タイプは魔法剣士で、シグナム、ザファイーラ、ヴィータに武器と拳の扱い方を教えてもらつた。とはいっても、ザファイーラは我流で組み上げた技であり、教えられたのは人の殴り方くらい。

レヴァンティンと似た形の剣を使用しており、原作とは違つて魔法拳士ではなく魔法剣士となつた。原作よりもクソ真面目な性格ではない。

別荘の併用による修行のため、2003年時点で15歳前後の年齢となつてゐる。

現在使用できる魔法は、原作で使えた魔法に加えて千の雷とアクセルシューター。デバイスが無いので4発程度しか制御出来ない。だが、魔法の射手よりも遙かに緻密に制御出来るので多用される。

魔力ランクAAA + 近距離戦闘S - 遠距離戦闘S 総合評価S +。

犬上小太郎

関西呪術協会で捨て駒扱いされていた狗族と人間のハーフの少年。狗族獣化が出来る事からして、人間よりも狗族の血が濃いらしい。我流で自分に合った武術を編み出す事が出来たことからして、豊富な戦闘経験と類稀なる才能がある。

我流で獣化の新たな形態を編み出したのは素晴らしい才能とも言える。非常に優秀な人材だったが、要が関西呪術協会から搔つ攫つてきた。

関西呪術協会はハーフの少年なんぞどうでもいいという事で、引き取つてもらえて喜んだくらいだった。

優れた気の使い手で、犬神を使った転移術が使える。犬神を使って空を飛ぶことも可能で、非常に優秀。ネギと同列の天才。ネギと同じく別荘の修行で15歳前後に成長している。ザフィーラに憧れているらしい。群れのリーダーに対する憧れのようなもの？ザフィーラとは違い、細マツチヨ。狗族とは犬の事なので、厳密には狼のザフィーラとは種族が違うのだが、犬は狼が原種なので似たようなものだろう。

魔力ランク不明。近距離戦闘S - 遠距離戦闘A - 総合評価AAA+。

神楽坂明日菜 アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

麻帆良学園に通う中学生。魔法世界のウェスペルタティア王国の王女。

ウェスペルタティア王国の子にのみ現れる異能力、魔法無効化能力を所持しており、攻撃魔法などが一切通用しない。

本人の意思に応じて反応し、本来ならキャンセルされない治癒魔法も意思次第ではキャンセル可能。洗脳や記憶改竄もキャンセル可能だが、本人の意思が特殊な魔法陣を使用すればキャンセルされない。

原作とは違い、記憶を削除されていない。また、魔法生徒として扱われており、ウェスペルタイニア王国の宝物であるハマノツルギを所有している。（オリ設定）

ハマノツルギは何故かハリセン形態と大剣形態があり、ハリセン形態は武器としての性能を持つてないために敵を傷つけないために使用される。

ハマノツルギの効果と本人の能力である魔法無効化能力を最大限に発揮する呪文があり、それを使用することによつて大規模魔法を遠距離から無効化可能。

呪文は無極而太極斬。カイ・アナルキアース・トメー・アルケス

大規模魔法消失現象中でも使用できる王族の魔力を所持し、気も扱える。

また、幼い頃に既に感掛け法を習得しており、個人としての戦闘力は非常に高い。非常に優れた戦闘のセンスがあり、一流の戦闘者。記憶を封印されていないため、クールで知的。オジコンではない。だが、男にもあまり興味はない。木乃香のルームメイト。

魔法は使えない事も無いが、魔法の才能は余りない。戦闘の補助として飛行魔法などを取得している程度。生糀の魔法剣士。

好物は要の料理。特技は料理だが、野戦料理みたいなものである。嬉々として兔を搔つ捌く中学生はかなり不気味。

実年齢は既に百を超えている。弱小国であるオステイアが戦争に勝つ為の道具として使われていた。

詳しい事は不明だが、既に百を超えている為、何らかの不老化を施されていたと考えられる。

タカミチ・T・高畑

今年で三十歳前後の男性。紅き翼所属だつたが、戦闘に出た事は殆どない。先天的に魔法詠唱が出来ない体质で、無音拳と感掛け法を習得している。

その後、力ナメにデバイスを与えられ、デバイスが呪文詠唱を分担

してくれる為、魔法が使えるようになつた。デバイスは最低限の機能のみで、呪文詠唱をするだけになつていて。

術式の構成や維持、制御は全て自分でやつていて。呪文詠唱専用に作ったデバイスのため、こちらの世界の魔法だけしか扱えない。魔法が使えるようになつたため、本国の戦闘クラスはAAA。また、マギスティル・マギとしても認められるようになつた。

才能はなかつたが、努力を積み上げた努力の人。幼い頃に力ナメに一目ぼれしていた。後に男だと知つて更に修行に打ち込むようになつてしまつた。

最近では男でもいいじゃないか、いや、むしろ男の娘じゃないと駄目だという意味不明な境地に達し始めている。人間とは進化する生き物だ。

頻繁に出張している。担任としての職務は殆ど果たせていない。麻帆良学園でも最強だが、魔法世界でもかなりの強者。原作のカゲタロウと戦えばいいとここまでいくレベル。

所持しているデバイス、アイドネウスとはハーデスの別名。アイドネウス（見えるもの）から来ている。

魔力ランクB 近接戦闘A + 遠距離戦闘AA + 総合評価AAA+。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル。

600年の時を生きる真祖の吸血鬼。600万ドルの賞金首だったが、力ナメの動きによって既に失効となつていて。

ナギと戦えばどちらが勝つか分からぬ程度の強さ。遠距離戦に持ち込めば確実にエヴァの勝ちで、近距離戦に持ち込まれればナギの勝ちとなる。

魔法使いのタイプとしては砲台としての役割である魔法使い。資質としては拠点制圧や面制圧が得意なタイプ。

断罪の剣を同時に五本発生させたり、二十メートル以上の氷神の戦

槌を作り出すのは高位の魔法使いなら珍しくもないが、無詠唱で作り出すのは難度が高い。

それも無造作に作り出しているため、非常に高い技量を持っていることが分かる。事実上、最高の魔法使いとも言える。

反面、必要でなければ学ばないとはよく言ったもので、不老不死であつた為に治癒系統は不得意。解呪は15年間登校地獄を解除する為に学んでいたので、それなりに出来る。

自分自身を見てくれるカナメに一目惚れした。カナメは普段は兎角、占める所は占める奴なので、そこらへんの信頼もある。

恋人になって一日目で【千葉滋賀佐賀！】をしたエロゲも真っ青な人。着飾るのが趣味なのかは知らないが、ゴスロリや甘口りを好んで着る。

暗い色ではなく、明るい白やピンクの甘口りを好んで着ている。しかも普段着。ゴスロリやら甘口りを普段着にしていたら、普通は痛い人認定されてしまうが、彼女はそれが似合ってしまう。

隣を歩くカナメはどんな気分かと思いきや、似合っていると絶賛するわ、不釣合いになってしまふから自分も着てしまふ始末。

更には顔は八神はやってなので、かなり似合つてしまつている始末。麻帆良学園の双子口りとは一人のことである。もうやだこのバカツブル。

ちなみに、吸血鬼になつたのは10歳だが、数え年ではなく満年齢。誕生日の朝に吸血鬼になつっていたのだから満年齢だろう。

既に初経は来ているらしい。子供が出来るかどうかは定かではないが、生まれたとしたら、この世界では未だに生まれていないダンピールが生まれるのだろう。

魔力ランクS + 遠距離戦闘SS 近距離戦闘AAA + 総合評価SS+。

ナギ・スプリングフィールド

紅き翼のリーダー。最強の魔法使い。紅き翼はバグキャラの巣窟を表す人間。

元は旧世界の出身の魔法使い。突然変異で生まれた為、莫大な魔力を身に宿す。

究極技法のはずの感掛けを見よう見まねで適当に成功させたりと、理不尽なほどの才能を持つ。

千の呪文の男という二つ名があるが、実際の所、覚えている魔法は雷の暴風や雷の投擲、それに千の雷や魔法の射手などの良く使う魔法だけ。

それ以外は全部あんちよこに記されている。術式構成が感覚タイプの天才なのか、非常に上手い。やっぱり理不尽な人。

適当にやつて、忍者でも四人が限界の実体と全く同じ分身を10体以上出したり、千の雷一発で鬼神兵を薙ぎ倒したりと、やっぱり理不尽な人。

卓越した戦闘センスの持ち主。ラカンと13時間以上も殴り合いを続けられるほどのスタミナ。拙作ではヴォルケンリッターの働きで十分前後で終わってしまったが。

直情的な人間。馬鹿だが頭が悪いわけではない。基本的にいい奴。殴り合いをすれば笑って許せる。お人よしとでも言つべき人柄。

魔力ランクS遠距離戦闘SS+近距離戦闘SS+総合評価SUS。

ジャック・ラカン。

最強の傭兵剣士として名高い。

実は五十歳を超えている。彼は長寿種族のヘラス族なので、人間換算で未だに三十代前半。

元々はそれほどに強くもなかつたが、努力を積み上げてそこまで至つた。タカミチと違つて才能はあつたが、タカミチと同じく努力の人。

見よう見まねで適当に作った重力魔法で脱出不可能の異次元空間を
破碎するなど、かなりの理不尽っぷりを見せる。

適当に作った技で山を吹っ飛ばしたり、真剣に技の名前を考えたり、
戦艦並みに大きい剣を操ったりと、紅き翼の三人目のバグキャラ。
アーティファクトは千の顔持つ英雄。ありとあらゆる武具に変する
变幻自在のアーティファクト。宝具とは言う物の、Fateの宝具
のように理不尽な性能はない。とはいっても十分に優れた武器。
全力で放った技は核兵器を連想させるほどに強力。雷の速度で動く
ネギをカウンターで迎撃し、殆どの武具を見事に扱い、自分の腕に
突き刺さった杭を戦闘に使用するほどの優れた戦闘センスを持つ。
ネーミングセンスはない。そよ風爆風拳という矛盾した技名を作る。
自分にしかできない技を編み出した挙句に金を払わせようとする。

魔力ランク測定不能。遠距離戦闘AA+近距離戦闘SS+総合評価
S+。

フイリウス・ゼクト。

詳細不明の謎の少年。ナギの魔法の師匠でもあった。爺臭い言葉で
喋る。

非常に優れた魔法使いだが、どちらかといふと魔法剣士。フイリウ
スとは息子という意味がある。

近衛詠春。

元は青山の神鳴流剣士。紅き翼の最初期メンバー。苦労人。
バグキャラ揃いの紅き翼で頑張っていた人。とはいっても実際の所、
彼は非常に優れた剣士であり、他の面々がバグキャラ過ぎただけ。
クルトに神鳴流を教えた。現在は関西呪術協会の長をやっている。
カナメがおふざけで作った波紋の呼吸法により未だに若々しい。

アルビレオ・イマ

紅き翼に所属していた魔法使い。非常に優れた魔法使い。重力魔法を使いこなす。

現在は図書館島の地下にいる。自分の欲望に結構忠実な人。その癖外面はいい人。

カナメにゴスロリメイドやスク水などを着せて楽しんでいた。男の娘もイケてしまう人。大戦時はタカミチを煽つていた。

彼のアーティファクトであるイノチノシヘンは他人の人生を蒐集した記録であり、その点では夜天の書に通ずるものがある。

また、その記録を元にその人間を再生し、模倣することが出来る。とはいっても結局は模倣なので、完璧に真似る事は出来ない。

自分の実力以上の人間は一回限りの三十分だけの完全再生が可能。中々にチートなアーティファクト。

カナメの人生も蒐集したが、この世界に来てからの人生しかないのでは、あんまり面白くない。しかも四分の三が修行の記録なのでむしろつまらない。

クルト・ゲーデル

紅き翼に半分くらい所属していた少年。天才というべき人物。見よう見まねで神鳴流を再現できたほど。

現在はメガロメセンブリアの元老院に所属している。結構熱血漢。知的に見えるが結構馬鹿。

ガンドルフイー。

彼のあだ名はカナメの中では黒ひろゆきである。

登場人物紹介（後書き）

何となく作った。後悔はしていない。本編書かないでなにやつてるんだろう。ランク付けはそれなりに真面目に作ったけど適当です。

第一話 ヴォルケンロッターの出金こと紅き翼との出金こと（前編）

一話目です。結構長いとは思こます。

第一話 ヴォルケンリッターの出会いと紅き翼との出会い

次に気が付いたとき、そこは広い荒野だった。

「夜天。セットアップ」

「Ich befreie eine Versiegelung
(封印を解除します)」

何を言つてゐるのかさっぱり分からぬけど、意味だけは頭に伝わつてくる矛盾。

「Anfang(起動)」

どうでもいいけど、リリなのベルカ語つて、ドイツ語と同じなんだよ。

多分だけど、エースコンバットからのオマージュだよね。だって、ベルカでドイツで強力な軍事力つて、それしか思いつかないよ。

「夜天の書の起動を確認しました」

赤といふか、ピンク色の髪をした人。といふか、シグナムさんですね。

「我ら、夜天の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にござります」

化学兵器（不味い飯）製造機のシャマルさん。

「夜天の主の元に集いし雲」

影が薄い人、ザフィーラ。この時は人型なのにね。

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

エターナルロリータ、鉄槌の騎士ヴィータだよ。どうでもいいけど、俺って口リコンなんだ……。

つーか、こいつら、動かないんだカビ。どうしたらいいか……そ、そうだ！それっぽく振る舞つてみよう！

「我が名は国後要。夜天の王。ヴォルケンリッターよ、汝等を我が騎士と認めよ！」

右手を心臓の辺りに持つていき、瞳を閉じ、答える。

「つと、堅苦しいのはここまで。みんな、ちゃんと立つてくれ

「は、はあ……」

シグナムが一番困惑したが、ヴィータとかシャマルはすぐに従つてくれた。

「さて、俺の名前はわざも言つたとおり、国後要だ。主とか、畏まらなくてもいいぞ。俺としては、フレンドリーに接して欲しい」

「ですが……」

その後、十分ほどの押し問答の結果。それなりにフレンドリーに接してくれることになった。

まあ、シグナムは結局敬語をやめてくれなかつたが。

「力ナメ、ここって何処なんだ？」

「うん？ 魔法世界だな。ベルカでもニシドでもない、この世界特有の魔法が使われてるみたいだよ。次元航行技術はないみたいだけど」

「そうですか……」

その後、この世界について、色々と説明。今は大戦中だとか。ちなみにだが、リンゴフォースも呼び出した。今代の主は、歴史上最高の力の持ち主らしく、主の力に依存するヴォルケンリッターも強くなっているらしい。

何しろ、全員が全員、S S Sランクになってるんだから……。話を聞いてみたところ、俺の三十分の一もあれば、魔力量だけでSランク認定されるらしいのだ。なんと言うチート。

そうだとしたら、俺のランク幾つだよ。S S Sを超えたE Xランクかよ。まあ、細かいことは気にしないでおこづ。うん。ちなみにだけど、みんなの騎士甲冑は原作と同じにした。俺もはやってと同じ騎士甲冑だ。ぶっちゃけると設定がメンドイ。スカートだけ気にはしない。今の俺は男の娘。

「さて、そろそろ行くとしよう」

「何処にですか？」

「ん、てきとーにな。夜天は旅をする魔道書。だから、主も旅をするのや～」

そう言って、俺たちはふらふらと歩き出す。一十分も歩いていると、俺でも感じ取れるくらいに大きな魔力を感じた。

多分だけど、アレがナギだね。そう思つて歩いていると、俺たちの向こう側から赤毛の馬鹿と、むつり侍とロリジジイに胡散臭い人が歩いてきた。

そして、俺たちの姿を確認すると、先頭の馬鹿。ナギ・スプリング
フィールドが声をかけてきた。

「おー！そこのおまえ！」

「あん？」

ショベルトクロイツで肩をトントンと叩きながらそいつを見る。う

ていうかシグナム。剣抜くな。少し落ち着け。

「おまえ、いつたい何者だ？」

「うーん? 夜天の王。国後要だ!」

一
王
……
ですか?
」

「うん、聖王とは違うけどね」

「まあけえー」と匂いを嗅ぐ！俺と勝負しな！」

おい、何だその馬鹿みたいな思考は。明らかに筋じゃねえか。

「サッフィー、相手してやれ」

「御意」

ナギの千の雷を、盾の守護獣らしく、ザッフィーは防いで拳での殴りあいへと発展していく。

「悪いが、こちらも相手をしてもらひ」

そう言つて、ムツツリ侍こと、近衛詠春が刀を抜く。

「シグナム」

「はい」

剣には剣だろ？

「では、私も」

胡散臭い人。アルビレオ・イマが黒い塊。重力魔法を出す。

「む……ヴィータ。頼む」

「分かつた！」

飛び出していく、ヴィータ。アルビレオは原作でも戦い方がよく分かってなかつたからな。

「ふむ、最後はワシジヤ。相手をしてもらおひ」

「シャマル。下がつてろ」

「は～い」

軽いなオイ。まあいいか。

「リイン。ユービンするぞ」

「はい」

「「ユービン・イン!」」

あ、そういうえば、平常時の容姿とか確認してなかつた。まあいいか。背中から三対六枚の黒い羽が生える。これは余剰魔力を外部で制御しているエネルギー・フィンだ。戦艦からの魔力供給を受ける人間とかなら大抵作つて使える。

俺の場合は、体外で即座に魔法を起動させるために使われている。

歴代の夜天の主は魔力の素質が高いからな。

ちなみにだが、このフィンはイメージによるものなので、人によつて形が変わる。

「刃以て血に染めよ！穿て、ブラッディダガ！」

二十一発のブラッディダガを作り出して発射する。

しかしながら、ロリジジイのゼクトは軽い身のこなしで回避する。ブラッディダガは誘導制御が出来るが、弾速が速いので、戻すには直線的にターンさせるしかない。

ヴィータのシュワルベフリーゲンならば弧を描いて戻す事も出来たのだが。まあ、どうでもいい。

俺はブラッディダガの誘導制御を手放し、消滅させる。その隙にゼクトは瞬動で俺に接近していたが。

「闇に染まれ。デアボリックエミッション」

俺を中心に放射された広域攻撃魔法によって、魔力を大幅に削り取られる。

それに、殴られたとしてもバリアジャケットを貫くほどの腕力が出来るわけもない。

多分だけど、ナギカラカンくらいじゃないと無理だと思つ。あるいは、豪殺居合拳ならいけるかも。

魔力を削られたことに驚いたゼクトは後ろに下がり、距離を持つて魔法を使おうとしている。

詠唱の言葉が発音がよくわからないけど、多分だけど雷の暴風とかだと思う。

「パンツァーシルト！」

軽く腰を落とし、プロテクションを斜めに展開する。
発射された雷の暴風らしきものを軽々と吹き飛ばす。残念なことに、そちらの魔法と違つて純粹な防壁だからね。

属性の相性とか、展開時間とかの欠点があるんだろうけど、いつもにはそんなものはない。純粹に術式の構成と魔力量の問題だから。リインと俺が同時に制御をしているので、なれない俺が展開しても、これだけのふざけた硬度があるので。

「鋼の轄！」

拘束魔法をゼクトの足元から展開。幾本もの鋼の鎖のようなものが飛び出し、ゼクトを拘束しようとする。

やはり、身軽なステップで避け続け、俺は更に数を増やしていく。そのうちに、どんどんと身動きが取れなくなつていき、少しづつ攻撃が命中していく。

鋼の轄の制御は俺が担当し、リインにはもう一つの魔法を担当してもらひ。

空に銀色の魔法陣が幾つも展開され、そこに強大な魔力が集中していく。

「響け終焉の笛……ラグナロク！」

そして……ゼクトは光に包まれた……。あ、俺は非殺傷にしてるから死んでないよ？

思念通話でもみんなに非殺傷にするか、殺傷設定でも殺さないようにしていろって言つたし。

というか、非殺傷設定という設定が存在するかどうかも分からなかつたので、出来るだけ傷つけないようにといって置いた。

一人でも死んだら原作がどうなるか分からなかつたからな。

三十分ほどして、全員が全員フルボッコになっていた。

一番魔力が強いナギですらS+の使い手で、詠唱もアンチョコ頼り。つまるところ、デバイスなしで魔法を使つていてるようなものなのだ。それを補つて余りある戦闘センスがあるので、SSSランクといふざけたレベルのヴォルケンリッター相手では分が悪かった。というか、シグナム達が居れば、恐らくは国を落とせると思う。だつて、リリなのだと、Sランク同士が戦うと町が壊滅するって話だし。

SSSランクともなるとどうなるか分からん。だって、こいつらカートリッジ無しでカートリッジが必要な魔法使つてんだもん。ギガントフォルムをカートリッジ無しとかふざけてるんですけどね。流石に時間掛かるみたいだけね。

「主力ナメ。この者達はどうすれば？」

「ん~?まあ、眼が覚めるまで待とうか?…びつやらだけど、この人たちかなり強いみたいだし、仲間に入れてもうつのもいいかもね」

「なるほど」

「力ナメ~腹減つた~」

「む……」

ヴィータに騎士甲冑の裾をつかまれて、上目遣いで頬まれたら我慢しろともいえない。

シャマルとかだつたら即座に我慢しろと言い捨てるのだが。俺は幼女には優しいんだよ。

「仕方ないな。ここらへんは森があるし……つつてもさつきの戦闘で殆ど焼け野原だけど、何か動物が居るかもしねり。大物を見つけたら思念通話で連絡すること。それじゃ、みんなで森を探そう」

一応、シャマルを見張りとして残した。だつてシャマルつて拘束魔法くらいしか使えないんだもん。

まあ、ナギたちは大分魔力も削られてるし、拘束するのは難しくないだろう。彼女もアレでも百戦錬磨のヴォルケンリッターの一員なのだから。

三十分程森を飛び周り、兎を捕まえたが、全員で食べるには足りないので逃がした。

シグナムの思念通話で竜が出たと言われたが、それほど強い相手ではないそうなので、バトルジャンキーの彼女に任せることにした。シグナム以外の全員が一箇所に集まり、今まで一言しか喋つていなかつたザフイーラと話して見る事にした。

「ザツフィー。君って守護獣なんだよね？」

「はい」

「素体は？」

「狼ですが？」

「ふむふむ。ところでだけど、青い狼って見たことないけど、ベル力では結構居たの？」

「いえ、違います。守護獣の毛色は魔力光に依存します」

なるほど。だからアルフの毛色がオレンジなんだな。どうでもいいけど、使い魔と守護獣の魔力光って主の魔力光に依存するんだろうか。

アルフしか使い魔が出てないから詳しく述べ分からぬけど、アルフとフェイトの魔力光つて似てたしな。

ザツフィーは誰かが作った守護獣をヴォルケンリッターに組み込んだとも考へられるし。

「うーん……ザツフィーには氣を習得してもらいたいよなー……」

かめはめ波とか出来そうだし。シグナムにはヒテンミツルギスタイルとか使ってみて欲しい。飛天御剣流じゃないのがミソ。

俺としてはこの世界の魔法を覚えてみたい。
いっしょにカマイタチを！

そして、指パツチンと

「手伝つてやろうか？真つ二つだけどな！フハハハハハ！」

「あ、主？」

「あ、ごめん」

いつのまにか声に出してたつぽいな。何かザツフィーがおびえてる。今は人間形態なのに、耳をピン…と逆立ててる姿はなんとなくだが、かわいく思える気もある。

「アリスが口の「ハーモ」が出来たんだから、ヤマハにはシヨタフォームが出来てもおかしくはなさそうだが。 というか、アレって変身魔法なのか、使い魔としての特性なのかよく分からんんだよな。

「使い魔……使い魔か……」

くるりと辺りを見回し、フェレットっぽい動物を発見。ショベルトクロイツで拘束魔法を発動し、引き寄せる。

「なあ、シャマル。守護獣作成の術式つて知らん！？」

振り向くと、ザツフィーが漢泣きをしていた。

「あ、主！捨てないでください！」

によによとうつざい笑みをしている、シャマルにリインフォース。ヴィータは素直に笑い転げている。

「主！主～～～～～～！」

全力全開の魔力放出でザフイーラをぶつ飛ばし、手の中にいたフェレットっぽい動物はミンチに。うええ、グロい。

十分ほどして、シグナムがそこいらの木と同じくらい大きな竜をバイ
ンドっぽい拘束魔法で引っ張ってきた。
ナギたちはいまだにおきない。なので、さつさと調理を開始することにした。残念ながら、調味料がない。なので丸焼きである。
しかし、俺がしつかりと火加減をして、上手く焼けた肉を食わせてみると、全員が美味そうに食べている。
もしかしてだが、古代ベルカの料理ってロンダンと同じような料理なんじゃ……。

「ん〜〜〜」腹減った

「おう、
目が覚めたか？」

「あ！ テメエ！」

俺を見た瞬間に殴りかかってきたが、ザッパーに殴り飛ばされた。

「ザッフィーは、強いね

「おつがとわざれこまか」

そこは唸り声のような咆哮を上げよひぜーいや、ザッフィーだと黙目かな。筋肉と身體とロマンが足りない。

「あーって、いきなりなにしゃがるー。」

「それはこのちのセリフだ馬鹿野郎。いきなり喧嘩は吹っかけてくるし」

「あー……わらい。でだな、おまえ、名前は？」

「国後要だ。要でいいぞ」

「じゃあ、カナメ。紅き翼に入らないか？」

「ん~?みんなはどうする?」

「主の意向に従います」

「あたしはカナメについてくぜ」

「ん~、私はカナメがやつの意ひとおつに」

「主の願いが我等の願いですか」

「私もです」

上から順に、ザフィーラ、ヴィータ、シャマル、シグナム、リイン
フォースだ。

「んじゃあ、俺達は紅き翼とやらに入るぜ。おまえらとなら、退屈
はしそうにない」

「よつしゃー！」

ん~原作だと七人しか居なかつた紅き翼が一気に13人に増えたな。
いや、でもな。七は孤独な数字で、魔術的な意味を持つけど、13
つて言うのも魔術的な意味を持つからな。

13つて言うのはかなり不吉な数字だからな。西洋の忌み数。十三
番目のアルカナは死神。ジェイソンの蘇る日は忌み数が元だし、十
三は死刑台の段数もある。
どうでもいいが、ゴルゴ13も忌み数を元にしてると思うんだ。果
てしなくどうでもいいけど。

第一話 ヴォルケンロッターの出金こと紅き翼との出金こと（後書き）

改行が難しい……

6 / 8 23 : 17 修正しました

第一話 脳筋と姫君とストーカーと

今、俺はゼクトにこの世界の魔法を教えてもらっている。別に使い道は余り無いんだけど、何かに使えるかも知れないし、

「ふむふむ、カマイタチって結構初歩の魔法なのな」

「つむ。じゃが、初歩だからこその魔法でもあるのつ。無詠唱で連続して放つ事も可能じゃし、消費魔力も少ない。

風属性の使い手ならば、大量のカマイタチを一瞬で発生させることが可能じゃ」

そういうえば、グラサンヒゲオヤジが既に指パッチンでカマイタチを。いや、だけど、今なら俺がやれば、俺がオリジナルになるはずだ。

「よーし、素晴らしい技をさせてやるー。」

ぱっちーん。と、素晴らしい音が響き、素晴らしい切れ味のカマイタチが発射され、素晴らしい木が素晴らしい切れれる。

素晴らしいがいらない所もあつた気がするけど、気にしちゃ駄目よ。

「ふむ、初めてにしては中々じゃな」

実際のところ、演算はシユベルトクロイツに任せてあるんだよね。ちなみにだが、この世界の魔法は、大気中の精霊に魔力を与えることで使うらしい。

属性というのは本人の性格などから決まり、精霊との親和性の高さを示すらしい。精霊にすかれ易い体質の人間なども居るらしい。また、上位古代語魔法。たとえば燃える天空や千の雷は、はるかな

昔に人間に倒された精霊王に力を借りる魔法らしい。

契約に従い、我に従え高殿の王。などの呪文で分かるとは思うが。

「でもまあ、使いにくいからパス。これはネタで使うとしよう

ザフィーラは詠春に氣の使い方を習っている。といつか、俺が進めたのだ。

ヴォルケンリッターのみんなはプログラムではあるが、確かに生命ではあるのだ。詠春の話では、氣もあるらしい。

「はあ～～～！か～め～は～め～波アアアアアアア～！～！」

「ぶほおつー」

「ぬおお！？汚いわ！」

ザツフィーにネタで教えた掛け声が実際に使われて、思わず水を噴出してしまった。

といつか、実際に何か飛び出してるし。いや、飛び出しているのは魔力か。

うーん……なるほど、感掛法の応用か。氣と魔力は反発するから、魔力で氣を反発させて勢いよく放射する。

なるほど、それは面白そうだな。氣の扱いが上手くなれば、反発させないでも飛ばせそうだけど。

「よし、手本を見せてやる

「なんじゅうと～」

手のひらに生命エネルギー。氣を大量に集中させていく。普通の氣

の使い手千人分ほどの量を手のひらに凝縮し、それを魔力で包み込む。

内部で魔力は反発し、乱反射し、勢いを増していく。超高密度のエネルギーの塊は輝きを増していく。

「フハハハハハハ！……」に銀河系が吹き飛ぶほどのパワーが溜まつて来ているぞ！」

出来るだけ声を低くしてみたけど、女の子が無理に男声を出しているような声しか出なかつた。

うーむ、年齢を十前後で固定してゐるからなあ……。

つてこり、誰だ、パワーの前にストレッチとかつけ足したの。俺がストレッチマンみたいじやないか。

あれが、元気玉を作る為に、みんなのストレッチパワーを分けてくれとかいつのか。どうだあ、腕の辺りがじんじんしてきただろお。つてか。イヤだな、そんな奴に元気わけたくない。

「いや、そこまではいかんじやろ」

「そこにはノリだよ。ゼクト。なんなら太陽系でもいいけど」

「やうかの」

魔力弾核の前面を開放し、そこから乱反射し、加速された高密度のエネルギーが放出された……。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

えーっと……銀河系は吹つ飛ばなかつたけど、山は吹つ飛んだわ。その後、詠春に拳骨を食らつた。思わず頭を抑えて、詠春を上目遣

いに睨んだ。

「ぐつはああああああ！」

何故か詠春の方が致命的なダメージを受けていた。
ああ、そういえば、今の俺って男の娘だっけ……。

ちなみにだが、俺の容姿を軽く説明しどくよ。

髪の色は茶色でショートボブ。ぶっちゃけるとはやてだな。
顔は綺麗やカッコイイというよりも可愛いという系統だ。ぶっちゃけるとはやてだな。

目の中もぶっちゃけるとはやてだな。

ユニゾンすると銀髪紅眼になるのが違いといえば違いだな。ユニゾンすると、眼が少しつりあがるのでカッコイイ系になるかも知れないけど。

神よ、ちょっと手を抜きすぎじゃないかい？まあいいか。

「おーい、飯が出来たぞー！」

お、飯が出来たか。いやー、今日はなべかー、楽しみだなー。
うわー、いい匂いじゃー……それに、じょうゆに大根卸しどう日本人の心のような料理があるのだ。

欲を言うならば米と味噌汁が食いたいところだな。後、ファーストフードの安っぽいハンバーガー。たまに食いたくなるんだ。
つて、アレ？ そういえば、なべの時にラカンが来たような……。
そう思つていると、空から剣が飛来し、なべを吹き飛ばし……スローモーションで俺へと飛んできた。

「うきやああああああああああ！」

あつちい／＼！－ちくしょう！騎士甲冑の設定で液体の通過設定が未設定のままだつた！

ちつくしょー！火傷の跡が残つたらどうしてくれんだーぐらぐらに煮立つた鍋だつたんだぞテメエ！

騎士甲冑の耐熱保護のお陰でやけどはしてないけど、めちゃくちゃ熱かつたんだぞ！

「平氣ですか？カナメ」

「う、うう……大丈夫じゃない……」

うう、アル。いつもは胡散臭い上にうそつたくて強いかどうかも分からぬ上に、変態なおまえだけど、優しいんだな。

「なんだか心配したのが損な気がしてきました」

「ありがとう、アル……」

「ええ、あなたの顔に火傷が出来たら大変ですから」

「へ？」

「へ？ではありません。ほかの皆も怒り狂つて筋肉達磨をボコボコにしてますよ？」

言われたとおりに見てみると、ラカンはリンチされていた。

だって、原作ではナギと相打ちしてたけど、そのナギと一対一で圧勝する守護騎士が五体ですよ？
勝てる人間はこの世の何処にも存在しないって。

「いや、ナンデそんなに怒つてるの？」

「なんでとは……カナメ。可愛らしい女性の顔に火傷が出来たら大変でしょう？」

「いや、俺は男だけど？」

「…………すいません、もう一度言つていただけますか？」

「いや、だから俺は男だよ？」

「ふむ。男の娘といつのもいいかもしませんね。ちょっと、これを着てみませんか？」

何処からともなく取り出されたゴスロリ調のメイド服。

スカートの騎士甲冑を身につけていた俺に、メイド服を着る」とこ 抵抗は無いッ！

しかしそれ、今はそんなことしてると場合じゃないので、あとにすることにした。

ちなみにだが、俺が男だというのはアルはほかの皆に教えるつもりは無いらしい。面白そだからいいよ、それで。

ああ、ヴォルケンリッターの皆は俺が男だつて知ってるよ。夜天の書を通して全員がリンクしてるわけだからね。

俺からの情報は意図的に止められるけど、とめる必要も無いから止めいない。リインはヨニゾンするから分かるし。

原作では半日くらい続いた戦闘も全員の手にかかれば十分以下で終わりを告げた。

ラカンは俺に対して土下座で謝り倒した。スカートの中を見られた

ので踏み潰した。

言つておくが、俺に女装趣味は無い。だが、この騎士甲冑は元がリインフォースのもの。なので、下着毛女物である。

ちなみにだが、紅き翼は滅多に町に逗留しないので、数日風呂に入らない事はザラ。たまに体を洗っても外での水浴びである。
俺は水浴びが好きではないので、全員が体を洗い終えた後に水を魔法で暖めている。温泉最高―――ツ！

ちなみにだが、シグナムも風呂好きなのでいつしょに入る。ヴィー
タは俺と一緒に入りたがるのでいつしょに入る。シャマルも一人で
入るのが嫌だからといつしょに入る。

10歳程度の体にしてあるので、性欲も湧かないからねー。こんな風に、俺は女性たちと一緒に入っているので女だと思われているのかもしねえ。

ついでに言うと、たまに勘違いしている人が居るのだが、魔法で火や氷を出せるのは変換資質がある人間だけではない。変換資質というのは魔力を放出すると、その資質に応じた物に無意識で変換する事なのだ。

なので、変換資質が無くても工程を組んで使えば、炎や氷を出すのも可能だ。実際のところ、クロノがエターナルコフインを使っているし、ヴィータが炎を出したこともある。

「反省したか？だつたら許す」

「ありがとう」「それこそやつー」

泣きながら走り去っていく、殆ど全裸の筋肉達磨。さようなら。

「力ナメ大丈夫だったか？」

「大丈夫大丈夫。火傷にもなってないし、ちょっと赤くなっただけだよ」

うーん、ヴィータは優しいなあ。頭をなでてやる。ちなみにだが、ヴィータのデフォルト設定年齢は6～7歳程度。つまり所、小学校一年生程度である。

なので、俺よりも背が少し低いのだ。小さい頃は女の子の方が発育いいからねー。

「なんだよう、撫でるなよお」

嫌がるそぶりは見せるが、嫌よ嫌よも好きの内ずっとな。ああもう、ヴィータはかわいいなあ！

ぎゅ～っとヴィータに抱きつき、くるりくるりと回転する。古代ベルカ仕込の肉体強化は伊達じやないよ。

「いいですね、美少女の絡み合いというの」

かたつぽ男だけどね。

数日毎にジャックが強襲してきて、いつその事仲間になつた方が速いと言う事で仲間になつていた。お前等の理屈が俺には理解できないよ。

グレートブリッジ奪還作戦。

原作の大戦ではかなりの大規模な戦いで、かなりの大きさの拠点だ。実際のところ、かなりの高さから見ているのに凄く長い。

何しろ、全長300キロというふざけた規模の要塞だ。

ヘラス帝国は実験すらも済んでいない大規模転移魔法の実践投入でグレートブリッジを奪い、俺達はそれを奪還するのだ。

ぶっちゃけると、原作のメンバーだけで奪還できたのだから、俺たちが居れば楽勝だ。

実際楽勝でした

俺は遠距離からの砲撃の連射。ラグナロクやスター・ライトブレイカー、他にもフレース、ヴエルグに破壊の雷や大規模デアボリックエミッションなどの広域殲滅魔法の連射。

前衛二人とザフィーラは呐喊していき、シャマルはメンバーの回復を担当していた。

俺は初の実戦ではあつたが、仲間達の手前、怯えて何も出来ないなんて出来ない。必死で魔法を使いまくった。

どつかでタガが外れてしまったのか、ゲタゲタ笑いながら魔法を連射していたらしい。

ちなみにだが、この戦の少し後にガトウとタカミチが仲間になつた。握手した時にタカミチの顔が赤かつたけど、風邪でも引いたのだろうか？

もしかすると、俺に一目ぼれしたとか……さすがに無いが。

そうそう、この頃に俺達のファンクラブが出来た。ラカンは最強の奴隸剣闘士だったので、大分前からファンクラブがあつたみたいだけど。

おまけに俺達の「一つ名までついた。

俺が、「白銀の閃光」「魔道の賢者」「騎士達の幼きH」「マスター・オブ・グリモール」とかだ。

シグナムが「烈火の騎士」「爆炎の剣姫」「紅の華」「メロンボム」
ヴィータが「鉄槌の騎士」「破壊の鉄槌」「蹂躪の姫」「漢の浪漫
武装」

ザフィーラが「守護の騎士」「鋼の獣」「猛る獸王」「剣がさん
ねーの二人目かよ。いや、あんたら何もんだよ」

シャマルが「癒しの騎士」「深縁の姫君」「紅き翼のお姉さん」

リインフォースが「白銀の騎士」「蹂躪せし女H」「同体の姫君」

最後の方に出てる「一つ名はネタ的なものだ。リインフォースのは俺
とユニゾンするからだと思つ。

大体の場合は俺とユニゾンしないで戦つてるからこそ、「一つ名がつ
いたんだけどね。

ある日、俺たちはガトウにウェスペルタティア王国の首都にまで呼び出された。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都にまで呼び出して」

「あつて欲しい人が居る。協力者だ」

「ツて言うと、結構な立場の人なのかね

本国の首都じゃないと来れない人というと、結構な立場の人しかいないだろ？。

俺は原作知ってるから、王女様だつて知ってるけどね。

「協力者？」

「そうだ」

声のした方を向くと、そこには特徴的な髪型をしたおっさんが居た。

「マクギル元老議員！」

「いや、わしあやう。主賓はあちらのお方だ」

わしあやう。って、こっちにも関西弁つてあるんだろうか？

「ウエスペルタティア王国……アリカ王女様だ」

ラカンが声を掛けると、気安く話し掛けるな下郎と言っていた。
俺は話し掛けなかつたよ。だつて興味ないし。

その後、惚れた腫れたの騒ぎになつたが、俺たちはどうでもよかつた。やつと戦争終わらせてゆつくりしたいよ。

さてさて、紅き翼は休暇になり、ナギやラカンにヴォルケンリッターの皆は調査向きじゃないので、他の皆で調査することになつた。

「ふわあ～～～……久しぶりこやつくり出来るなあ

「なあなあ、カナメ。あれ食つてみよーぜ」

ヴィータが指差した先にはアイスのような氷菓子。幸い、金は結構あるので買ってみた。

ヴィータはバニラ、俺はチョコ、シグナムは抹茶、シャマルはストロベリー、ザフィーラは甘いものは苦手だそうだ。

というか、この世界に抹茶なんてあるんだな。案外旧世界の文化も流れてきてるんだろうか。

「ん、ヴィタ。一口交換しないか?」

「んー、ほら」

ヴィータのを一口もらひ、じゅらも一口食べさせる。うん、バニラもうまいなあ。

なんと言つか、じゅらの世界の食い物ってあまり美味くなかったんだけど、お菓子系統だけは美味しいんだよなあ。

ズズンッ……

なんだか随分と大きな地響きがしたと思つたら、なにやら爆発が起きたらしい。

あー、今日がナギが敵の秘密基地を潰す日だったのか。俺たちはバカンスを楽しんでたからなあ。

その後、急いで拠点に戻るとナギが詠春にビシビシと怒られていた。何でも一晩中姫様を連れ回して、敵の基地を潰したのだそうだ。馬鹿じやないのか。どんな危険な夜遊びだよ。

その過程で、テロに関与してると思われていた執政官。メガロメセンブリアのナンバー2がテロに関与してると証拠を手に入れたらしい。

その数日後。

俺たちが詠春と一緒に部屋でくつろいでいると、いきなり捕まえられそうになつたので、全員非殺傷のティバインバスターでぶつ飛ばした。

なるほど、原作では詠春たちはこんな風になつてたんだな。脱出してナギたちと合流しないと。

「昨日まで英雄だったのが一転して反逆者か……」

「我等は最後まで主の傍に」

「ありがとう、みんな」

俺達紅き翼は、アリカ姫の救出のために、夜の迷宮へと襲撃を仕掛けた。

最上部の部屋に捉えられていたのだが、俺たちはゲームのようにまじめに進んだりはしなかつた。

天井をぶち破り、壁をぶち破り。正直な話崩れるんじゃないかと思つたが、案外平氣だつた。

「助けに来たぜ、姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

奥の方には角の生えたヘラス族の第三皇女テオドラが居た。 そいつえば、ラカンもヘラス族のはずなんだが、角は生えてないんだろうか。

それともアレなんだろうか。奴隸のヘラス族は角を折られるなんていう決まりでもあるのだろうか。

案外ありえるかもしね。他の種族には無いものだし、無くても問題が無いのだから。

まあ、どうでもいいか。そして、俺たちは紅き翼の秘密基地へと一人を連れて行った。

「なんだ、これが噂の紅き翼の「秘密基地」か！ どんなところかと思えば……掘つ立て小屋ではないか」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ、このジャリは」

ラカンが額に青筋を立てながら言つ。シグナムは苦笑している。

「何だ貴様！ 無礼である！」

「くつへん！ あいにくとヘラスの貴族に貸しはあっても借りはないんですね！」

ガキがおまえは。子供相手にムキになつてんじやねえよ。

「何い！？ 貴様何者だ！」

アハハ、面白いやつらだ。それとラカン。おまえの精神年齢は幾つなんだ。

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫と交渉の為出向いたところと一緒に敵組織に捕縛されていました」

完全なる世界にとつて、生かしておく必要があつたつて言つことだ

よなあ。何の意味があるのかよく分からんんだけど。

いや、世界を無に還す術式の中で魔法を使える王族の魔力に関連があるのか？

それとも、世界を無に還す術式に必要な黄昏の姫巫女に関連があるのか？

いや、そんなことを気にして今は無駄か。

「さーて姫さん。助けてやつたはいいけど、こつからは大変だぜ？」
連合にも帝国にも……あなたの国にも信用できる味方はいねえ」

それどころか、國の人間こそ信用出来ないかもしれない。

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオステイアも似たような
状況で……最新の調査ではオステイアの上層部が最も「黒い」……
という可能性さえ上がっています」

そもそもオステイアの第一王女を戦争の道具に使おう。なんていう
答えが出来る時点でおかしいんだよな。
上層部所か最上部。それこそ、今代の王も完全なる世界の傀儡にな
つてる可能性がある。

「やはりそつか……我が騎士よ」

「だから、その「我が騎士」って何だよー姫さん！？・クラスでいつ
たら俺は魔法使いだぜ？」

「もつ連合の兵ではないのじゃ？·ならば主は最早私のものじゃ

「な……」

おうおう、照れるぞwwwwwwうおおー！魔法の射手が飛んできやがつた。

「連合に帝国…そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じやな」

常識的に考えて勝ち目はねーわな。

相手は数千数万。対するこちらはたったの十三人。タカミチには戦闘力はない。実質的な戦闘メンバーは12人だ。

「じゃが…主と主の「紅き翼」は無敵なのじやん？」

一瞬ナギが呆けたような顔をして、その後ろに居るラカンは無敵という言葉に反応している。

おい、頭の上のテオドラがおまえをハゲにしようとしてるぞ。

「世界全てが敵…………よいではないか。こちらの兵はたったの三人。だが、最強の十三人じや」

宣言するように言い放ち、アリカ姫は強い意思を込め、言った。

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

その言葉に、ナギは驚いた表情を浮かべ

「……へつ。だから俺は魔法使いだつづーのに……。やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

すぐに勝氣で獰猛な笑みを見せた。

「いいぜ、俺の杖と翼。あなたに預けよう」

夕焼けの中。ナギは忠誠なる騎士のように、アリカ姫の足元に跪いた。

どうでもいいけど、この頃にクルトが俺達を追っかけてきた。

第三話 最終決戦と真の黒幕と

俺たちは頭脳労働担当と肉体労働担当に分かれた。

頭脳労働はタカミチ、アル、姫様一人と偶にガトウ。
肉体労働はナギ、ラカン、ゼクト、俺達だ。

肉体労働担当が敵だと判明したやつらを片つ端からぶつ飛ばしていく、映画なら三部作。単行本なら十四巻は行くであろう六ヶ月の死闘の後 遂に奴等の本拠地を突き止める。

そこは世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」

まあ、簡単に言つとラストダンジョンだな。

「不気味なら位静かだな、奴等」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「案外、とつぐの昔に尻尾巻いて逃げ出してるのかもね

「ハツハツハ！ そうかもしけねえなあ！」

まったく、最終決戦だって言つのに。おまえらちつとも緊張してねえなあ。

かく言う俺も大した緊張はしてねえ。ヴォルケンリッターの皆もだ。シグナムとヴィータは不適な笑みを浮かべ、ザフィーラは相変わらずの無表情。

シャマルは変わらず柔軟な笑みを浮かべている。うーん、シャマルお母さんって感じだな。

「ナギ殿。帝国・連合・アリアドネ 混合部隊、準備完了しました」

「んー、確かにセラスさんだつたつけ。

その後、ナギとザフィーラがサインをねだられていた。実を言ひついで、ザフィーラは案外もてるのだ。

ラカンと違つて下品でもない。寡黙ながらも誠実で、役目はきちんと果たすと。

俺達のファンクラブでシグナムの次に女性ファンが多いのだ。シグナムはお姉さま的な意味で女性ファンが多い。

俺はというと、男女共に人気があるそうだ。ちなみにだが、ファンクラブのサイトを見てみたら、俺の性別は不明となっていた。確認が無いから、そのうち登録するのだろうな。だが、紅き翼にバラしてからでないとな……クックック。

つと、通信か？ガトウからか。詠春とアルが通信をキヤッチする。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろ？、決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょ？」

「既にタイムリミットだ」

「ちつ、後一時間もあればよかつたんだが……いまさら言つても始まらんか。

「ええ、彼らはもう始めています……「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今、彼等の手にあるのです」

姫子ちゃんか。そういえば、アスナに会つた事つてないんだよな……

…。

「ああ」

「さて、最初に俺が突破口を開く。最大最強の魔法を全力全開でぶつ放す」

「なにっ！？今まで使つてたのが最強じゃないのか…？」

詠春が驚いているが、仕方ない事ともいえるだろ？

「ああ、俺の後ろに居るよ。あたれば最後、消し飛ぶぞ」

俺はリインフォースとゴーバンし、詠唱を開始する。

「咎人達に、滅びの光を。天空に掛かりし弧。七色の虹よ。歪めよ
極光！ アルカンシェル！」

何故か夜天の書に記録されていたアルカンシェル。アレは本来ならば艦載兵器なので、個人の魔力で放てるようなものではない。しかしながら、俺のチートな魔力量によつて、数百キロを消し飛ばすなどというふざけた事は不可能だが、数キロを消し飛ばすくらいは出来る。

放たれた極光は大量の召還魔や魔族達の中心に着弾した……が。

「おい、カナメ。何もおこらねえぞ？」

「見てる。もうすぐだ」

そういつた瞬間。空間が歪む。

みしりみしりと空間が歪み。その直後。

中心から半径約一キロ程度の敵が消滅した。

「あなたも大概バグキャラだとは思つていましたが……空間ごと敵を消し飛ばすとは思いませんでしたよ」

「はは、さあ、行こ」つい。

俺たちは墓守り人の宮殿に突入し、フェイト・アーウェルンクスとの戦闘に突入する。

原作とは違い、こちらの人数は本来の一倍近い。ラカンとナギ以外の戦闘を手伝い、あつという間に敵を殲滅する。最後の一人、フェイトもナギに敗れた。

「見事……理不尽なまでの強さだ……」

「黄昏の姫巫女は……どこだ？ 消える前に吐け」

後ろから、仲間達が歩いてくる音が聞こえる。

そう、ここだ。ここで、ライフメイカーの……。

「フ……フフフ……まさか君は、いまだに僕が全ての黒幕だと思つているのかい？」

「なんだと……？」

一瞬にして膨れ上がった魔力の感覚。俺は全力でナギに飛んで近づき、ナギを突き飛ばした。

「ガツ……！」

俺とフェイトの腹を貫通していった黒い閃光。

「カナメエツ！」

「主つ！」

「カナメちゃん！」

駆け寄る仲間達。クツソ、胃が完璧に消し飛んでるぜ、この場所は。閃光が飛んできた方向は、俺の正面。仲間たちから見て右側。

「誰だつ！？」

いち早く気づいたのはラカン。紅き翼でのヴォルケンリッターを除いて、最も多くの修羅場をくぐりぬけた奴だからな。ヴォルケンリッターは俺の怪我に動転して気づいてねえ。

「全、員つ！ 防御魔法をつ！」

叫びながら、俺は二つの最強防護を展開する。俺とリインがいるからこそ出来る芸当だ。

一瞬遅れて、ゼクトとアルが一人で最強防護を展開し、ザフィーラとシャマルも最強防護を展開する。

四つの最強防護で第一波と第二波の魔力の波動を防いだが、第三波でそれも崩壊する。

ラカンの両腕が吹っ飛び、詠春やアルも軽くは無い傷を負う。

だが、俺が突き飛ばしたナギは先ほどの攻撃で無傷だった。

「ぐつ……バカな……！」

「まさか……アレは……」

霞む視界の先、そこには、黒く暗い、真の敵が。ライフメイカーが居た。

アレには、絶対に、勝てない……絶望が心を覆いかける。だが、それでもだ。

負けるかもしない、勝てない。そんなんじやあ駄目なんだ。

御伽噺の勇者は強かつたから勝ったんじゃない、負けなかつたから強かつたんじやない。

諦めない。それこそが強さの象徴。絶望的な戦力差でも、圧倒的な龍が相手でも。

勇者は絶対に諦めなかつたから、勝てた。

「諦めんなよ……！」

「……え？」

「絶対に諦めんなよ！勝てないからって諦めんなよ！負けるかもしれないなんて思つても、戦わなきゃいけねえんだよ！」

「そう、だ……負けられねえんだよ、俺たちは……」

ナギが立ち上がる。額から血を流し、足が震えていても、立ち上がる。

「！」で諦めちまつたら、全てが終わつちまつんだよ！俺たちが守りたかった世界が！何もかも、消えちまつんだ！

デバイスコアがひび割れ、機能停止寸前のシユベルトクロイツを血塗れの手で握り締める。

膝が笑う。立つな、立つたら死ぬぞ。心のどこかで声が聞こえる。それでも、立ち上がる。立ち上がつてみせる。

「負けられねんだよ……皆と一緒に駆け抜けた戦いも、バカやつと一緒に笑つた日々も、酒飲んでドンちゃん騒ぎした日も。ここで負けちまつたら何もかも全部が消えちまうんだよ！」

口から大量の血を吐き出しながらも、俺は立ち上がった。

「アル、シャマル。残つた魔力で俺を治療してくれ。三十分。三十分だけ戦えればいい」

「無茶です！カナメ！ナギやラカンならともかく、貴方では死にます！」

「そうよ！カナメちゃん！休んでいて！」

「駄目だ。ナギ一人に任せちましたら、駄目なんだよ」

デバイスに魔力を流し、リカバリーを掛ける。だが、損傷した部位は大きく、リカバリーは急場凌ぎにしかならないだろう。

「ふふ、よからう。ワシも行くぞ、ナギ、カナメ。ワシも傷は浅い」

傷が浅い。とはいって、それは皆の中でのだ。ゼクトの脇腹は大きく抉れていて、僅かな身動きですらも激痛が走るだらう傷だった。

「私も行きましょう。主を前に出して、将たる私が後ろに下がつて

いるわけには参りません

血を流し、鱗割れたレヴァンティンを支えにしてでも、シグナムは立ち上がる。

その瞳に燃え立つ氣炎は紅き焰の如く。烈火の将たる彼女に相応しい勇猛さを湛えていた。

「アタシも行くぜ。カナメには死んで欲しくねーし……絶対に帰るつて決めてるんだ」

比較的傷の浅いヴィータも立ち上がり、グラーフアイゼンを肩に乗せて、口から血の混じった唾液を吐き出す。

カートリッジを取り出し、それをグラーフアイゼンに挿入する。

幼き少女に見える、鉄槌の騎士ヴィータ。彼女の瞳は蒼き怒りの炎を燃やしていた。

「私もだ……守護獣たる私が、主を守らざしてどうするのか……たとえこの身が碎けようとも、主は守りきつて見せます」

満身創痍のザフィーラも、手の平から血を流す程に手を強く握り締め、口から血を流す程に唇を強くかみ締め。

体中に走る激痛を耐えてでも、ザフィーラは立ち上がった。

その瞳には盾の守護獣としての誇りを激しく燃やし、主を守るために立ち上がった、傷だらけの狼だった。

「みんな……」

俺は左の手元に浮かぶ、夜天の書へとコマンドを送る。
その途端に、半分以下へと減じていた魔力が更に減少し、二人の傷とデバイスを完璧に修復していた。

プログラム体である彼女たちは、主たる俺さえ居れば復活できる。
それでも、それでもだ。死んで欲しくない。

シャマルとアルに治療されたが、それは急場凌ぎ。内臓は滅茶苦茶
なままで、呼吸をするたびに体の芯から激痛が走る。

「ゼクトー無理です！そんな無茶はやめてくださいー。」

「ここで奴を止められなければ世界が全て無にしてしまう。無理で
もいくしかなかろう！」

ゼクトは呼吸を整えて、ライフメイカーを見据える。
その瞳には淡く燃える決意が見えた。

「待て！奴はマズイ！奴は別物だ！死ぬぞつー態勢を立て直してだ
な……」

「馬鹿野郎！今戦わなきゃ駄目なんだよ！
今ここで戦わなきゃ全てが終わっちゃうんだ！
帰るんだよ！皆で帰つて、またバカやつて笑つて、酒飲んで騒い
で、そんでもって疲れて眠つて。
そんな日々を過ごすために俺達戦つてんだよ！世界を救うつて言
つたじゃねえかよ！」「

「ハハッ……カナメの言つ通りだぜ……態勢を立て直してたら間に
あわねえよ。らしくねえな、ジャック」

「「ナギ（カナメ）と俺は」「

声がかぶり、ナギと顔を見合させ。一人で笑った。

「「無敵の魔法使いだぜ？俺達は勝つ！！任せとけ……！」

「そう、我等が主居る限り、必勝は揺るがない」

「アタシ達ベルカの騎士が、ヴォルケンリッターが居るから！」

「盾の守護獣たる俺が居るから！」

「「「主は絶対に負けない！」」「」

一丸となり、俺たち六人はライフメイカーへと呐喊する。圧倒的なまでの敵。この世界の人間には倒せぬ敵。だが、だがしかし。そう、俺達はこの世界の人間ではない。ナギは旧世界出身の人間であり、俺は並行世界の人間。ヴォルケンリッターにいたっては人間ですらないプログラム生命体。ゼクトは分からぬが、俺たちが勝つ。それでいい。

「刃以て、血に染めよ！ ブラッティダガー！」

42の魔力で構成された弾丸がライフメイカーへと発射され、ライフメイカーは黒い閃光で全てを打ち落とす。

「ナギッ！ おまえは千の雷は使うな！ 体術か雷の投擲で的確に狙え！ シグナム！ シュランゲフォルムで、あの衣を叩き切れ！ ヴィータ！ 動きを見極めて、動きを止めた瞬間に最高威力の攻撃をぶつ放せ！ それ以外は防御するだけでいい！ ザファイーラ！ 鋼の輻で移動範囲を狭めてくれ！ 出来れば攻撃も！」

俺の声に従い、各々が行動を始める。

黒き閃光が打ち出される前に、ミストルティンを放つ。

障壁を貫通することは適わずに、そのままに受けきられるが、行動は確かに止まつた。

「レヴァンティンーカートリッジロード！」

シグナムが鞘に剣を収め、レヴァンティンへと命ずる。

「Expression」

レヴァンティンはデバイスコアを煌かせ、その命令に従つて、高圧縮された魔力が込められた弾丸を撃発する。

打ち出された弾丸に込められた魔力は圧縮され、レヴァンティンにこもる

「飛竜一閃！」

鞘から抜き放たれると同時に剣は分離し、剣の中心に通されたワイヤーを支えに蛇のように伸び、ライフメイカーの伸びる衣を切断し、障壁を幾枚も破る。

「おおおおお！！！攻撃なんぞさせん！！！」

ザフィーラが咆哮と共に、様々な場所から鋼の軛を飛び出させる。ライフメイカーの黒い衣を貫通し、障壁を幾枚も破り、拘束する。

「ラアアアアアアアー！！！」

ナギが六本の雷の投擲を撃ち放ち、それが障壁を破る。いつたい何枚の魔法障壁を展開してるんだ！？

そのままナギは追撃へと移り、感掛法を発動し、惚れ惚れするほど

に冴え渡つた技で殴り、蹴り飛ばした。

「響け終焉の笛！ラグナロクッ！」

頭上のベルカ式魔法陣にチャージされた莫大な魔力。本来ならば広域に拡散するラグナロクを収束し、貫通力を高めた一撃を打ち放つ。

大量の魔力が込められ、威力はSSランクにも及ぶその一撃。障壁を貫通し、打ち破り、ついにその身へと攻撃が及ぶ。それを見逃さずに、鉄槌の騎士ヴィータは叫ぶ。

「グラーファイゼン！」

「Jawho！」

グラーファイゼンのデバイスコアが煌き、幾発もの弾丸が装填、激発され。膨大な魔力がグラーファイゼンに籠る。グラーファイゼンのハンマー部は消失し、一瞬の後に巨大なハンマーへと変ずる。

そして、ヴィータがそのグラーファイゼンを振り上げると同時に、數十倍もの大きさへと変化する。

「轟天爆碎！」

振り落とされる巨人族の一撃。ライフメイカーは飛行魔法によって逃げ出そうとするが、ナギが掃射した魔法の射手と、俺が放ったアクセルシユーターが命中し、動きが止まる。

「ギガントシュラアアア クッ！－！」

ライフメイカーに激突した巨大な鉄槌。ライフメイカーはいとも容易く吹き飛ばされ、宮殿の壁面へと激突する。

「百重千重に重なりて走れよ稻妻！千の雷……！」

「空より来たりて敵を滅ぼす鉄槌となれ！破壊の雷！」

俺とナギが放つた二つの莫大な雷光。

それは狙い違わずライフメイカーへと命中し、巨大な土煙を上げる。警戒を解かずに土煙の向こうを睨みつけ、フェイトごと貫かれた、あの瞬間と同じ反応を感じ取る。

「パンツアーシルト！」

展開された防御に任せて突っ込み、ナギも魔法障壁を展開して突っ込む。

後ろのシグナムはボーゲンフォルムへと変じさせたレヴァンティンを構え、シユツウルムファルケンを発射直前で構えていた。ザフィーラは俺たちの後ろに続いて回り、鋼の輻で黒い閃光を弾く。ヴィータも俺たちの後ろをついてきている。

墓守り人の宮殿は俺たちの攻撃に耐え切れずに、轟音を立てる。土煙の向こう側で、ナギが渾身の力を込めて放つたアッパー。それによつてライフメイカーの顔は吹き飛んだ。

「…………クック…………フフ…………フフはは！」

地の底から響くかのような罅割れた声。

それは確かに、頭を吹き飛ばされたライフメイカーから放たれていった。

「ははははははーーー私を倒すか人間！それもよからぬッシー！」

心底おかしそうに。悦楽の声で。ライフメイカーは嘲笑う。

「私を倒し英雄となれ！羊たちの慰めともなる？……」

24発のアクセルシューターと、ヴィータの放つたシュワルベフリーゲン8発。

それを受けてライフメイカーは吹き飛び、背後に展開された巨大な魔法陣から幾筋もの黒い閃光が輝き、今か今かと放たれる時を待つ。

「しふてえ奴だぜ！」

「まつたくだー！」

俺とナギの呆れとも怒りともつかぬ声。

それを意にも介さずライフメイカーは続ける。

「だが、ゆめ忘れるな」

今まで心底おかしそうに笑っていた声が、途端に平常へと戻る。

「全てを満たす解は無い。いずれ彼等にも絶望の帳が落ちる」

黒き閃光が放たれるが、俺達は真正面から突き抜ける。

俺とナギとヴィータとザフィーラの四人が展開する鉄壁の守りを、黒い閃光は貫けずに弾かれる。

「貴様等も、例外ではない」

「ケツ」

רשות מקצועית

「ペリペリヒツカえんだよー。」Jの黒助がー。

黒い閃光を突破し、俺達は完璧に無防備となつたライフメイカーの前へと出る。

「グダ、グダ、ううるせえええッ！――！」

ナギの拳がライフメイカーを捉え、鈍い音と共に殴り飛ばす。ヴィータが放つシユワルベフリー・ゲンがライフメイカーの衣を吹き飛ばし、ナギの放つ雷の投擲も衣を吹き飛ばしていく。

「たとえ、明日世界が滅ぶと知らうともーー」

俺とナギの拳がライフメイカーを同時に殴り飛ばし、鋭く放たれた蹴りがライフメイカーを吹き飛ばす。

そのたびに響く轟音は既に生物を打ち据えた音ではなく、まるで無機物。そう、金属を叩くかのような音だった。

「諦めねえのが、人間つてモンだらうがッ！」

「そうつ！俺たち人間は歩いていける！滅びの道を防げるかもしけないのが人間なんだ！」

『そり、滅びの運命から逃げ出す』とも、立ち向かうとも出来る

のが人間。そして、最後に勝つのも人間だ!』

俺の体の中から、リインフォースの叫びが響く。

その声は、悲痛な叫び。そして喜びの歓声。幾度も幾度も世界を滅ぼしてきた、闇の書と言われたロストロギア。

けれど、その絶望の運命から、瀕ひの運命から救し出してくれたのは三人の少女。

ここではない、何時か、何処かの世界で、けれど、確かに、救われ、今ここへと至つてゐる。

ナキの持つ力、長柄の杖にナキの持つ力、最後の魔力、脈打つ力が、杖を、神々しく輝く槍へと変じさせる。

ヴィータは最後のカートリッジを装填し、激発し、魔力を最高まで

卷之三

シグナムは、最後の最後の一瞬まで気を抜かずに、その心を鋼の如く尖らせていく。

「くつくく……貴様もいざれ、私の語る「永遠」」これが「全て」の「魂」を救い得る、唯一の次善解と知るだろう……

次善解。それは、最良の選択ではない。ベストではなく、ベター。

「人間を！舐めんじやねえええーツ！！！」

「スター ライトオツ！！！ ブレイカアアアア
ツ！！！」

「轟天爆碎！ギガントツ シュラアアアアア
クツ！-！」

「翔けよ、隼ッ！」

「'つああおおおおおおおお
ツ！…！」

紫電を纏つて放たれた槍。

周囲の大量の魔力を収束させて放たれた、白銀の収束砲撃。

天空より振り落とされた、巨人族の鉄槌。

地より放たれた、空舞う者を地へと引きずり下ろす、鋭き猛禽の一撃。

囚人を繋ぎ、身を縛り、肉を抉らせていく、冷たき鍋の輶。

それが、今。確かに、その黒き衣を身に纏つた、ライフメイカーを、貫いた。

「へ、へへへ……」

俺は最後まで意識を保つ事が出来ずに、少しずつ、意識が闇へと落ちていった。

後ろからザフイーラに抱きとめられ、ヴィータの泣きそうな顔を見せられ、シグナムが血相を変えて飛んでくる。

シャマルは泣きながらこちらへと思念通話で確認を取つてくる。

終わつた、終わつたんだ。

俺は安堵しながら、意識を失つた。

第三話 最終決戦と眞の黒幕と（後書き）

「こりつはくせえ―――！話の内容が臭くて顔から火が出るぜえーっ！

第四話 終戦と旧世界とシャーマンパートノプロジェクト

「…………」

「こ、何処だらう。石造りの天井が見える。そうだ、天井といえば、なんかネタがあつたような気がする……。

「大丈夫だよ……天井の染みを数えてる間に終わるから……」

これで合つてたっけ？なんか違うような気がするけど、ふざけてないで、状況を確認しよう。

体を起こそうとして、激痛が全身を貫く。ああ、そうだった。内臓がズタボロのままで戦つてたんだったな。

体を見てみると、包帯を巻かれているという事もなく、傷も殆ど無かった。

俺の騎士甲冑は大量の魔力で保護してあるからな、流石にあの閃光は防げなかつたけど。

体を動かすのが億劫なので、仕方無しに集中してサーチャーを作り出す。

部屋を見渡すと、俺の眠っているベッドのすぐ横にシャーマルが座っている。

「シャーマル、シャーマル」

「ん……」

『シャーマルッ！……』

思念通話の音量を最大まで上げ、俺の思える最大の思考を飛ばす。

「わきゃああああああつーーー。」

「起きたか?」

でかい声出すと体に響くからなあ。

「か、カナメちゃん!ーーー！」

シャマルが思念通話で全員に呼びかける。
そして、全員が喜びを露にし、涙目になりながらも部屋へと飛び込
んできた。

「カナメ! カナメえ! よかつた、よかつたあー。」

ヴィータが涙を拭いながら、震える声で喜ぶ。
「めんな、随分心配かけちまつて。

「主……よくぞじ無事で」

シグナムが涙を隠しながらも、俺の無事を喜んでくれた。
ありがとうな、ついてきててくれた。

「主……私は盾の守護獣としての本懐を果たせましたか?」

ザフィーラも喜びを前面に押し出しながら、俺へと自分の役割につ
いての事を聞いてくる。

ああ、おまえは最高の守護獣だ。最後まで俺を守ってくれた。

「カナメちゃん。本当に心配したんですよ……もつ……ーーー。」

シャマルは涙を拭いながら、ちょっと唇を尖らせて俺を咎めた。
「ごめん。でもさ、あそこで無理してでも戦わないと駄目だつて思つたんだ。

「主……もう一度とあんな無茶はしないでください……ですが、絶望へと立ち向かう、その心。確かに私にも伝わりました」

リインフォースも無表情ながら、喜びを浮かべた。
絶対に負けられなかつたからな、絶対に諦めない。そうすれば、きっと人間は何処までもいける。そう思うんだ。

「それで、ライフメイカーを倒してから、どれくらい経つたんだ？」

「もう半日ほど経ちますよ。カナメちゃんはずつと眠つてたんですねから」

「そうだったのか……。他の皆は？」

そう聞くと、皆の顔に一瞬影が落ちる。

「ゼクト殿は……」

「そう、か……やつぱり、救えなかつた、か。
いや、覚悟はしてたんだ。俺たちが泣いてたら、ゼクトが浮かばれねえ。」

そう思つていると、廊下が騒がしい。扉の前で足音が止まり、一気に扉が開かれる。

「カナメ！」

でかい声で叫ぶバカは、ナギとラカン。おまえ等元気だな。
見た目はズタボロの重症なのに、動きは元気そつだ。

「ナギ！ ラカン！」

「目が覚めたのか、カナメ。大丈夫か？」

「まあ、何とか。体はついたねえけど」

「ぬつ、これから受勲式だつてのに。テメエには気合が足りねえ！
氣合が！」

「シグナム。このバカ放り出せ」

「御意」

「あ、てめー何しやがる！」

ラカンはシグナムに蹴つ飛ばされたり殴られたりしながら後退していく。
さつきシグナムたちは俺が治療したからな。ズタボロのラカンに負けるわけがない。

「受勲式までどれくらいなんだ？」

「ん、後六時間つてことだな。けど、一時間は前に準備しないと駄目だぜ」

「そつか……」

な。夜天の書を呼び出し、魔法を検索する。なるだけ回復力の高い奴を

「ん、こんなのがあるのか」

魂の情報を元に肉体の欠損部位を魔力で再構成する魔法だ。魂 자체を削る武器はこつちの世界には滅多にねえからな。悪魔の呪いとか位しかない。Fateだと沢山ありそうだけど。

どうか、りりな世界の魔法は科学に準する魔法なので、そういった神秘的な方向の魔法は全くと言つていいほど存在していない。なので、この魔法はかなりの古代。それこそ、デバイスが作られて間もない頃とか、その家の秘伝の魔法とかだった可能性。

「ニシテハナハナハナハナ...」

大量の魔力が抜けていくのが分かる。そもそもこれ、五人以上のA Aランク魔導師が儀式魔法で数時間かけて行う施術だからな。一人で少しの時間でやろうとするから無理が生じるのだ。魔力はいつもの一十分の一程度しか回復していないし。

「はあー……疲れた」

怪我は治つて、痛みもなくなつたけど、体力が無いのだ。

「すげえなその魔法！後で俺にもかけてくれよ！」

「後でな」

ひとまず、シグナム達に飯を持ってきてもらつた。いつも三倍は

食つたと思つ。

そこで寝る。体力を回復させるには食つて寝るしかないのだ。

そして、大体五時間後。受勲式まで一時間はある。体力は大分回復して、歩くのには支障ない。

魔力はあまり回復していない。ラグナロクを十発撃てるくらいだろう。それでも大概チートな量だが。

立ち上がり、ベッド脇に置いてあつた果物をいくつか齧る。うん、瑞々しくて美味しい。

ベッド脇に置いてあつたシユベルトクロイツを拾い上げ、魔力を入念に流して、念入りにリカバリーする。

そのうち、分解して総点検しないと駄目だよなあ。でも、俺つて『テバイスの知識なんてゼロだし。

いや、リインフォースにやつてもらえばいいかな。うん、それがいい。なんか出来そうだし。

まあ、今は全て後回しだ。戦いは終わったのだから。

色々と事後処理はあるだろう。けれど、確かに戦いは終わったのだ。騎士甲冑をセットアップし、俺は歩き出す。

部屋の前にはヴォルケンリッターの皆がそろつっていた。

「行きましょう。主」

「ああ！」

受勲式。何故かアルは参加せず、ナギと俺とラカンと詠春にヴォルケンリッターの皆がレッドカードペットを歩く。

遠く離れた場所に居る民衆の声が、まるで津波のように押し寄せてくる。

戦いは終わつたと。喜びの声を、歓喜の歌が洪水のように国に渦巻

く。

兵士に混じり、紅き翼の皆で杯を酌み交わす。10歳くらいの年齢にずっと固定してあるが、酒には強いので問題ない。入り口の扉が静かに開き、赤毛をローブで隠した男。ナギ・スプリングフィールドが店に入る。

ワアアアアアア……－－！

祝福の声に包まれ、ナギは驚いたような顔を浮かべる。

「テメエ！傷はもういいのかよ！」

「テメエこそ両腕ねえくせに偉そつこー！」

ナギが唯一あがる右腕で、ラカンの左腕の断面を殴りつける。ラカンは右腕で黒い閃光で貫かれた左肩を殴りつける。

「傷をド突き合つた貴様らあーッ！」

止めを刺しあうような行為をする一人に詠春が怒鳴りつける。

「詠春！てめーも一番怪我ひでえのに、よく式典とか出るぜー！ハハ！」

ラカンは詠春の肩もつかみ、傷をド突く。

「だから傷をド突くな！！死ぬわー！」

だが、詠春も殴つて止めたりはしない。それは、ラカンの行動が喜びを表していると分かつているからだ。

「つーかアル！ てめえはなんで受勲式出ねえんだよっ！！！」

「私、上がり性なもので……」

「嘘つけーっ！」

平穏な日々。今日はいい日だ。

「ふうー…………なあ、監。ちよつとも、旅にでも出てみないか？」
「旅……ですか？」

お茶を飲んでいたシグナムが問い合わせる。

「ああ、俺たちも、あちこち行つたけど、観光とか全然してなかつたからな。

それに、戦いはもう終わった。だから、いろんなところを見て回るつい？」

「おお！いいなそれ！賛成だ！」

氷菓子を食べていたヴィータが賛成の意を表す。

「いいですね～旅行ですか……」

「うんうん。お金もあるし、温泉めぐりとかもいいかも

「行きましょひ。せひとも行きましょひ」

いきなり乗り気になるシグナム。彼女は風呂好きなのだ。

「ザフイーラは？」

「私は主の意向に従います」

「そうじゃなくてさあ～。ザフイーラはどんなところ行ってみたい？何か美味しいもんを食べたいとかでもいいぞ？」

「……では、美味しいものを食べてみたいのです」

「リンゴは？」

「そうですね。色々な所を歩いてみたいです。壊すこともなく

「よし、じゃあ行こひー。」

こつして、俺たちの突発的な旅は始まった。
人に見られると英雄だなんだと五月蠅いので、変身魔法で姿を変えた。

シグナムは12歳くらいに。シャマルは15歳くらいに。ヴィータは18歳くらいに。ザフィーラは10歳くらいに。リインフォースは小型サイズになった。

もともと彼女はユニゾンテバイスで、人間大の大きさの方がおかしいのだ。

俺は20歳くらいの年齢になった……が、やはり女に見える。胸が無いし、肩幅もあるけど、鍛えてる女性。くらいにしか見られないと思う。

だって、この世界の人たち筋骨隆々な人ばっかなんだもん。身長180ある女人人はザラだよ？

ちなみにだが、肉体年齢を変える要領で髪の毛を伸ばすことも出来る。

「さてと、まずは南の方に行つて見よう」

といつわけで、行き当たりばったりな旅を開始した。

前方に障壁を展開し、騎士甲冑で体温を保護して、俺達は結構早めで飛んでいた。普通に音速域に到達してたりするから困る。方向転換すると内臓が潰れるけど。

全力で飛ぶと、超音速域に到達出来たりするから更に困る。急停止も出来ないから、物にぶつかるとミンチになりかねない。

これは、誰が一番速く飛べるか。そんなバカな事を俺が言い出した結果、シグナムとヴィータが言い合いになり、仕方なしにそうなったのだ。

結果はシグナムの方が早かった。つっても僅差なんだけどね。そんなこんなで僅か二十分程度で町に到着。

その町は結構活気にあふれた場所で、拳闘大会が開催されてた事もあるんだそうだ。今は戦乱の影響で中止になってるらしいけど、来年には再開されるらしい。

「おー結構大きな温泉宿があるみたいだぞ」

「本当にですね。では、

るんるん気分のシグナムに半ば引きずられるようにして、俺達は宿に向かつた。

予約が必要な宿だったが、宿泊料金の十倍の金を叩き付けてやつたら無言で鍵を差し出してくれた。

荷物を適当に放り投げ、着替えを持って温泉に。ここには日本ではないので浴衣はなかった……。

ここらへんは、風呂は聖域。とまで呼ばれているらしいへ、高額賞金首が居たとしても攻撃は許されないのだそうだ。

ちなみにだが、賞金首＝犯罪者。というわけではない。貴族の馬鹿息子が家出したりした場合に、そいつに賞金がかけられる事もある。どうでもいいが、この宿の温泉は混浴だそうだ。なので、全員に入る事に。

「ザツフィーの背中。地上最強の生物みたいだ……」

「……？」

流石に鬼は浮かんでいなかつたけど、物凄い筋肉がついているのは事実だ。

シグナムも筋肉ついてるけど、スマートなイメージだしな。シャマルは戦闘タイプじゃないのでそのまんまだ。

ヴィータはまあ、まな板ですね。だがそれがいい。リインフォースは筋肉はないけど、シャマルとは違つて戦闘タイプ。けど、後ろでの砲撃手だからな。大した筋肉は無い。

「シグナムがたれしぐなむに」

たれぱんだと同じように、たれしぐなむになってしまった。どうでもいいけど、俺って男だけだとれぱんだ好きだつたんだ……。そんなこんなで、楽しく俺達は旅を続けていった。

「アリカ姫の処刑、か」

大々的に放映されたニュース。それは当然といえたのかもしれない。アリカ姫は傀儡となっていた王をクーデターのような形で追いやり、王位についた。

その後、オステイアの避難民を救う為に、奴隸としての扱いになる法律を制定。本来の奴隸とは異なり、待遇はかなりいいものの、奴隸。という言葉には拒否を示した。

やがては戦争はアリカ姫が原因だとまで言われ、最終的には処刑とまでなつたのだ。

俺達は紅き翼の面々が集まっている場所へと向かった。

「ナギ、助けに行かなくてもいいのか？」

詠春が吼える。助けに行きたいだろう。ナギは自覚は少ないのかもしないが、アリカ姫に恋心を抱いている。

そして何よりも、杖と翼を預けたのだ。未だに杖と翼としての役割は残り、枷をはずし、空へと羽ばたき、何処までも飛んでいく翼としての自負がある。

「処刑まで時間はありませんよ」

「分かつてゐる」

それでもナギは答えを出せずに居る。

「なあ、力ナメ。正義つてなんだろうな」

「自分の行動を正当化する為の言い訳。俺はそつ思つてゐる。俺の正義はお前達、仲間を守る事。家族を守る事だ。
孤児の少年が飢えに耐え切れずにパンを盗んだとしよう。それを捕まえる警察は正義だ。

それを哀れだと書いて、変わりに代金を払う奴も正義だらう。正義は人それぞれ。汝の欲する事を成せ、だ。

お前が本当にしたい事。何をして、何を守りたいのか。それはお前にしかわからない事だ」

「そつ、か。ありがとう、なんか、分かつた気がする」

「どう致しまして、だ」

時は流れしていく。聖人にも罪人にも、英雄にも悪人にも。

時は流れ、アリカ姫の処刑前日。

大量の兵士達が居る中で、肃々と処刑は進行していく。

「それじゃあ、行くか」

誰からともなく、武器を構える。

「お姫様を助ける王子様の手助け。俺達は小人かなんかかよ」

「そういうな、ジャック

魔法をぶつ放し、兵士達が蹂躪されていく。ちなみにだが非殺傷設定だ。

あらかた兵士をぶちのめしまわると、魔獣の蔓延る穴から、アリカ姫を抱えたナギが出てきた。

なんとゆーか、リア充だよなあ。

細かい事は省くが、ガトウとかが交渉し、俺は哄笑し、ジャックは剣を素振りし、詠春は頭痛をこらえる。

そんな感じで、処刑された事となり、ナギは約束を果たすために、旧世界の詠春の故郷、京都に来ていた。

京都は修学旅行で一度来た事はあるが、こんなVIP待遇じゃなかつたな。詠春の関西呪術協会の地位つてどうなつてんだろ。封印されていた姫子ちゃんこと、アスナも連れている。

「楽しそうだな、アスナ」

「ええ、本当に」

俺とアルは後ろの方でほほえましげに見ている。こら、誰だ。元気な子供たちを見守る親みたいって言つたのは。タカミチも大きくなつたなあ。俺は大きくなつてないけどさ。無音拳も習得したらしいし。

「平和、だな」

「ええ、本当に」

ヴィータは八橋を食べていて、シグナムとシャマルは京野菜の漬物を。ザッフナーは何か酸っぱい物でも食べたのか悶絶している。

「ナギとアリカ姫は見ててうれしくなるほど」アーヴィングだなあ

「ええ、本当に？」

「詠春にも嫁が出来そうだな。英雄だし」

「ええ、本当に？」

…………テープレコーダーをセットした人形じゃないだろ？

「俺も結婚しようと思つてる」

「ええ、本当に？」

「ああ、アル。結婚してくれ！」

「ええええええ！」

アルが驚いた顔をしたのは初めて見たな。

「冗談だ」

「そうですか。私はいつもウルカムですよ」

「考え方」

その後、清水の舞台について、清水の舞台から飛び降りる気持ちで
という慣用句を皆に教えたところ、ナギ、ラカン、シグナム、ヴィ
ータ、俺が飛び降りた。

更には誰が一番カツコヨク飛び降りたとか言う意味不明の採点をし
たりもしていた。詠春に怒られたがな。
ラカンが何を勘違いしたか、仏像にのぼり、詠春に刀を持って追い
掛け回されたりもした。

「なんで旧世界に来てまで戦わなあかんのじや」

「知らん」

俺たちは今、リョウメンスクナの前に居る。でけえ。どんくらいか
という50メートル以上はある。ビグザム並？

まあ、普通に勝ちましたけどね？ だって弱いんですもん。いや、俺
たちがおかしいだけなんだけさ。

スクナには及ばないけど、一般兵が数十人。下手すると数百人がか
りで倒す鬼神兵を一発の魔法で数体同時に倒すナギとか居るからね。
そのあと、京都の隠れ家で全員集合した写真を取った。前に魔法世
界で撮った写真と違うのは、タカラミチとアスナとアリカ姫が居る事
だな。

この写真はそれぞれ、自分たちだけで持つておく事になった。最後
の写真だからな。

そして、俺たち紅き翼は、ここで解散した。

仲間の絆は永遠に。駆け抜けた戦乱で培われた絆は、永遠に切れる事はない。

死も、別れも、俺たちの絆を断ち切れたりなんかはしない。

第四話 終戦と田舎界といぢりやつとノハシヒト（後書き）

もう少しづかり原作の過去が続きます。

第五話 原作崩壊の序章とネギ強化フラグ

相も変わらず旅から旅への根無し草。あつあつひでひで行つては適当に遊ぶ生活が続いている。
で、まあ……幼女拾いました。

「何故、助けた」

しかも原作キャラでした。

「いや……普通目の前で崖から人が落ちそうになつたら助けるだろ? 常識的に考えて……」

それが反射的な行動じゃなくて、2700メートルほど離れた場所から美幼女だと察知した俺が瞬間移動に等しい速さで助け出したとしてもだ。

いや0・8秒で2700メートルを移動したという事は時速6500キロ程度で移動したという事になるのだが、一体どんな方法で移動したのだろうか……? ギャグ时空……?

「あ、どうこいしょっと」

金髪ツンデレ美幼女を引きずるよつとして引き上げ、俺の胸の上に落とす。おお……素晴らしい光景だ……。

「おつと……涎が」

「気味が悪いな……なんなんだ貴様は……」

「全幼女の味方です」

「喧嘩を売つて『いるのか貴様は！』」

胸倉を掴まれてがつくんがつくんと揺すられる。ものすごい怪力。流石は吸血鬼。頭を揺らされてアヘアヘになつた所で真剣な顔つきになる。

「生きてるのなら、神様だつて殺してみせる」

「何を言つとるかー！」

やべえ、間違えた。

「まあ、兎に角。俺は全幼女の味方だ！神が幼女を殺すというのならば、その神を殺してみせよつー生きてるのなら、神様だつて殺してみせる」

直死の魔眼はないけどね。

「き、貴様は……私をおちよくなつて『いるのかー！』」

「違つつー愛でて『いる』素晴らしきかな幼女ー俺のストライクゾーンは6~12歳ーなんかペドフィリアのような気がするけど果てしなく氣のせいー

君は例えて言つながら、私のストライクゾーンのど真ん中ー100マイルのストレートだー心臓を打ち貫かれたーおぜつわんー君のお名前はー?」「

「…………（）には一体なんなんだろつか…………」

「わあわあわあ！君のお父さんは……？早く答えたまえ！」

「HガーンジHリン・A・K・マクダウェルだ！これでビッグだ！」

「なん……だと……？あの、闇の福音の？」

「フン、そうだ。怯える、竦め。モビルスースの……モビルスース？」

何故ネタに走る？というか、本人も分かつてないんじゃ……？

「素晴らしい！永遠の幼女とは」のことか！是非結婚してください！」

「ふざけどるのか貴様あああああつー！」

「ぐへあ」

殴られた、いてえ。いや、常人なら顔がなくなるくらいの威力で殴られたわけですが。

「くつ……今の俺では駄目か……分かった、俺も君に相応しい男にならう！俺の名前は国後要！紅き翼の国後要だ！」

「なにい———つ！？」

「HガーンジHリン・A・K・マクダウェル一次に会つたときは君を惚れさせて見せる！それまでにこれを預けておこう！」

夜天の書のシステム上からシユベルトクロイツを切り離し、エヴァンジエリンへと放る。単純な砲身と演算の役割しかないデバイスなので、リリなの魔法は使えない。

しかしあま、魔力の伝導率は最高レベルのものを使用してるので、魔力通した武器としては最適だろう。

「それではな！」

ハーツハツハツハツハ！と笑いながら去っていく。そして森の中で一人自己嫌悪。何で初対面で俺はプロポーズしてるんだろうか……。そもそも相応しい男になるにはどうすればいいんだ？吸血鬼になればいいのか？夜天の書にそんな術式はなかつたし……。

難しい事は考えないで、冷却期間を置くとしよう。大体二十年も置けばいいかな……不老になつて別荘とか使って修行してる所為か、時間の感覚が超適当で困る。

突発的にエヴァにプロポーズしてから一年ほどして、詠春が結婚すると言うので出席する事となつた。サインねだられて困つたわー。詠春の嫁さんは美人だつた。魔力の保有量は少ないみたいだけど、結構な気の使い手っぽい。物腰が剣振つてる人のそれだもん。

「出席してくれてありがとう、要」

「いやいやなになに。仲間の結婚式に行かないわけにはいかんだろ」

「ハハハハ、そうか。要は結婚しないのか？」

「…………以前に初対面でプロポーズした人が居る」

「なにつ！？どんな人だ？」

「金髪の女の子」

「は？」

「あ？」

「いや、そういうえば、要の性別って知らなかつたなあつて」

「男だぞ？」

「は、はは、そうだつたのか。ずっと女だと思つてたぞ。タカミチ
も、要の隣に立てるくらい強くなるつて言つて修行してたし」

「マジすか！」

その後、俺は麻帆良のタカミチに誤解を解きに行つた。面白そうだ
からつて黙つてたのが悪かつたな。

ちなみにだが、その後しばらくタカミチは抜け殻のようになり、更
に修行に打ち込むようになつたらしい。

俺達はビツという事もない、閑静な住宅街に家を買い、そこに住み

始めた。

ちなみにだが、戸籍はこうなつてこむ。
父 国後要。

長男 ザフィーラ。

長女 リインフォース。

次女 シャマル。

三女 シグナム。

四女 ヴィータ。

普通に母は居ません。だって結婚していないもん。養子といひ事になつていてる。

たまにマギステル・マギとしての仕事が入る以外は家でぐだぐだと遊ぶ。平穏な毎日。

俺はヴィータとゲームしたり、シグナムと碁や将棋をしたり、シャマルに料理を教えたり、ザフィーラと一緒に寝起をしたり、リインフォースとお菓子を作ったり。

偶に別荘で感謝の正拳突きをしたら、最初から音を置き去りに出来ていたり。シグナムと剣で打ち合つてみたり。

詠春の子供が生まれたと聞いて見に行つたり、タカミチをしばき倒してみたり。

詠春の子供が生まれて五年程経ち、そーいえばあのイベントが起ころ頃だよなー、と思つて遊びに行つた。

「おーっす、詠春！」

「おや、要じやないか」

詠春は接客モード。もとい、長モードから変わつて詠春モード。フレンドリーな口調になつた！

とこつかまあ、昔なじみの仲間なんだから、なんくらレフレンドリーに接して欲しいよね。

「ひまだつたから遊びに来たぞー」

「せうか。娘を紹介しよう」

「おー、木乃香ちゃんかー。大きくなつたかな?」

「元気に育つてるよ」

呼ばれてきた木乃香ちゃんは礼儀正しくペコリと挨拶をしてくれた。うんうん、可愛い子やのん。しかしまー、大きくなつたなあ。

「始めまして、近衛」のかです!」

「あはは、やすがに覚えてないかー。」のかちやんが赤ちゃんだつた頃に会つた」とあるんだけどねー」

「ややつたのー?」

「うふ、せういえば、血口紹介まだだつたね。国後要だよ。ようしくね」

「せやつたら、かなねえやなー」

そーいえば、俺つてば十歳児くらーの姿だから、男に見えないんだううな。まあいいか。

そんなこんなで、俺はしばらく関西呪術協会に逗留する事となつた。途中でシグナムたちもやつてきたりしたが。川イベントも華麗に回避してやつたぜーといつが、シグナムとかも居たからね。

「やんそろ、いつからも帰る事にするわー」

「やつか？」

「あんまりへ巡詰してると、こうさんせつかみ買こそりやしなー」

「それもやつか……また遊びに来てくれ

「ま、遊びにいかへんども、そのうち会こやつやナジな

なんか、いつちに届るいつかにのちやんの京都弁に呑もぢられて、俺の訛りが出てきた。

昔は京都近くに済んでたから、柔らかめの関西弁が出るんだよなー。じこりくんまではやてに似なくてもいいんだけどな。

別れる前に、また会う事を指きつけんまんで約束した。

「だからってアスナの意思を無視していい事にはならない！本人に聞いたのか！？」

記憶を消して、平和に生きていたいと！記憶を消さずに、皆の事を覚えていたいと！

そのどちらかでもアスナは言ったのか！？

「けど……！」

「お前だって……自分の意思で紅き翼に入つたんだろう！そこに後悔があつたのか！？」

自分の人生は自分で選び取るものだ！記憶を消して生きる生活が本当に幸せなのか！？

幸せとは誰かに与えられるものじゃない！自分で掴み取つてこそ価値があるんだ！」

「クッ……分かりました……僕も、少しばかり気が立つてたみたいですね……」

「いや、僕も悪かつたんです。さ、行きましょう！」

「いえ、僕も悪かつたんです。さ、行きましょう！」

タカミチに促され、俺はアスナが居る部屋へと入る。アスナは相変わらずの無表情だった。

いや、少しばかり表情が暗い。ガトウが死んだ場所を見ていたか……。

「や、久しぶり。アスナ」

「カナメ……？」

「覚えてた? といひでさ、聞きたい事があるんだ」

「なに……?」

「君には今、二つの選択肢がある。一、戦いの記憶を全て消し、平和に生きる道。

二、記憶を消さずに、そのまま魔法に関わり抜く。どちらを選んでもいい。

記憶を消しても消さなくてもいい。俺達は君を軽蔑したりはしない

い

「消さないつ！ 忘れたくない！ 頂のこと！ 忘れたくない！」

それは感情の吐露。辛い記憶も悲しい記憶も。楽しい記憶も嬉しい記憶も。全てが自分を創ったものだから。

忘れると言つ事は、死ぬと言つ事。今まで自分を創ったものが、全て消え去ると言つ事。

そして何より。あの辛い戦いの中でもあつた、嬉しい記憶。ナギやガトウ、タカミチ。皆が居たその思い出。

たとえ死に別れても、それは確かな自分の一部だから。

「分かつた。なら、俺達は君の記憶を消さない。それでいいな？ タ

カミチ」

「ええ……それが本人の意思なら……」

「他の馬鹿共が勝手に記憶を消したりしないよつこ、他の奴等には俺が説明しておく。

それでも無理やりやられたとした、その時はお前が止めてくれ

「ええ、分かりました」

結局、アスナの記憶は消さないことに。とは言つても、アスナの名前はそのままではアレなので、ガトウのミドルネームを貰い、神楽坂明日菜とつ名前になつた。

「なんと言つ誰得魔法」

暇つぶしに夜天の書を探つていたら、とつても誰得な魔法を発見した。その名も性転換魔法。ただし、性転換するだけ。

顔なんかそのままだから、おっさんとかが試したら凄く悲惨なことになるに違ひない。しかし、俺は男の娘だ。

というわけで、性転換魔法を使ってみた。どうせ戻せるらしいからいいよね。

「なんという八神はやて。これは同一人物としか言いようがない」

元々そつくりだつたしな。肉体年齢を変えてみれば、あら不思議。しつかり胸も膨らんできます。何故か騎士甲冑の胸が膨らんだりするけど、あれって偽乳だからな。

これで本当の乳になつたぜ！そんなに大きくないくけど。まあ、原作だと貧乳貧乳言われてたけど、そんなんでもないんだよね。普通の

部類に入るとと思うんだ。

単純に他の一人が大きすぎただけで。戦う相手が悪かった、そういう事だ。いや、そうとしか言いようがないのだが。

まあ、んなことはどうでもいい。一先ず肉体年齢を10歳に戻しておく。なんと言つハ神はやて……顔が男のときより少しだけふつくらしているのが分かる。

目も少しばかり垂れ下がっているし、体型も更に華奢になつたよう見える。これは純粹に女性ホルモンの影響だらう。顔立ちは変わつてない。ちよつくらアルでもからかつて来るか。よし、転移魔法起動つと。

「遊びに来たぞ」ノノヤロー！」

ワイバーンを指先一つでノックダウンして、アルの部屋に呐喊してやる。

「おや、カナメですか。お久しぶりですね」

「見よー男の娘から女の子になつてきたぞー！」

「……ハハハ、馬鹿も休み休み言ひなさい」

どうやら変身してゐるかどうかを見破らうとしたらしい。残念ながら性転換魔法はアルハザードが存在していた時代の魔法。肉体変性などお手の物よ。

「よおし、おまつといつち来い

「ええ、望む所です」

しばらくお待ち下さい。

「ゲホッゲホッ！ゲハッ！す、すいません。そちらの布巾を取って頂けますか？」

「ほらよ

一先ず裸になつてやつたら、鼻血を撒き散らして襲つてきたので、フルボッコにしてやつた。正直な話、ライフメイカーの時より酷い怪我なんじやないかと思う。

「ふう……やれやれ、恐ろしい破壊力でした……普段の男っぽい言動を知つていて、更には男と知つていたのが、唐突に女の子になつてくるとは……」

「まあ、あれは冗談抜きで恥ずかしかった」

アルにニヤニヤと見られてる前で服を脱ぐのは当たり前だが、結構というか、かなり恥ずかしかった。

しかしそれ、この魔法つて本当に誰得だよなあ。女に使つたら男の娘という事になるんだが、男に使つたら漢女おとめになつてしまう。そーいえば、アルつて中性的な雰囲気の奴だよな。男ではあるんだろうけど、女つて言わても信じそうな雰囲気があるから……。

「アル、ちょっと動くなよ」

「はい？」

夜天の書を起動して術式を奔らせる。どうでもいいが、俺とアルは魔導書を持ち歩いていた仲間である。というか、紅き翼で純粋な魔

法使いつて俺が入る前はアルしか居なかつたんだよな。

とはいつても、アルだつて肉弾戦はそれなりに出来るし、重力魔法は使い勝手がいいから、魔法剣士に近い戦い方も出来たからな。まあ、体が魔法使いタイプの肉付きだつたし。

俺は俺で、どつちも関係なかつた。後ろで砲台としての役目を果たす魔法使いではあつたけど、近接戦もそれなりに出来るからな。バインドでアルを拘束して、魔法を起動してアルを女にしてやつた。

「なつ……」これはっ！」

なんと言う破壊力。アルは見た目はあまり変わらないものの、肌のキメ細やかさや無駄毛などが無くなつて、中性的な雰囲気が更に中性的になつてしまつた。

よく見えないが、胸もわざかばかり膨らんでいるのが分かる。顔は変わらないと言つても、女性の象徴のような場所くらいは変わるのだ。しかしまあ……普通に美人だな。

「アツハツハツハツハッハ！－！－！アル、よく似合つてるぞ！」

「一」、これは……あまり変わりませんね

鏡を差し出してみせるが、確かに余り変わらない。そもそも顔はかわら無いのだから当たり前だ。というか、お前は男でも女でもんな感じだつたと思つ。

「さて、戻す前に記念写真でも取るか

「そうですね」

そんなわけで、記念写真を取つて、アルを男に戻してから帰つた。

「えー……ナギの息子が居るところ情報を掴みました」

「唐突ですね。主」

「俺のやる事が唐突じゃなかつたことがあるか?」

「ありませんね」

「という訳でだ、実際の所ナギの息子が居るのは知つてたけど、何処に居るのかは知らなかつたからな。ナギの故郷だとは想定GAYでした。

「という訳で、今からしつかりとナギの息子を教育すれば、ナギのような馬鹿にはならないんじやないか……そつ思つたんだけど、どう思つ?」

「それはまあ…… そうですね」

「なんであたしらがそんな事しなくちゃいけねえんだ?」

「話は最後まで聞く!さて……ナギの息子善良的バグキャラ育成計画に賛成の人は挙手を」

ぴぴっと手が三つ上がる。上げたのは俺とシグナムとザフィーラだ。

「さて、挙手した理由を」

「はい。男子であるならば、誇り高い騎士に……」

五分ほどシグナムの高説が続くのでお待ち下さい。

「と、いうわけです」

「次、ザフィーラ」

「はい。ナギの息子であると言つ事は、やはり将来的にはメガロメセンブリアに利用される可能性があります。であるからして、今のうちに力をつけておくべきです。

強い力は敵を生みますが、同時に守るべき人を守る楯となります。思慮深い知恵は敵であるかを見抜く力となり……」

やつぱりザフィーラの高説が五分ほど続くのでお待ち下さい。

「最後に俺だが、ザフィーラと殆ど同意見だ。その内、使いづらい英雄よりも、使いやすい英雄の卵として扱われる可能性もある。

俺達は平和の為に戦つたんだ。だったら、あいつらの子供達が平和に暮らせる世界を作れるならいい。

けれど、ナギの息子は既に魔法に関わってる。だったら、メガロメセンブリアの老人共に喰われない様に力をつけて欲しい

「主……なんとお優しい……！」

なんで泣く？

「ナージを踏まえてだ……協力してくれるか？」

手を上げなかつた三人へと視線を向ける。

「分かつた。カナメがそういうならあたしも手伝つ

「私もよ。やつぱり、男の子は強くなくや」

「私もです。その、ナギの息子とやらはみつちつと教育をしてやらねばなりません」

主に私達の精神の平静の為に。トリインフォースが続ける。そうだね、そうだよね。ショッちゅうナギの馬鹿に喧嘩売られてたもんね。あとラカンにも。

ネギが強くなれば、まず間違いなくラカンの丞先はネギに向かう……俺達への被害も減つて一石二鳥！ああ、素晴らしい人生を襲われない人生！

「というわけで、早速行きましょう」

有無を言わせず転移魔法を起動。割り出しておいた座標へと転移。

「のつわつーっ！」

転移したら何故か火の海でした。どうやらだが悪魔共に襲われている真つ只中だつたらしい。面倒だから仕事断つといつてよかつた。

「ザフライーラとコインフォースは赤毛の子供を探し出して保護！シ

グナムと俺は村を回つて悪魔の殲滅！シャマルはヴィータと一緒に怪我人を探して治療だ！解散！」

こちらへと襲い掛かつてきた悪魔を殴り殺し、俺は一気に駆け出す。転移魔法のセオリーを守つて騎士甲冑装着しといてよかつた。

ラカンインパクトのパクリ技、カナメインパクトで集まっている悪魔を木端微塵に碎く。シグナムはというとシユラングフォルムのレヴァンティンで悪魔共を薙ぎ払つている。

「数が多いっ！」

こいつら、大して強くは無いが（とは言つても一般魔法使いなら苦戦する程度の強さはある）数が滅茶苦茶に多い。恐らくは百人単位の召喚術師を使いやがつた。

シユベルトクロイツで悪魔の頭をぶち割り、コピーしたグラーフアイゼンで悪魔の頭をホームラン。時折広域殲滅魔法を放つが、村人の影響を気にして威力を絞らなければいけない。

探査魔法で人の有無を確認しようにも、石になつた人間は生体探査には掛からないし、人型の物体の探査を行つた場合、悪魔が引っかかる可能性もある。かといって熱源探査を行おうにも村は火の海で上手くは行かない。

「邪魔だテメエ！」

下半身を消し飛ばした悪魔が足に食いついてきたのでサッカーボールキック。ナイスショート！なんてふざけてる場合じゃない。

直線状に人型の物体がいるかを確かめて、闇の吹雪を放つ。まるでレーザーのような一撃が悪魔を一掃し、それと同時にこちらへと位置を知らせるように魔力反応。

この魔力の大きさと周波数はナギか。

「シグナム、ここへん任せた！」

「はい！」

シグナムに一言断りをいれ、最大速度でナギの元へと到着する。そこでは丁度、大型悪魔がナギへと拳を放つていて、ナギがそれを受け止めていた。

俺は背後から大型悪魔へと踵落としを叩き込み、一撃で粉碎する。その時、ちらりとナギの後ろに赤毛の子供。つまりはネギが居るのが見えた。

一斉に襲い掛かってきた悪魔へと、魔力で最大限に強化された蹴りをナギが叩き込み、悪魔の集団を吹き飛ばす。そして横からの雷の斧の薙ぎ払いで悪魔を一掃。

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

続けて俺が固まつた悪魔どもに直射型の砲撃魔法をぶつ放す。

「助かつたぜ、カナメ」

「気にすんな。って、お前の息子は何処行つた！？」

「なにいい！？」

何時の間にか消えたナギの息子。俺達はそいつを探して飛び出した。そして俺がネギを見つけたとき、丁度悪魔がネギへと石化魔法を放つとしているところだった。

「死ねっ！」

「ギャヒッー？」

そいつへとセリフと同じように踵落としを叩き込む。足が短いから蹴りよりも踵落としの方が決まりやすいんだ。

しかし、先程の悪魔よりも強度が高いのか。それとも俺の気の込め具合が足りなかつたのか。完璧には死に至らなかつた。直下でどうやらこの悪魔……たしかヘルマンとか言つたか。そいつの配下らしきスライムが動き出し、ネギへと襲いかかる。ううとする。

「やめんかクソアメーバ！」

咄嗟に魔力弾を適当に形成して牽制として放ち。こちらへと走つてきた二人の魔法使いが封魔の瓶で封印を施す。

「助かつた！あんたらは早く逃げろ！大体は一掃したが、まだ残つてる！」

「あんたは大丈夫なのか！？老いぼれといえども、抗うくらいは出来るぞい！」

確かに、原作だと石になつてた人だよな？なんだつけ？スタン・エルロン？

「任せろ！俺は紅き翼の国後要！そいつはシャマルとヴィータ！頼んだぞ！」

こちらへと思念通話で連絡を入れたので到着していたヴィータとシャマルに一人を任せ、悪魔の殲滅を再開する。

そして、悪魔を殲滅し終わり、他の皆が先に逃げいてた場所へと戻

つた。何があつたのかは知らないが、ネカネとジジイは氣絶してる。ヴィータが氣まずそうにしてるから、ヴィータが殴つたんだろ……。

「ナギ」

「ああ」

何も言わず、ナギはネギへと近づいていく。

「すまん……くるのが遅すぎた……いや、謝って済む問題じゃねえ……」

そう言つて立ち去りうつとするナギへ、ネギが杖をむける。初心者用の練習杖だ。

「お前……そつか……お前がネギか……」

それは何の皮肉か。自らの息子の顔すらも分からぬ父親。それは何の理由があつたのかは俺には分からぬ。けれども、それは悲しいこと。

「大きくなつたな……」

ナギがネギの頭に手を載せ、少しばかり乱暴に頭を撫ぜる。不器用な奴だ、相変わらず。

「やつだ……お前にこの杖をやう。俺の形見だ」

「お……父さん……?」

渡された長い杖は、ナギが戦乱を駆け抜けた頃から愛用していた杖。

「もう時間が無い……わりいな、お前には何にもしてやれなくて……」

「…

そう言つと、ナギは浮遊術で浮き上がる。それでも名残惜しそうに、手を伸ばす。

「こんなこと言えた義理じゃねえが……元気に育て…幸せにな！」

走り出したネギは転び、その間にはナギは消えていた。空間転移つてわけじゃねえな……雷を利用したゲートを使った形跡も無い。ただ、漠然と消滅……。分身つて訳でもなさそうだ。精神体か？

「お父さん
ん！…！」

ネギの悲痛な声が空へと木霊する。静かに涙するその姿は、本当にただの子供だった。俺はそのネギへと近づき、胸倉を掴み上げた。

「お前は弱いな……反吐が出るほど！」

その言葉を聞いて、ネギの涙が一層強くなる。

「力が欲しいか？」

「ちか、ら？」

「そうだ、力だ……悪を成す為の力でもない。正義を成す為の力でもない。ただただ純粹な力が欲しいか？」

憎い敵を殺すための力を、守りたい物を守る為の力を……力が欲

しいか？」

「ほしー、です……ほくはちからがほしいです！強くなりたい！もつともつと強くなつて！おねえちゃんを、おじいちゃんを守りたいです！」

「力が欲しいか……上等だ。ならば俺達がお前を鍛えよつ。血反吐を吐くほどに辛いぞ？」

「それでも、強くなりたいです！」

「一度と杖を握れぬ体になるやもしれんぞ？死んだ方がマシと思える事になるかもしけんぞ？」

「だれもまもれないまつが……」わいです……！」

「こつ、本当に四歳のガキか？」

「いいだろう。合格だ。事態が収束し、落ち着いたらお前の修行を始める。いいな」

「はー。」

そして、報告を受けてようやくやつてきた魔法使い達に事情を説明し、何故かサインをくれと言われたのでくれてる。ようやく終わった頃に、ネギがウェールズの町に移住するといつので俺もついでに家を買っておく。そして別荘を用意して修行が始まる。

第五話 原作崩壊の序章とネギ強化フラグ（後書き）

アスナの記憶が消されたのは、ネギが生まれた頃、だと思つんですね。

確か記憶が消された後はアスナは小学校に入学してましたし。
まあ、細かいことは気になくていいでしょう。

ネギ君強化フラグ。ネギではなくNEGエになる予感。

第六話 修行開始と日本と人間の醜さと（前書き）

修行風景をキングクリムゾンしたけどいいよね。

第六話 修行開始と日本と人間の醜さと

「さて、まずはお前は未だに四歳児。無茶な運動は後に影響を残す。という訳で、体を鍛えるのは軽めだ。まずは一十キロほど走れ。魔力で強化してもいいぞ」

「はい！」

素直に走り始めるネギ。ネギは初等科なので授業の終わりは一時頃。それから六時まで修行。休憩して飯を食つたら11時まで修行。そして就寝の毎日だ。大体ネギは五倍の速度で年を取る。

とは言つても、程ほどで調整するつもりなので、学校の卒業の頃は15歳前後だろう。その位で十分だ。実質十年間俺達と修行したことになるわけだし。

「終わったか？ 次は座学だ」

別荘のど真ん中にわざわざホワイトボードを用意し、色々と書き込んでいく。

「いいか？ 魔力総量つていうのは生まれつきのものだ。こればっかりは鍛えようが無い。ただし、術式の効率化、精神力の強化によって魔力消費量が変化する。

魔力をどれだけ上手く扱うか。それで魔法の使用できる割合が変化する。そうだな、お前が最大の効率で魔法が使えるとしたら、千の雷を百発は放てるだろう。

まあ、今の段階だと雷の暴風を放てるかどうか怪しいがな。ちなみにだが、千の雷の魔力消費量は雷の暴風の一十五倍。威力は十倍だ。どれだけの魔力があるか分かるだろ？」

「はい！」

「さて、お前は魔法学院に入り立てだから、口クな魔法が使えない。逆に考えれば、これから何にでもなれるつて事だ。

大まかに分けて、魔法使いには四種類ある。まずは前衛での高速戦闘や無詠唱魔法を用いた魔法剣士。後衛の長い詠唱を使用するが、強い威力を持つた魔法を使う魔法使い。

次に補助職。回復や他の人間への魔力による身体強化、魔力供給、結界や防御魔法に秀でた補助術者。強力な存在を召喚して使役する召喚術師。後者二つは特殊な例だ。

基本的には前者の二つから選んだ方がいい。魔法剣士になるか、魔法使いになるか

「お父さんは、どっちだったんですか？」

「ナギか？あいつは一応魔法剣士だったが……ある程度以上の実力者になるとその線引きは必要なくなる。現にナギは千の雷なんかの魔法も使えたし、無詠唱は得意じゃなかつた。

俺も一応後衛型の魔法使いではあるが、ナギと殴り合いで勝つた事もある。実際の所、俺は剣も拳も槌も使える

「ぼく、魔法剣士になります！」

「そうか。好きにしろ。だつたら肉体面のトレーニングを重視した方がいいな。ただし、俺はそんなんじゃ満足せん。

ナギに憧れるんなら、逆に追い越してやるくらいのつもりになら。というわけで、普通に魔法使いとしての修行もやる」

「はい！」

「さて、まずは魔法の習得だ。お前の適正は雷、風、光、火、氷、闇の順番だ。例外的に重力や予知なんてのもあるが、そちらへんは気にするな。

まずは魔法の射手。こいつは魔法学校でも習うな。ま、初等だからまずは火よ灯れくらいか?」

「あ、火よ灯れくらいなら……プラクテ・ビギナル・アールデスカツト」

「そう言つとほつと火が灯る。というかそんなのは知つてゐる。こないだやらせただろ?」

「んなこたあどうでもいい。まずは詠唱で魔法の射手が使えるようになれ。最初はお前の得意な雷とか火からでもいい。幸いにして、この別荘は大氣のマナが濃い。魔力の使い方さえ分かれば、なんとかなる。最初の課題は十個以上の魔法の射手を作れるようになること。

ただ、そんな事をはじめからやつてもやりにくい。といつわけで、まずは一本を詠唱で使ってみろ。

呪文は「光の精靈1柱、集い来りて敵を射て・魔法の射手」だ

「はい!」

という訳で、詠唱をして何度か打とうと頑張っている。こればっかりは出るまで頑張るしかないよな。と思つたら十回目くらいで出してた。流石はナギの息子つて所か。

魔法に関してのセンスはナギを上回る。それに、原作でもあったように、体なんて鍛えたこともなく、拳の握りも分からないというのに、ある程度接近戦も出来たのだ。

間違いなく格闘のセンスもあるだらう。更には魔法を新しく開発するだけの脳もある。なにこのチートキャラ。

「うーん……ネギじゃなくて、NEG-Hとかになりそつだな

「は？」

「いや、なんでもね

疑問符を上げたシグナムに手をぴらぴらと振り、魔法の射手を今度は三本に挑戦しているネギへと田を向ける。魔力の運用は案外上手い。

この調子なら、明日には十本到達も難しくはなさそうだ。本当に育て甲斐のある弟子だよ。

一週間ほどして、ネギが三十本の魔法の射手が使えるようになった。次の段階に移るつか。

「次、無詠唱の魔法を使えるようになれ。無詠唱つていうのは本来なら呪文によつてイメージを固定、また呪文による精靈の誘導を行うものだ。

これを詠唱しないで、自前の制御力だけで行う事を無詠唱といつ。詠唱を必要としないのは接近戦では大きなアドバンテージになる。また、魔法の射手は半アストラル状の物体であり、肉体への融和性がある。その為、拳に乗せて放つという事が可能だ。

魔法の射手の威力次第では、拳の威力を何倍にも出来る。魔法剣士が良く使う技だ。覚えておいて損は無いぞ」

「えっと、コツ、みたいなのは無いんですか?」

「知らん。俺は魔法の射手を無詠唱で使つたことなんぞない」

「ええええーーー？」

「いいからやれ！」

「はいいい！」

うんうん唸つて、十分ほどして一本完成。

「出来ました！」

「遅いわボケエーッ！」

「あたーっ！」

「何処が無詠唱だ！詠唱よりも時間かかつてんだろ？が！一矢を一瞬で出せるようになつとけよ」

ネギから離れ、ネギの修行についての案を練つていく。

「うーむ……」

魔法剣士になるとは言つたが、ネギは遺伝的に細身になるだろ？から、一撃の重さよりも身軽さを高めた方がいいよな。

となると、拳の方がむくのだが、リーチが短いからそれが致命的な差になりかねない。だとするとやっぱり武器を使つた方がいいだろう。

別に武器だけといつわけではないのだ。肉弾戦闘も仕込めばいい。

ラカンだつて剣は使えるが肉弾戦闘の方が得意なくらいだ。

「よし」

「あ、師匠！」

「よし。無詠唱は大体出来るようになってきたな。数は出来るだけ増やしていけ。それから、後でザフィーラに拳の握り方と殴り方。シグナムには剣の握りから振りまで全部教えてもらえ」

「はい！」

「お前はどうちかといふと剣よりも拳が向いてる。剣は基本を齧る程度でいい」

修行開始から一年。キングクリムゾンしたけどいいよね？だつて、基本的な戦い方を教えたり、魔法の運用やら精神力の強化。それから剣の握り方を教えて位なんだ。

まあ、一年とは言つても既にネギは10歳になつてるんだけどね。ああ、ついでに犬上小太郎捕まえてきたよ。原作キャラでネギくらいの強さつて言つたらこいつくらいしか思いつかなくて……。

「さて、お前等もだいぶ体が出来て來た。これから、実践的な戦い方の修行に入る」

「ホンマかー？」

「ホンマや」

「実践的な戦い方……ですか？」

「そうだ。お前等に今まで教えてたのは基本。詰まるところは道場剣術やら道場拳法みたいなもんだ。これからお前等には自分の力でそれを実践的な業へと昇華してもらつ。実戦の中では」

「よつしゃー！」

「頑張ります！」

意気込みは十分か。

「まずは、お前等一人で俺にかかるて來い。遠慮はいらん。殺す氣でやれ」

軽く体を解し、構える。それに呼応して一人も構える。

「いくでえつ！」

瞬動術で飛び込んできて、拳に大神を乗せて小太郎が拳を放つてくる。その腕を掴み、自分は体を低くして、小太郎の勢いを利用して放り投げる。

「光の11矢！」

ネギが無詠唱で光の11矢を放ち、その後に続いて走りよつてくる。自分の体に当たるものだけを届合い拳モドキで叩き潰し、ネギの拳

を横に滑るようにして回避。

そしてネギの背中へと向けて貼山靠を放つ（八極拳の技の一つ肩と背中を使った体当たり）。そのまま吹っ飛び、貼山靠で出来た隙を見た小太郎が犬神を放つてくる。

それを無詠唱の魔法の射手で潰し、放ってきた正拳を上に弾く。弾かれた勢いをも利用したサマーソルトモードキを身を逸らして回避する。

（やはり接近戦では小太郎の方に分があるな。野生の勘とでもいうのか、直感的な動作が鋭い）

さっきのサマソもどきは少しばかりヒヤッとさせられた。そもそも、弾かれたタイミングにあわせて蹴り上げるなんて、まともな人間に出来ん。ラカンやナギなら出来ただけど。

背後から放たれた白き雷を魔法障壁で防御。一瞬気を逸らされた瞬間に小太郎が再び瞬動を使って俺の顎へと拳を放つてくる。それをやつぱり身を逸らして回避。

その勢いを利用した小太郎の後方左回し蹴りを腕でガードし、飛び込んできたネギに後ろ蹴りを放つ。その足を回避し、ネギが背面へと魔法の射手を乗せた拳を放つ。

流石に避けるのは無理と悟つたので、魔力障壁を集中した右手で受け止める。一瞬のネギの硬直にあわせ、足を絡めるようにして蹴り飛ばす。

俺から既に離れていた小太郎は半獣化し、膂力と速度を増した拳を叩き付けて来る。恐ろしい膂力だ。拳に手を絡めるようにしてこちら側へと引き倒し、そのまま後ろへと振り落とす。

こちらへと飛行魔法で加速しての蹴りを放とうとしていたネギの蹴りが見事に小太郎の脇腹へと命中する。

「ぐげつ！？」

「あつー。」

一瞬目を見開いたネギへと延髓狩り。そのまま氣絶し、シャマルを呼んで小太郎を治療してもらひつ。

そして、二人が氣付いて昼食なのか朝食なのか夕食なのかも分からぬ食事を取り、反省会を始める。

「さて、お前等の戦い方で不味かつたのは何か分かるか？」

「えつと……攻め込みきれなかつた事でしょつか？」

「分からんー。」

少しは考えろよ犬ッ口ロ。

「はあ……まづ、小太郎の悪いところだ。お前の戦い方は悪くなかつた。状況把握も出来ていたし、ネギとのコンビネーションも上手くいつてた。

だが、お前はネギに合わせてもらつてるだけだ。自分から歩み寄つてみる。相手の呼吸と目線の動きを見極めるんだ。

それと突つ込みすぎだ。ネギが攻め込みきれなかつたのはお前が原因でもある。」

「えー、せやけど、ワイの速さについてこれるんか？」

「そんなんものは戦いの歌の鍊度次第だ。次にネギ。お前は人を心配しそうだ。小太郎を気遣いすぎる。少しくらい強引に攻めてみる。それと無詠唱魔法に少し時間が掛かっているな。今回は問題なかつたが、次からは無理をしき過ぎるな。隙さえあれば詠唱してもいい。」

そして、威力のある魔法を使わなかつたのも問題だ。お前が使つた最高のレベルは中位の下位呪文だつたな？雷の暴風くらい撃つてもいい。

時間は掛かるが、千の雷だつて撃てるんだろ？が。まあ、それは小太郎を巻き込んだらうが……俺はその程度じゃ死なんし、実戦で相手を殺さないなんてのは無理だ。

もしもお前がそいつを殺さなかつたら、そいつは恨みを抱いてまた襲撃してくるだろう

「ひう！」

「だつたら、また倒せるくらい強くなります！」

「阿呆。相手は人間だぞ。幾らだつて卑怯な手段をとる。お前の仲間を洗脳して人質にするかも知れない。罠を仕掛けるかも知れない。賞金を掛けられるかも知れない。

殺す覚悟が無いなら、魔法を執るのはやめろ。自分の手を汚すことは厭つてはいかん。本当に守りたい物の為に手を汚すくらい、甘んじて受ける。

手を汚す覚悟すらないのなら、守ることなんぞ諦めろ。守つて、守つた相手に罵倒されてでも守ると決めたんだろ？」

「はい……」

「何の覚悟もなければ喰われるぞ。相手だつて死にたかない。どんな卑怯な手を使ってでも命乞いをするだらう。うちには年老いた両親がいるとか、幼い妹がいるとかな。

大抵は嘘だ。たまに本当の場合もあるが……慈悲を掛けるな。残酷かも知れない。だがな、敵は虎視眈々と一瞬の隙を狙つてゐるまるで獵犬のようにな。殺すと決めたら殺せ。

お前らが死ぬと寝覚めが悪くなる。というわけで、死んだら地獄から引きずり戻してもう一回ぶつ殺すから覚えておけ」

「はいっー。」

「えらい酷い」とこつとつの「…」

「つむせえ。俺はやるところたらやるからな

シグナムとザフィーラに一人の相手をするように囁いて、外に出る。そして転移魔法で麻帆良へと向かう。アスナのところに行くのだ。こつちはこつちで色々と変わっている所がある。まずはタカミチが魔法を使えるところがうだ。居合い拳だけではなく、魔法の射手なんかも使える。

アスナは記憶を失つて居ないし、自分の能力を完璧に自覚しているので、それを操れる。ある程度はだが。

「よつ、やつてるか?」

何時もの修行場所に転移すると、丁度いい具合に一人が修行をしていた。

「あ、カナメさん」

「カナメ?」

「どうでもいいのですが、要と呼ばれたことが少ない。

「調子はどうだ?」

「ええ、いいですよ。アイドネウスの調子も」

アイドネウス。俺が作ったストレージデバイスだ。タカミチは呪文詠唱が出来ないだけで、魔力や気はある。つまり、呪文詠唱さえ出来れば魔法も使えるのだ。

デバイスというのは元々魔導師が演算と詠唱を肩代わりさせる為に作ったもの。流石に儀式魔法のサンダーフォールなんかは必要だが。それを利用して、アイドネウスに呪文詠唱をさせるようにしてみたところ、タカミチにも魔法が使えるようになつたのだ。随分と喜んでいたなあ。

ちなみにだが、形状はネットクレス型だ。ガントレット型にしようかとも思つたんだけど、居合い拳は拳の速さが必要だから、重いと駄目だからね。カートリッジは無い。邪魔だ。

「アスナもどうだ？」

「うん、いい感じ」

アスナも最近大分表情が増えてきた。麻帆良の学校に通い始めて五年ほど。今は小学校四年生だ。ちなみにだが、学校の成績は優秀だそうだ。

そりやまあ、原作とは違つて新聞配達のアルバイトをしていないから、勉強もちゃんと出来ているのだろう。元々の頭の出来はいいのだから。

NEG IだけではなくASUNAになつてしまつたな……というか、タカミチも魔法が使えるようになつてからTAKAMITIか？いや、もひつちの、ヴォルケンリッター異常な強さだから、VITAとかSHIGUNAMUとかだらうな。英語表記じやないのがミソ。

「ハマノツルギは使えそつか？」

「まだ、無理」

ハマノツルギ。アスナ専用のアーティファクトだ。アスナ専用というよりは黄昏の姫御子専用といった方が正しいか。所有者の名前が刀身に刻まれる。

これは魔法無効化能力を外部へと放出する特製を持つており、持つだけで無意識に伝導させる事が可能なほどに能力との相性が良い。材質不明だ。

難点といえば、魔法を無効化してしまって認識阻害符や影の倉庫に仕舞えないことだろうか？魔法世界ならそれでいいんだが、こっちだと無理だな。

その意思に呼応したのか、ハリセンという形を取っているが、使用者の意思次第で剣の形を取り戻す。しかし重くなるので使えない。今のアスナは小さいしな。

感掛け法を使えばいいのだが、今のアスナではあつという間にバテてしまう。中学生くらいまでになれば、気の使用だけでも十分なんだろうけど。

「うーん……」

「どうしたんですか？」

「うん。ネギと小太郎も丁度いい具合に育つてきたし、アスナと戦わせて見るのもよそそうかなって」

その言葉に、タカミチがこけらへと顔を寄せて耳元で囁く。

「それ、大丈夫なんですか？」

「……やつぱりますいかな？」

アスナはナギと一緒に旅をしていたのだから、当然の事ながらナギを知っている。趣味とかも。

そして、自分の姉であるアリカ姫と結婚した……つまる所ネギはアスナの甥である。逆を言つとアスナはネギの叔母である。それだけならいいのだが、ネギには故意にその事を秘密にしてある。というか、俺は紅き翼所属だと言う事は話していない。昔の知り合いだという事しか言つてないのだ。

スタン爺さんやネカネさんにも話さないように言つてある。両親のことは知りたいだろうが、今は話さないほうがいいのだ。

確かにナギは素晴らしい功績を残したが……自分がやりたいが為にやつたのだ。気に喰わないからと言つて戦争に参加したくらいだ。義なんぞ無いも同然だ。

その事をネギには理解して欲しい。自分自身の意思が重要だと言つ事を。子供の頃からナギの英雄譚を刷り込まれたら、盲目的にマギステル・マギを目指すだろうから。

「まあ、アスナに口止めしとけばいいだろ」

「まあ……大丈夫ですかね」

アスナにはギアスも掛けられないからなあ。まあ、アスナは賢い子だから、いやASUNAは賢い子だから。

「んじゃあ、つれてくるからちつと待つてろよ」

転移。こっちのゲートは面倒だが、リリなの転移魔法はそれほど難しい魔法ではない。Aランクあれば使える魔法だ。まあ、全体からすると十分に難しいが。

で、別荘に入つてフルボッコの一人をザフィーラに担いでもらつて外に出る。普通は中に入つたら一日は出れないのだが俺の別荘はそ

「いらっしゃんの制約は無い。」

「ナリハいえば、夕飯はどうしましようか？」

「あー…… 麻帆良の食堂を使えばいいだろ。いい加減イギリス料理は飽きた」

一年もコツチに住んでるのと、日本食が恋しくて仕方ない。懶々転移魔法で家まで帰るのもアレだし、時差があるし。

「フフ…… 日本食は久しぶりですね。楽しみです。ええ、楽しみです」

シグナム、和食党だからなあ…… 僕も和食党だけビ。

「ヴィーター！ 今から日本にいぐぞーー！」

といつと、物凄い勢いで扉が開かれてコツチにやつてくる。背中に
は水銀燈が乗つてる。

「いやつたー！ 行こうー！ 早く行こうー！」

テンションたけぇな。なんでかとこいつと日本のアイスが食いたいらしい。日本でしか売つてないアイスもあるからなあ……。

転移魔法で買いに行けばいいんじやないかとも思つが、そこらへんはそれ、らしい。よくわかんねえ……。

「シャマルは？ 冷蔵庫にでも入つてるのか？」

〔冗談でがちりと開いてみると、何故か涙目でこいつを見ているシ

ヤマル。俺はそっと扉を閉めた。

「俺は何も見なかつた」

『あけてく、ださこよう!誰かたすけてええええええーー。』

オープンチャンネルで念話が響く。実を言つと、この世界で念話が通じるのは俺とヴォルケンリッターだけだ。術式を理解して無いと使えないから。

あんまりにも五月蠅いのであけてやると、騎士甲冑を身に纏つたシヤマルが出てきた。騎士甲冑には体温保護機能もあるからな。

「はうひ……く、暗くて寂しかつたんですねーそ、それなのにー。」

「いや、分かつたから。泣くな。んで、なんであんな所に居たんだ?
?」

「え、えつと……入れそつかなつて思つて入つたら、勝手に扉が閉まつちゃつて……」

まあ……冷蔵庫つて内側からは開けられないしな……そもそも入るなよ……といふか、旅の扉を使えばよかつたんじゃないか?手だけ外に出して。

そこらへん忘れてたんだろうな……うつかりシャマルだし。シャマルを泣き止ませる頃にはリインフォースも来ており、全員が集合していた。

「それじゃあ、行くか」

転移魔法を起動して全員で転移。リリカルな転移魔法は同時に複数

転移も可能だからな。ちなみに戦闘中に使えるようにも出来たりする。失敗すると悲惨な事になるが。いしのなかにいるみたいな。夜天の書はそこらへんの処理能力が馬鹿げているので、魔法の同時使用は不可能になつても、高速で連続転移が可能だつたりする。やらなければ。

んで、先程と同じようにマスナたちの所へと連れて行く。

「ネギ・スプリングフィールドです。ようじくおねがいしますね」

「犬上小太郎やーよろしくなー！」

「神楽坂明日菜。よろしく」

今考えると同年代だよな。ビーフでもいい話ではあるのだが。

「わい、俺はちよつと用事があるんでな。ほれ、ヴィータ。お小遣い

「ありがと！」

ヴィータに五千円札を手渡し、他の皆も久しづりの日本を好きなようになんて楽しんで来いと言つて解散。

目と鼻の先にエヴァンジエリンの家があるが、エヴァンジエリンに相応しい男になるべく今は会えない。身が引き裂かれる思いとはこの事か……。

るーるーと涙を流しながら、学園長室へと向かい。あいも変わらずエイリアンのような爺さんと碁を打つ。打倒シグナムを目標して修行中なのだ。

「まつほつほ、中々の腕前になつてきたのう

「まあ、じつは別荘で練習してるんだな。そういへ、別荘で過ごした年数を計算したら今年で73歳だった」

普通に外で過ごしていたとしたら、34なのだが。別荘を使いすぎている。別に不老なので問題は無いのだが。俺は寿命で死ぬことは無い。

病気には掛かるが、基本的に魔法で治せない病気は無い。とはいっても既に遺失魔法に含まれる魔法なので、俺以外には使用できないんだが。

細胞が癌化することも無いし、死ぬとしたら殺されるか自殺くらいだ。とはいっても俺を殺せる人間が居るかは知らないが。出来るとしたらヴォルケンズくらいだが、管理者権限で俺は襲えないし。

「ワシより年上になってしまったの一。カナメさんと呼んだ方がよいのかのう?」

「よせ、気持ちわりい。普段どおりでいい。単純に俺も練習しているんだって言いたいだけだ」

「そうじゃのう……むつ、待つた」

「却下」

「むむ……」

額に手を当てて考え込む学園長。全く、碁というのは奥が深い。使えない石や意味の無い石を死んでいる。あるいは使えなくして死なせる。と言つただが、その後の動き次第でよみがえらせる事も出来る。

そして、最悪の一一手すらも後に最良の一手へと変える。相手の考えを読み、相手の思考を誘導し、相手の邪魔をする。

まるでピアニストが奏でる旋律のように盤面は刻一刻と変化を遂げていく。それはまるでワルツを踊っているかのよう。

「これでどうじゃ？」

「はい」

「ぬああお……ま、待った！」

「却下」

うーむと頭を抱えるジジイ。

「ムッ？」れびどうじゅやー

ビシッヒジジイが石を打つ。む、これはいい手だ。これから動き次第では挽回出来るかも知れないな。

「まあいいか……ほれ

「うーじゅやー」

「わー……うーじゅだうだ？」

「そりゃーー」

一々ウルセエなこのジジイ。遮音結界張つておひへ。

「ほれ

「…………」

「ふむ……これでどうだ?」

「…………」

「それ

「…………?」

「参りました……」

「ギリギリだったな

「一半天の差で俺の勝ち。結構厳しかった。あのまま終わってれば九
回差くらいで俺の勝ちだったのだが。

「流石じやのう。これでワシの十六勝八敗かの」

「そうだな

碁石を全て片付け、時間を見ると丁度いい時間だ。そろそろ帰らな
いとネギが明日の学校に遅れてしまう。

「そんじゃあな

「またの」

ぴらぴらと振られた手を見てから外に出る。

森へと向かうと、どうやらネギ達は結構やられたみたいだ。アスナは昔からナギたちに連れまわされてたからな、運動神経はいいし、王家の魔力がある。ナギたちの戦いも見ていたのだから、そちらへんが動きにも反映されてる。

どうやらだが、一対一を何度も繰り返していたようだ。ネギ＆小太郎ＶＳアスナ。小太郎＆アスナＶＳネギなどを繰り返したらしい。時には三人で組みタカミチ相手をしたりもしていたようだ。中々頑張ってるな。

「ネギ、小太郎。そろそろ帰るぞ」

「あ、師匠。もう帰るんですか?」

「えー、なんや、もじょっとくらいええやんか」

「早く帰らない」とネカネにお仕置きされる

「うわーはやくかえりたいなー」

「そやなーはよかえらんとあかんなー」

虚ろな目をして何処か諦念にも似た感情が込められた声で呟く少年二人。そんなにネカネが怖いか。名残惜しいが、転移で家へと戻り、一人は眠りについた。さてさて、そろそろ卒業としてもいいかな……。

マギステル・マギとしての仕事。仕事を凱旋してくるのはメガロメセンブリアの老人共だが、そこには確かに救える命がある。老人共は自らの権力を高め、保身の為に大抵の事を行つが、中には氣概に溢れた義憤に燃える人間も居る。

元老院の下位であるレイル・アークайдもその内の一人である。俺は彼からよく仕事を頼まれる。

元老院の一人である彼にはマギステル・マギを動かす権限があるのだ。今年で68にもなるというのに精力的な人間だ。

彼自身、元々は戦災孤児である。今から約59年前に行われた戦争の被害者なのだ。ただの孤児が元老議員になるなど、生半な努力では不可能だったろう。

一人でもいいから、自分のような人間を生みたくないと彼は笑っていた。

今日の俺も、彼からの仕事で動いていた。違法研究機関を潰すために。

魔法世界は旧世界とは全く違った文化を築いている。町並みは18世紀を彷彿とさせていても、空間モニター や空中を飛行する戦艦など、旧世界を遙かに上回る技術がある。

また、旧世界とは違つて半人半獣が酷い迫害を受けてもおらず、闘技場などの文化もある。そこには当然ながら信仰も含まれる。
所々に旧世界と同じようなもの……例えば狼族の信仰する宗教に魔狼フェンリルが居たりもする。不思議な共通点だ。こちらでは信仰の最高神として扱われてるなんて。

さて、信仰というのは案外重要である。精靈魔法もあるが、陰陽術のような魔法もある。そこには信仰魔法もある。

例えばだが、パンとワインがキリストの体と血に変化したという伝承があるように、ワインを魔法薬の材料に使ったりもする。また、聖書には人間や動物の事は書かれていても、魔獣や吸血鬼は書かれて居ない。それを利用し、神の教えには吸血鬼など存在していない。だからお前は存在していない。

という風に存在否定の魔法もある。これは仙術の禁術（禁じられた技術ではなく存在を禁ずる技術）に近いものがある。禁術の方が汎用性があるが。鳥を禁すれば飛べなくなるし、炎を禁すれば燃えなくなる。熱いけど。

そして、信仰魔法の最たるものに再誕がある。イエス・キリストが復活を遂げたように、神もまた復活すると。それを利用し、人間に神を下ろし、神にしようというのだ。

当然ながら、人間はそんなものに耐えられない。片つ端から魔獣や異形へと変ずるだろう。だが、狂信者が恐ろしいように、それを平然と行う組織もあるのだ。

「灰は、灰に。塵は、塵に。土は、土に」

実験場の人間は死ぬことすらも許されない。灰は灰に帰り、塵は塵に。そして最後は土へと帰り、新たな生命の芽吹きを促す。

異形へと変じた人狼族らしき女性をレヴァンティンで一刀両断し、火で焼き払う。そこには骨すらも残らず、濃密な魔力と灰のみが残つていた。

死は開放か、それとも新たな旅立ちか。それはわからない。けれども苦しみからは逃れられたのだろう。そう思わなければやつてられなかつた。

神を卸す。それは神聖な言葉でありながら醜悪な意味を持つ。神を卸すには子供でなければいけない。それも胎児でなければ。

神の子であるイエス・キリストは処女懷胎であつた。現実的には不可能でありながらも、魔法を使えば出来ない事ではない。

そうして孕んだ子へと神を卸す。俺は信仰魔法について詳しくないから説明は出来ないが、それが生贊を伴う邪悪な儀式である事は間違いない。フェンリルは魔狼であり飢狼であるから。

そして母体として使われた女性は神の力の一端を受け、その力に耐え切れずに異形へと変ずる。けれども神の一端であるから死は許されない。自殺とは最も罪深い行為であるから。

生まれた子供は神の力を宿し、けれどもやはり、その力に耐え切れずには死ぬ。あるいは異形へと変じていく。

呻き声と悲鳴、啜り泣きが聞こえる。時折赤ん坊の弱弱しい泣き声と醜悪なバケモノの唸り声が聞こえる。精神が削れて行く。十五年前の自分。平和に暮らしていた自分には耐え切れまい。

最初に人を殺した。手が震えた。血を浴びたわけでもない、直接殺したわけでもない。それでも震えた。怒声と悲鳴が耳から離れなかつた。

凄惨な光景に目を背けた。信じたくなかった、人がここまで残虐になれるなんて。壮絶な陵辱の光景に涙を零した。何故人はここまでして人を貶めることが出来るのか。

今ではもう、震える事も、目を背ける事も、涙を零す事も無い。覚悟が出来たから。守りたいと、そう思つたから。仲間を、家族を、守りたいと。

震えていたら、仲間を守る為に手を動かせない。目を背けていたら、仲間の危機に気付けない。涙を零してたら、仲間に笑われてしまうから。

だから、耐えなくちゃいけない。けれども慣れてはいけない。人を殺す事に、凄惨な光景に、陵辱に。慣れてしまつたら、壊れてしまうから。耐えなくちゃいけないから。

俺は確かにチートオリ主ではある。けれども人間だ。人を殺して笑つてなんか居られない。平然と力を振るう事も無い。それが暴力だ

と分かつていいから。

一步踏み出す。足の下の羊水と血液の交じり合つた液体が気持ち悪い。夜天の書に命令を送り、周囲に強力な火炎魔法を放つ。出来ない事はしない。それは残酷な事だから。

一步一歩踏み出す。ここまで殺した人間は全員が人狼族だった。珍しいことに研究者も全員が人狼族だった。狂信的だった。目はギラギラと輝き、人狼族の誇りである筈の毛並みすら手入れなどしていなかつた。

気分が悪い。ここから早く出たい。襲い掛かってきた研究者の頭をシュベルトクロイツで叩き割り、戦意を喪失している研究者をバンドで縛り上げる。事情を聞く奴も必要だからだ。

最後の部屋。今まで機械的な雰囲気が一変し、古代の神殿のように石造りの部屋だった。部屋からむつとした血の匂いが零れて来る。十や二十では足りない。夥しい数の人間が死んでいるのだろう。だというのに一切の腐臭がしない。扉を開く。血の匂いが更に濃くなる。そこは石造りの浴槽だった。大量の血液が満たされている。そこには巨大な肉塊。母体の成れの果てだ。

母体の腹、と思わしき部分が裂けている。これは明らかに特別待遇だ。大量の血液から魔力を感じない。恐らくは餌に使われたのだろう。だとしたら、既に生まれている可能性もある。

「居た……」

何故気がつかなかつたのだろう。母体の顔に当たると思われる部分に、灰色の髪の毛を後ろに流している少女が居た。

その顔には表情もなく、ただ、自分の母体であつた物体へと目を向けていた。禍々しいまでに強い神氣。気を強く持つていないと食い殺される。

「おい、何をしていいる?」

「わふ……」

喋れないのか……？体つきは殆ど人間。耳と尻尾が生えている以外は人間だ。どちらかといつハーフであるといわれた方が納得できる容姿だ。

いや、それとも、ハーフの子供にフェンリルを卸したのか？だとしたら、完璧な人狼族になつていてもおかしくないのだが……。そもそも、仮にハーフや完璧な人狼族としても、喋れないと言う事は無い。小太郎だつて喋るし、原作のメイドチーフだつて喋つてた。メイドやつてるよか傭兵やつてる方がにあつてるけど。

「わうー・わわ'づー・」

「いや……意味がわかんねえよ」

敵意は無い。むしろ、尻尾をふりふりしていることから「機嫌な」とが分かる。年の頃は12歳くらいに見えるが……生後数日所か数時間つて所だろうな。

軽く魔法で探査してみる。なるほど、体の構成からすると、やつぱりハーフのようだな。ただ、そうなつているだけだが。実体はどちらかというと、ハーフの形をしてているというのに近い。

フェンリル本体を卸したわけではないが、どうやらフェンリルの分霊を降ろしたようだ。分霊とはいっても、帝国の軍隊が出てきても勝てないレベルの強さだが。

で、まあ、さつきからずつと母体を見ていたのは、これが自分を生んだものだというのは分かるが、生物だとは思えないということからだらう。

生粹の人狼族だつたならば、本能だけで気付いたのだろうが、ハーフだつた所為で気付けなかつた。そして始めて目にした自分と似た

存在を親だと思つた。そういう事のようだ。

ちなみにだが、理解不能の言葉を喋つてるのは言葉が分からぬわけではないようだ。単純に声帯が狼のものに近いからのようだ。魔法生物の狼に酷似した生態を持っていたのだ。

「わうわうーわふふ！」

「やれやれ……一緒に来るか？」

手を差し伸べる。救われぬものに救いの手を。これはただの偽善だ。救えなかつた命があつた、だから変わりの命を救つた。偽善だろうと為す事に意味がある。

「わうー！」

「じゃあ、行こひ。お前等も、行くぞ」

後ろで嘔吐を繰り返しているネギと小太郎に声を掛ける。認めたくなかつたのだろう、魔法使いがこんなことをしてゐなんて。ネギは魔法使いは皆須らく立派な魔法使い（マギスティル・マギ）を目指していると思った。魔法とは正義の為にと。独善的な考え方。小太郎はこの状態の邪悪さに。人を人とも思わぬ所業。西からコイツを引き取つた時、原作とは違つて仕事はしていなかつた。現実の辛さに、耐え切れなかつた。

「覚えて置けよ。これが人間の邪悪さだ」

俺の言葉に一人は言葉を返さず、呆然とこの邪悪な場所を眺めていた。捕縛した研究者も交えて転移魔法で外に出て、レイルに仕事の終了の連絡をする。

近場の拘置所へと研究者を連れて行き留置してもらい、仕事は終了だ。

これは一人の卒業試験だ。試験とは名ばかりで、実際は現実の厳しさを知つて貰うための試験だつたが。

これを乗り越えられるか、それ次第だ。

第六話 修行開始と日本と人間の醜さと（後書き）

ネギの強さはラカン戦前のネギと戦つたらギリギリで勝つくらいです。

闇の魔法を習得したら、ラカンに勝利することも可能でしょう。小太郎の強さも同じくらいでしょう。我流でも師匠が居れば大分変わるらしいので。

アスナは原作でリーダーを決める戦いのところで、ネギに完勝できるくらいには強いです。ただ原作での話しなので、この作品ではいい勝負。で終わるでしょう。

タカミチは魔法が使えるようにはなりましたが、元々が魔法剣士だったのでも、あまり変わっていません。ただ、遠距離での攻撃手段が増えているので手ごわくなっていますが。

やっぱり水銀燈に関して削除しました。なんでお出したんだろう。ちなみにですが、後半に出てきた狼娘は今後一切登場しません。ご了承下さい。

ストックがなくなつたので、更新は遅くなります。

第七話 転校生と変態と初恋と（前書き）

今回は物凄く暴走した気がします。

あと、前々から主人公は変態だと言つていきましたが、更に磨きが掛かってしまっています。

あと、砂糖吐きそうです。

第七話 転校生と変態と初恋と

「詠春から頼まれたことがあるから、麻帆良に行かなきゃなくなつた」

「唐突ですね」

「まあな。しかも、期間が長い。なので、いつそのこと麻帆良に移住しようという事に」

「ああー、それもいいかもな」

最近ここがキツイのである。まあ、ヴィータとか年取らないしな……。

「それに、麻帆良は大きな街だし、結構美味しいものも多いんじやないかなと」

「行きましょう」

即座に返事を返してくるリンフォース。彼女は食いしん坊キャラである。

「家に関してはジジイを齎して用意させてある。それと、皆には裏側の警備員になつてもらうことになる。嫌なら断るんだけど、どうする?」

「私は異論ありません」

「あたしも

「えーっと……私は治療係ですよね？それだったら大丈夫です」

「問題ありません」

「ええ、是非とも行きましょう。ええ」

お話を聞いてたかな？リインフォース？まあいいよね。それじゃあさつそく行こうか。夜天の書の格納領域に家財道具を全て放り込む。いやあ、梱包とかしなくていいから楽だね。

あつという間に家から物が無くなり、引越し準備は完了となる。転移魔法で麻帆良の何時もの場所に移動する。

そして事前にジジイに用意させておいた家で部屋の割り振りをし、家財道具を設置するように夜天の書を置いていく。格納領域のものはヴォルケンズでも出せるように設定してあるからな

俺は学園長室に赴き、仕事を請ける旨を伝える。

「それで、どういう形で木乃香に関わるんじや？」

「うーん、妥当なのは教師だな。しかし！俺はここで予想外な札を発する！そう！それは転校生！生徒として転入すれば万事OK！」

「な、なんじゃってー！」

「安心しろー俺には男の娘という無駄な自負があるー今年で19歳だろとかいう無粋なセリフはつけない！」

「来た！これで勝つー黄金の鉄の塊であるカナメが女装程度できぬわけが無い！」

なんだか妙なテンションになりながら、事前に性転換魔法で女になつておいたので、肉体年齢を14歳にして（今アスナは中学一年の一学期である）着替え始める。

下着が男物だが、そんなもの後でどうでもなる。今日は土曜日だから明日買つてくれればいいだろ？

「どうだ！似合つか！」のえもん！」

「似合つてあるぞ。不気味なくらい」

わるづざんしたね。ちなみにだが俺は寮には住まずに家に住むことになっている。面倒だったから適当な理由でそうしてもらつたのだ。

「よつしゃーちよつとアルに見せてくるー！」

ひやつほつと言つた調子で学園長室を飛び出し、時速80キロ前後で走る。麻帆良では日常茶飯事の速度だから困る。

図書館島まで最高速度で駆け抜ける。時々矢とか飛んでくるけど、そんなもん楽勝で回避してやるぜ。

そう思いながら走つていると、図書館島を探索しているらしき女生徒を発見。女三人と男四人。妥当なチームって所かな？まあ、関係ないけどね。さわつとトライップを回避しながら奥へと進み、アルが居る部屋のドアを蹴破る。

「おや……カナメですか。結婚してくれませんか？」

「断る。どうだ？似合つか？」

「ええ、似合つてますよ。意味不明なほどで」

「なんでジジイといこつは似たよつな」とを囁つんだろつか。まあ、どうでもこゝか。

「ほらほら、似合つてます。私も学校の制服を着るんは初めてやから、似合つてると不安やつたけど」

「とも似合つてますよ。ええ、所で結婚を前提にお付き合つしてくませんか?」

「断る囁ひにやい。なんせ囁ひたら分かるんや」

「所で、その関西弁はなんですか?」

「うん? キャラ作りやー私が転入する予定の2・Aは個性的なメンバーの集まりや……ここには方言の一つでもあらへんと、飲み込まれるからな」

「普通に英雄といつ時点で十分なキャラだとは思いますが……あと、私と付き合つていただけませんか?」

「だが断る。そちらくんは人に言えくんしな……あえて男のままで転入するとか?両親の方針で女の子として育てられていたとかはどうや?」

「なるほど。いいかもしません。そして男の子に告白されて暴露するんですね」

「むしろ男じやないと駄目だつて言われるんか?」

「私なら間違いなく言いますね……それはそつと、先っぽだけでいいので……」

「二十万」

「円ですか？ ドルですか？」

「いや、「冗談なんやけど。貴様に処女などやらぬわー」とこいつか、男とやるなんて「冗談じやない。所で79歳で童貞っていうのは不味いんだろ？うか？」

「貴方が死んだら医者を洗脳して童貞を拗らせて死んだとカルテに書いてあげますよ」

「なにその最悪の死因。なにがなんでも死ねねえ。

「おや？ 厨一病の方がよろしかったですか？ 死因・心臓のインフルノペインの暴走により死亡。なんてどうです？」

「それは医者が厨一病なんじゃないか？」

「では、右目の「キュートスブラッドを限界を超えて使用した為に脳に負荷がかかり死亡」。はどうですか？」

「だから、それは医者が……」

「ああ、雰囲気が暗いと？ ダーク系ではないとすると……セントス・ザナドウ・アルカディアの拒絶反応により死亡。なんてどうでしょうか？」

だめだ、自分の世界に入ってしまった。自分の影を媒体にしたゲートを作り、来る時もこれを使えばよかつたと今更気付く。やれやれだな。

自分の部屋を片付けた後、女性物の下着類を買っておく。自分の体のサイズは解析魔法で診断できるので計測の必要は無い。なんだかいけない事をしているような気がしてドキドキした。今年で80になるのに……一人称もワシとかにした方がいいんだろうか？にあわないからやめとこ。

男の時は大き目の服を買っておくだけで済んだけど、女の場合はそろはいかんよなあ。大き目の服を買ひにしても、下着は流石にどうにもならん。

別に男のまま転入してもイケそうな気がするが、流石にそれは不味いだろうと思う。女になつておけば、意識せずとも女性らしい振る舞いも出来るからな。変身魔法なんて田じやないぜ。

今日は俺が転入する日だ。2-Aの一学期の始まりの日。俺は少々緊張しながらも入り口の前で待っていた。

「さて皆、今日、このクラスに転入生が来る

「えー！あたしの情報網には何も情報が……」

「新しい友達が増えるね！」

「やったねたえちゃん！」

たえちやんつて誰？ちなみにだが、俺は本名ではなく偽名で転入することとなっている。英雄って言つのねうぜーからな。単純に偽名を使いたいだけでもあるが。

その名も八神はやて！当然ながら関西弁を喋ります。実を言つと、前世では関西圏の人だつたからね。まあ、標準語に慣れてるから、意識しないと使えないんだけど。

「じゃ、入つてくれ。八神さん」

「はいな～」

俺はガラリと窓を開けて中に入る。当然ながら設置された罠は正規の入り口に設置されているので意味を成さない。といつか、いつの間に仕掛けた？ギャグ時空つて奴か。

「……なんでそこから？」

「いや、普通、転校生に罠を仕掛けるんはお約束やろ？引っ掛かるのは嫌やし、一発ウケを狙わなあかんかなーって」

「そういう意味不明な事はいいですから……皿山紹介を」

「建前を教えてもらつたために存在する学校に通つことになつた八神はやてです。よろしくうな

「ねえ、なんで思いつきり学校の存在を否定するのかな？そつ思つても少しは黙つてしまつよ、ねえ？」

「建前を教えてもらうために存在する学校に通つ事になつたという本音を隠し、家の都合で転勤してきたという建前で学校に通つこと

になつた八神はやてです。よろしく「

「全然隠せてないからー。」

「家の都合で転勤してきた八神はやてです。よろしくおねがいします」

「今更隠しても遅いから」

「あんま五月蠅いとエクストリーム耐久バトルが火を噴くぜ」

「アハハハハ、それじゃ、H.R.ははやてさんについての質問とかにしようか」

見事なスルー。エクストリーム耐久バトルとは文字通りの耐久バトルである。別荘を使い、一日中戦い続ける修行である。

たとえ致命傷を負ったとしても、待機している医療班（シャマル－人だけ）が即座に回復。魔力がなくなつてもシャマルが回復。気が無くなつたら誰かが供給（生命エネルギーなので魔力よりは簡単に分けられる）。

血反吐を吐こうが、泣き喚こうが、一日が終了するまでは戦いは終わらない地獄の修行である。

「それじゃあ、私が代表として質問させてもらつよ。私は朝倉和美。よろしくね」

「よろしくな～」

「それじゃあ、妥当な所で彼氏とか居る？」

「こりんなー」

「ん、そつ……んじゃあ、特技とか趣味は?」

「特技は男装と女装。趣味は料理とエクストリーム耐久バトルやな」「え?あれ?男装?女装?えーっと……なんで」さちに転校してきたの?」

「仕事の都合やな」

「訛りあるけど、関西の生まれ?」

「せやで、ゆーても、ひひひちこじの話やし、似非関西弁みたいなもんや」

「部活に入る予定は?」

「私には帰る家がある……!激しく帰宅部の予定や」

「そ、そりなんだ……」

まあ、こんな感じで。え?受け答えがへんだって?俺が変なのは周知の事実だろ?。

よつやつと解放され、用意されていた席はエヴァンジョンのところだった。

「よろしくなー。あと結婚してください」

「こわなり何を言つてこる、ハ神はやめて

「結婚してください。貴方が激しく好みです。お慕い申しております」

「

「貴様のような奴は一人目だ……それで、一体何のつもりだ？」

「純粹に貴方が好きです。Gガンダム風に言つなら、お前が好きだ！お前が欲しいイイイイイ――！エヴァンジエリーン！」

「うるさいわボケ――遮音結界だと！？」一つの間に……

「え？ 叫ぶ直前に」

「クッ……その無駄な技術を告白のためだけに使うとは……で、本題に入れ」

「大真面目だ！15年前にも言つたけど、君が好きだ！」

「15年……？ 貴様、もしや国後要か！」

「ザツツリイ！」

殴られた。

「貴様っ！ 約束の3年を無視して私の前にこのこと現れるとまい度胸だ！」

「は？ 3年つて何の事？」

「呪いだ――登校地獄の呪い！ 貴様が解くはずだったのだろうが――」

「いや、知らんがな。初耳ですけど」

「なにいい！？ しらばつくれるつもりか！ ナギから貴様が呪いを解きに来ると聞いていたぞ！？」

「いや、だから本当に知りませんって。あいつの事だから伝えたつもりになつてたか、忘れてたんだろ」

あいつならやりかねん。というか、わざとやつてるような気がする。

「く、くく……いい度胸だ……おい！ 私の呪いをとけ！ それから奴を追いかけてしばき倒してやる！」

「いや、無理。俺はこいつらの呪いは専門外。ぶつちやけた話し、口ストロギアの封印術式くらいしか出来ない」

「なんだとー！？ 貴様は魔法使いではないのか！？」

「悪いけど、こっちの魔法はあんま勉強してないんだよね。魔法の射手とか武装解除。それから闇の吹雪くらいなら使えるけど」

一応、燃える天空とか干の雷も使えないことは無いんだが、詠唱がつつかえつつかえになる。燃える天空なんか使った回数十回以下だし。

リリカルな魔法の方が楽なのだ。呪文を覚える必要が無いし、術式の構成はデバイス側がやってくれるのだ。

とは言つても、樂をしている訳ではない。術式の構成はしてくれても、制御は自分でするしかない。制御に失敗したら魔力が逆流してリンクカー「コアを破損する。

同時にラグナロクを数十発撃つたりしている俺が制御に失敗したら、リンクアーコアの損傷程度ではすまない。内側から弾けて死ぬ。

だからといって、こっちの魔法を疎かにしているわけではない。属性に関しては変換資質が無い俺には便利な物だし、攻撃に偏っているリリカルな魔法では出来ない事がある。

人の記憶を覗いたり、絶対尊守の命令、意識シンクロ、傷つける事の無い武装解除、闇の魔法や式紙なんかもリリカルには無い技術だ。

「ヒーチ？」

「ああ、俺以外には使えない魔法の事。西洋魔法やら東洋魔法はあんま詳しくないんだよね」

実際そのとおりである。この世界の魔法は皆全く同じ術式を使う。術式とはこの世界で言つならば魔方陣や呪文の事である。

だが、リリカルな世界では自分が使いやすいように術式は改竄する。あるいは自分で作る。砲撃魔法の適正が低いスバルでもディバインバスターが使えるのは自分用に改竄したからだ。

しかしまあ、デバイスが無ければ自分用に魔法は作れないし、改竄するにしてもこの世界の魔法は完成しているので手の加えようがない。

精々、障壁突破を付与したり、追尾誘導を付与する程度だろう。どちらかというと改竄ではなく応用に近いのだが。

それに個人で使うにはデバイスが無ければ無理だ。一応、この世界の技術でもデバイスは作れるだろうが……魔力の存在すら知らないのだ。ない物を調べる奴は居ないだろう。

仮に作れたとしても、処理装置が必要だ。体の周りに魔力の対流を作るフィールドとバリアの融合魔法である騎士甲冑の制御。飛行魔法や攻撃魔法の制御。

リアルタイムでの莫大な処理。更には他の人間のデバイスとの同期

による通信補助などもある。地球の科学力では一般家屋と同じくらいの大きさの処理装置を用意してやつと、平均的な武装局員のデバイス並みだ。

以前に家のパソコンと夜天の書をつなげたら、数百個のゲームを動かしてもヌルヌル動いて気持ち悪かった。

「だから、俺は呪いを解くのは難しいかな……」

軽く勉強すれば魔力任せで何とかいけそうだけど。まあ、言わなければね。

「そ、そんな……」

へなへな～つとへたり込んでしまうエヴァ。認識阻害と遮音結界を張つてあるので、ぶつちやけるとこの場で殺し合いをして誰も気が付かない。なので今までの言い合ひも気付いてない。

実際の所、認識阻害はあくまでも認識を阻害するものなので、魔法を知っているものには効果が薄い。今張つている認識阻害の結界も、それほど高度ではないので、魔法を知ってるだけで十分気付かれる。また遮音結界も音を遮断しているのは魔力なのだ。高度な物になると、逆位相の音波を照射して打ち消すという完璧な遮音結界もあるが。今の結界は魔力を感知できれば意味は無い。

なので、俺の全身全靈の告白は、タカミチ、美空、アスナ、刹那、真名、超、茶々丸には思いつきり聞こえている。爆笑したいのか、恥ずかしさを堪えているのか。殆どが顔が赤い。タカミチは顔が引き攣っているが。

「ぐううう！」

「ん？」

エヴァと目が合った瞬間。俺は何やら荒野に居た。

幻想世界ファンタズマゴロアか、な

るほど。ここならエヴァも全力を出せる。

俺の実力を見極めようつて訳か。自分の姿を見れば、何時もの騎士甲冑。右手にはショベルトクロイツ、左手には夜天の書がある。夜天の書にアクセスしてみれば、正しく使うことが出来る。精神世界だからな、自分の知っているものであれば再現も可能と言う事か。

「クククク……呪いすらも解けないと、『マスター・オブ・グリモワール』とまで呼ばれた貴様が本物かどうか……確かめてやろう!」

「なるほどね……」

どうやら、俺が本物の国後要か確かめるつもりか。偽名で学校に入学したわけだから、仕方ないといえば仕方ないのだが。

「氷神の戦槌!」

雷の斧と同系統の氷呪文。それは最早、戦槌等と言えるほど生易しい物ではない。軽く二十メートルを越える氷塊が形成される。それもまるで満月のように丸い氷塊だ。生半な制御能力ではない。本来ならばただの氷塊として形成されるのだから。即ち、手加減をしているという事だ。

尖った箇所が無ければ、それは大質量での攻撃にしかならない。言うなれば岩塊を投げられたのと同じなのだ。

そして俺は、その巨大な氷塊を……魔力で体を強化もせずにそのまま受けた。

ショベルトクロイツを持っていた右腕で受け止めた。そのまま腕が

折れ曲がり、骨が飛び出す。

体に激突し、肋骨が全テ碎ける。脊髓が圧シ折れル、骨盤が割れる、内蔵が破裂する。おオよソ人とシテ生きていくのが、ふかノウになつタタタたタタたタタタタタタタタタタ。

脊髓は痛覚神経ヲ断絶セズ、体中力ら激痛がハしる。痛い、痛イ、イタイ、イタイ、イタイ、イタイ、イタイ！イタイタイタイタイタイタイタイタイタイタ！

「んあああああああああつ！あああああつ！いいいいいいいい！ふあああああああああつあああん！」

「ひつ……」

そして俺の声から自然と嬌声が零れ出る。そう……俺は女になるとマゾヒストになつてしまつのだ。

エヴァに殴られたい、蹴られたい、踏まれたい、鞭打たれたい、氷付けにされたい、精神世界の中で目を抉られたい、臓器を抉られたい、性器を切り取られたい。

それは正常な人間の思考ではない。自らの死すらも望むほどの異常性癖。女の俺の心は、弱い。

「はひつ あひひひ 痛いの……」

呂律の回らない声で自分の口から言葉が零れる。目は焦点が定まらず、口からは涎が垂れている。

人を殺したくない、死にたくない、傷つけたくない、傷つけられたくない。俺の女性としての心は非常に弱い。

自分の傷を快感として捉えなければ精神の平衡を保てないほど。

「だから……貴女にもしてあげるううううう！」

折れ曲がった右腕でシユベルトクロイツを握り締め、ソニックムーブを起動する。即死してもおかしくない重症で動いた為に、激痛が全身を駆け抜ける。秘所から蜜が溢れ出る。

一瞬でエヴァの正面にまで移動し、魔法障壁を力だけで強引にぶち割る。折れたシユベルトクロイツを両手で持ち、乱打。それを防ぐエヴァの対物障壁を無理やり破り、そのままエヴァの両腕を粉碎する。

骨が砕け、エヴァの白い肌から、更に白い骨が飛び出す。そして鮮血が飛ぶ。

「あはっ」

顔に飛び散った鮮血。ソニックムーブで後ろへと後退し、唯一無事な左腕で頬についた血を取り、舐める。

「美味しい……」

女性の俺は、マジヒストであると同時に重度のヘマトフィリア（血液嗜好症）であり、重度のネクロフィリア（死体愛好症）であった。

「ハハハハハ！貴様、私よりも余程バケモノではないか！」

「いいじゃない！バケモノで何か悪いの！？貴女は吸血鬼だけど人間よ！私は人間だけど異常者！何が悪いの！？」

「なあに、別に悪いとは言つていなさい

エヴァが右腕を肩と水平に上げる。そして指先から断罪の剣が生成される。

手から一本ではない。指先から五本だ。それはエヴァの尋常ならざる魔法の制御能力がある事を示している。それを見て、俺の田はとろんとした田付きになる。切断される事を望んでいるのだ。

「ただ……貴様が醜いと思つただけだー私と同じよひになあつー。」

「あははははっー。」

物体を強制的に相転移させ、蒸発させる事によつて切断する断罪の剣。それは強いて言つならば、高周波ブレードに近いものである。強いて言つなればなので、実質的には別物だが。

物体を強制的に相転移させるものだから、切れぬものなどあんまり無い所ではない。斬れない物など殆ど無いのだ（物質によつては相転移しないし、防ぐ事も出来る）。

更には蒸発させる事により、気化熱によつて周囲の熱を奪つ。蒸発させたものの量にもよるが、氷点下までに温度が下がるのはほぼ確実。

仮に凍死しなくとも、血液が氷結するかもしれないし、しなくとも確実に体の動きは鈍る。空間的な断絶魔法。例えばディストーションフィールドでなければ防ぐのは難しい。

「いこつ、凄くいいつー貴女をぐちやぐちやにしてあげたいーけどぐちやぐちやにされたいーどうしたらここのつー!?」

ぐちやぐちやにしたいけど、ぐちやぐちやにされたい。醜く醜悪な一律背反が脳内で駆け巡る。

息を吸うたびに碎けた肋骨が痛み、破裂した子宮が疼く。闇いの匂いがポンコツになつた心臓を脈打たせ、エヴァンジョンをぐちやぐちやにする想像の度に秘所が疼く。

醜悪かつ淫靡な自分の姿に怖気が走る。それすらも快感となつて、

脳天に雷が落ちたような感覚。

「やつてから考えればいいよね！あなたが弱くて、私が勝てば私が貴女をぐちやぐちにする！貴女が強ければ貴女が私をぐちやぐちやにする！凄い！」

「クッ……本当に貴様はバケモノだな」

「あら、褒め言葉ね。バケモノっていうのはね、人を襲うために生きるバケモノ事。それを言つなら、私は確かにバケモノね」

自分には全くあわない女言葉。けれどもそれは、陶然とした感覺を自分に伝える。

人は素顔の時は最も真実から遠ざかるが、仮面をくえれば雄弁に眞実を語り出す。そのとおりだ、だから俺は、私は、仮面を被る。

「覗られたい、痛めつけられたい、だから人を殺す。血を見たい、血を舐めたい、だから人を傷つける。死体を見たい、死体を愛したい、だから人を殺す。

そんな私がバケモノじやなかつたらなんなの？それはもう人の形をしたナニカよ」

「そうだな、そのとおりだ」

諦觀にも似た表情で、エヴァンジエリンが呟く。数百年前からバケモノと呼ばれ続けていたのだ。その悲しみと絶望は推し量ることすらおこがましい。

俺も、圧倒的な強さと内包する莫大な魔力量の所為で、バケモノと言わされたこともある。たとえ英雄と呼ばれていようとも、結局はそう呼ばれるのだ。

これから数十年、数百年後、俺もいつかはバケモノと呼ばれるのだろう。それを想像しただけで怖気が走る。

「バケモノはバケモノらしく、殺りあおりじやないか！」

「ええ、そうねえええ！」

修理が完了した全身で、リペア―を掛けたシユベルトクロイツでエヴァへと殴りかかる。それを断罪の剣で切断され、頬に三筋の傷跡が走る。

頬に氷を押し付けられたような感覚に、子宮が疼く。夜天の書を背後に浮遊させ、レヴァンティンとグラーフアイゼンを取り出す。

「カートリッジロード！」

『Jawho!..』

『Expression!..』

ガシュンッ！と音を立て、同時にカートリッジがロードされる。儀式魔法でカートリッジに封入された魔力が迸り、両方に魔力が籠る。

「ラケーテンハンマー！」

噴射孔から圧搾魔力が噴射され、爆発的な加速を生み出す。数回転した後、目にも留まらぬ速さで飛翔する。

数百発の魔法の射手が、雨霰と降つてくるが、それらを騎士甲冑の防御力を頼みに強引に突破。エヴァンジェリンの魔法障壁をぶち破り、そのまま両腕を叩き折る。

「飛竜一閃！」

後退したエヴァンジエリンが放つ魔法の射手をシュランゲフォームとなり、炎を纏つたレヴァンティンで氷の射手を叩き落とす。空中に大量の水蒸氣が上がり、それを魔力放出で吹き飛ばす。無詠唱で放たれた氷神の戦槌をギガントフォームに変化させたグラーフアイゼンで強引に弾き飛ばす。

レヴァンティンを格納領域に戻し、シュベルトクロイツを手にする。そして十一発のラグナロクと大量のデアボリックエミッショńを同時に発動。

まるで中隊規模の戦闘機で爆撃でも行ったかのような爆音と破壊痕が大地に刻まれる。それでもエヴァンジエリンは生きている。空中に八発の銀弾を生成。それらをグラーフアイゼンで叩き、高速で発射。それらを誘導制御し、エヴァンジエリンを追い掛け回す。八発の魔法の射手が無詠唱で形成され、シュワルベフリーゲンを正確に打ち落とす。恐るべき制御能力だ。

「まだまだいくよっ！」

グラーフアイゼンを振り上げ、大量の魔力を流し込む。それこそ、崩壊寸前にまで。

破損を防ぐ為に儲けられているリミッターを解除し、限界ギリギリにまで注ぎ込まれた魔力に反応し、グラーフアイゼンが更なる変貌を遂げる。

Sts25話よりも更に馬鹿げた巨大さを持つ、ツェアシュテールングスフォルムへと変貌する。ギガントフォルムにラケー・テンハンマーの噴射孔をつけたと考えればいい。

「ヒヤハハハハハツハツハツハ…！」

適当に改造を施したから、本家と比べれば専門家が調整した訳ではない為、十五倍は魔力消費が激しいと思われる。

それだけの膨大な魔力を消費する鉄槌を振り上げ、一気に振り落とす。魔力の噴射によつて加速したハンマーが地表と激突し、地表が捲れ上がる。

「死ね死ね死ね死ネ死ねシネシネしね死ね死ネしね死ねシネシネシネシネエエエエエツ！」

莫大な氣で強化された、尋常ならざる腕力で振り動かす速度だけで鉄槌が軋むほどの速度で鉄槌を叩き落す。

ハンマーを振り落としている箇所に居るエヴァンジェリンが、まるでミンチのようにぐちゃぐちゃになつていく。

原子の一欠けらも残さぬとも言つような氣迫で振られる鉄槌、背後からの魔力反応に、咄嗟に鉄槌から手を離して短距離転移を行つ。

「ぐ、ぐぐぐ……！まさかあそこまで馬鹿げた事が出来るとは思わなかつたぞ！国後要！」

蝙蝠と化し、いつの間にか背後へと回つていた。深く抉られた背中の傷が冷たい感覚を訴えてくる。そして下半身の感触が無い。

恐らくは脊髄を傷つけられたのだろう。足が動く様子も無い事から、傷つけらタではなく完璧に脊髄を破壊されたようだ。

「いい！凄くいい！もつとぐちゃぐちゃにしてあげる！その綺麗な顔にナイフを突き立ててあげる！その綺麗な肌を血で染めてあげる！

貴女の内蔵を引きずり出して壁に飾つてあげたい！貴女の髑髏を杯にして、貴女の血を飲む。貴女のおなかの中に電球を入れてランプショーデにする。

それとも皮だけにした貴女の頭をランプショーデにしたほうがい

い！？貴女の心臓を体に繋げたまま壁に飾るの。脈打つたびに田を
愉しませてくれるわ」

アクセルシユーターを数百発形成し、一気に打ち出す。誘導制御な
んてのをするほど馬鹿げた思考能力は無いので、全て直進だ。
それをエヴァンジエリンは氷神の戦槌を打ち出して防ぐ。そして空
に煌きが走り咄嗟に頭を下げる。髪の毛が散らばり、左腕が落とさ
れる。糸か。

「ああああああっ！すごい！痛いの！そだ…いい事考えた！貴女
の手を切り取つてオブジュにして壁に飾るのよ。鹿の角みたいでお
洒落でしょ？毎日毎日舐めて綺麗にしてあげる。

貴女の指、白魚のように綺麗だから、とっても美味しそうよ。そ
れからね、貴女の足は私の座る椅子の肘掛にするの。綺麗だから凄
く使い心地がよさそうね……。

それからね、それからね、貴女の肝臓は私が食べてあげる。肝臓
には解毒作用があるのよ。でも、貴女の肝臓は小さいから、あんま
り効かないかしら？」

「生憎と、私の肝臓は貴様に食わせるほど安くはないのでな…」

三個の氷神の戦槌。ミストルティンで石にして落とす。こちらへと
放たれた一発の闇の吹雪をパンツァーシルトで防ぐことなどせずに、
そのまま受けた。

腹に大穴が開き、右足が吹き飛び、左足が皮一枚で繋がっているだ
けの状況へと変わる。既に死に体だ。それも治療魔法で全て回復す
る。

消え去った右足も、なくなつた左腕も、皮一枚で繋がつてゐる左足
も。全て元通りに直る。相変わらず馬鹿げた魔法だ。復元魔法の方
が正しいんじゃないのか。

「それからね！貴女の田玉も綺麗だから、大切に保管してあげるの。それとも私の顔に新しい孔を開けて、そこに埋めた方がいいかな？でも、食べるのも捨てがたいかもね？あなたの目、とっても綺麗だから、きっと凄く美味しいわ。

それに、貴女の髪もとっても綺麗だからね、それでマフラーを編むの。きらきらと金色に輝いて、とっても綺麗なはずよ。

髪の毛だから、あんまり暖かくないかも知れないけど、夏でもつけられるからとつてもいいわ！」

「貴様のような変態にくれてやるほど私は安くないと黙っているだらう！」

「い・や・よ。絶対に手に入れるんだから！貴女をぐつちやぐちやのミンチにして、回復魔法で直してあげるのよ。それで何度も何度も殺すの。

嫌つて言つても止めてあげないわ。毎朝貴女の悲鳴を田覓まし時計にしておきるのも素晴らしいと思わない？

貴女の膀胱は私の水筒にしてあげようかしら？中に入れた水はひとつも美味しいはずよ。だって貴女が600年も使っていたんだから

ら

「やはり貴様は変態だな！怖気が走るよ！貴様のような異常者は600年生きてきて久方ぶりに見た！」

「そんなんに褒められたらまたイッちやうわーひーああああああああああつあー！」

びくじと体が痙攣し、スカートの中からでちらりと光る蜜が溢れ出る。

「あつ、ああつ、駄目つ、そんなに氷みたいに冷たい目で見られた
ら、もつと燃え上がっちゃう！」

俺が悠長に喋っている間にエヴァンジエリンが完成させた魔法。え
いえんのひょうがに閉じ込められる。

それへとリンクカー・コアに残っている魔力を全て放出し、宝石のよう
に煌く氷を全て碎く。

「はあああ……凄かった……もつと、やりましょ？」

魔力がなくなつても、まだ氣がある。

「お断りだ！」

「つれないのね」

「生憎と貴様のような変態を相手にするのは疲れるのでな。中々楽
しかつたぞ」

そう言つと、何時の間にか現実世界へと戻っていた。ファンタズマ
ゴリアで過ごした時間は15分前後。現実では20秒程度かな。
辺りを見回すと、タカミチが引き攣つた顔でこっちを見ていた。ア
スナもだ。あと美空も。というか全員だ。夢見の魔法はかなりの初
級呪文なのだ。

まず、火よ灯れから始まり、次に風を起こす魔法や、物体操作の魔
法、次に簡易精霊の作成。ここらへんが初級も初級だ。そして占い
に入り、読心術や占星術に入る。

夢見の魔法は他人の夢見で占いをするものなので、占いの部類に入
る。魔法学校を出ていれば誰でも覚えてる魔法だ。
刹那や真名は見て無いかとも思ったが、日本では夢というのも占い

に入る。というか、寝ている人間の精神は無防備だし、幻術に掛けられている人間は更に無防備だ。

ちょっとした魔力と、他人の意思に反応する魔法さえ知つていれば、誰でも覗けるだろう。真名は魔眼もちだ。

超は魔法をおおっぴらに使えないんだろうから見ていないようだが……真名に頼めば見せてもらえるくらい容易いだろうな……。

「わあわわわわ！死にてえええええ！むしろ殺してくれえええええ！」

びっしょりになつている下着が気持ち悪い。というか、足元に水溜りが出来てる。悲しくなりながら、威力を落としまくった熱波武装解除で水を全て蒸発させる。

夜天の書のデータを除いてみると、体を痙攣させながらあふん言つてる自分が写つていて。虚しすぎる。というか気持ち悪い

「うわ、うわ……お、俺の暗部が見られた……家族ですか知らないのにいいいい！」

「お、おい……なんなのだ貴様？変態ではなかつたのか？」

「つむぢやこつむぢやいつむぢやい！俺は戦闘にならなければあんな変態にはならんのだ！そもそもアレは女の時だけだ！」

俺は男の時は重度のロリコンとペドファイリアと軽度のマゾヒストなだけだ！女になつたらそれが全部重度になつてヘマトファイリアとネクロファイリアが加わるんだ！」

「十分貴様は変態だああああー私が認めてやるー。」

「なにおうー？俺はお前みたいな小さい子に蹴つ飛ばされたり殴ら

れたりなじられたりするのが大好きなだけだ！」

「それを変態といわざしてなんというつーの。」

「立てば紳士！座ればジエントルメン！歩く姿は超紳士の俺を捕まえて変態だと！？興奮した！ババア！結婚してくれ！」

「断る！」

『そんなものは自分で何とかしてください。かなめくん。あと、誰がタカえもんですか』

デバイス間通信で即座に返される（俺は夜天の書だけではなく通信専用のデバイスを持つている）。まあ、遮音結界とかで周囲にはばれてないからな。

「フツ、まあいい。オリ主は慌てない。このオリシューことオリーシュ・ヴィ・ペドフィリアの力を持つてすれば、幼女を惚れさせるなど容易い事よ」

「トンでもない家名だな」

「語呂がよかつたから適当につけただけ。本名は国後要。よろしく。

おとく?

「ああ、分かつた。分かつたから結界をとけ。いい加減貴様の相手をするのも疲れた」

言われたとおりに結界を解除する。ちなみにだが、今まで使ったのはネギま的魔法だ。リリカル的な魔法はどれもこれも高度すぎて困る。

一番最初に出てきた封時結界だつて時間軸から世界を切り離して、僅かに位相がずれた時間経過の少ない世界を作るといつトンでも結界だ。

封鎖領域だつてこつちの魔法だつたら数人掛りで張るもんだし、温度変化から身を守る結界魔法なんてコッチの世界には存在すらしない。

「それじゃ」

おもむろに認識阻害魔法を軽く掛け、教室から出る為に扉を開く。

『待て待て待てえい！何処に行くんですか！？』

『ダリイ、メンディ、かつたるいの三つが揃つたとき、究極のカーボ！サボタージュが発動する！』

『つまりサボるんですね。程ほどにしどいでください』

『気が向いたら授業には出てやる』

そのまま教室を出て屋上へ一直線。学園の中で俺が誰か知ってるのは学園長とタカミチとアスナとエヴァだけだ。国後要といつ名前所では意図的に結界を強くしてボカした。

ファンタズマゴリアの中は流石に干渉出来なかつたが、入つてすぐに俺の事を始めたから、問題ないだろ。もしあの場面を見たいのならば、ファンタズマゴリア展開から0・4秒以内に侵入しないと無理だ。

ちなみにだが、夜の警備には俺だけが参加する事になつてる。学生組みとしてな。まあ、魔法生徒うぜーから、俺は雇われの傭兵みたいなもんだ。

「へえ、案外広いな。日差しもいい。屋上だから当たり前だけど。まあ、流石に少し寒いかな」

周囲に遮音結界、認識阻害、対流結界を展開。空中にフローラーフィールドを複数作成。空中に浮かぶ安楽椅子のような形になつたフローターフィールドに腰掛る。

微調整して寝心地がよいようにして、魔力で形成した擬似物質でフローターフィールドを覆つ（騎士甲冑の応用）。さて、寝るか。

教室に配置したサーチャーから、何で俺がいなくなつてるのか少々騒ぎになつたが、アスナが説明してくれたのが分かつた。

三時間目が終わる頃、俺が来ないか、あるいは自分が行つた先に俺が居ないかビクビクしていたエヴァアだが、痺れを切らしたか、教室から出て行くのが見えた。

ちなみにだが、しつかり寝てはいるがマルチタスクで脳の僅かな部分だけは動かしている。とはいっても、脳を休めることが出来ないので使いすぎは禁物だ。

あくまでも肉体を休める事だけしか出来ないので、何日もこれを続けていると脳のニコーロンが壊れてしまう。そういえば、俺は不老だが、ボケは平気なんだろうか。

たしか、マルチタスクで恒常に脳を酷使しているから、脳のニコ

ーロンの繋がりが常人と比べて異常に多いから、ボケは殆ど無いら
しいが……。

屋上の扉が開く音で目が覚め、ヒヴァアが茶々丸を伴つてサボリに來
たのに気付く。

俺の事を見て一瞬だけ顔を引き攣らせるが、未だに寝た振りをこい
てこるので気付かれない。

「おはよヒーリヤーござました」

「おやなくていい」

「いいえ、お起きます。おはよヒーリヤーござす、ヒヴァアンジヨーリンを」と

「なに……？ 貴様本物か？」

「ええ、わたしはほんものですよ。ぐたいてきにこうとつせこをせ
いいつぱこおされているのでこんなにかんじなんです」

フローターフィールドの安楽椅子から降りて、ヒヴァアと向かい合つ。

「なるほど……」

「まつたく、それもこれも、あなたがかわいすぎるからいけないの
ですよ。そのながれるきんしゃ（金砂）のよつなかみ、くわいんじ
ゅのよつじきらめくひとみ。

まるで二さんあむつのよつじひととのつたかおだり、こしのつよさを
かんじねむるすむじこねつ（双眸）。なにもかもがわたしをく
るわせます」

「淡々と褒め言葉を並べられても嬉しくないぞ……」

「全く！それこれもお前が可愛すぎるからいけない！その流れる金沙のような髪！黒真珠のように煌く瞳！」

まるで人形のようにならった顔立ち！意志の強さを感じさせる鋭い双眸！何もかもが俺を狂わせる！君のためなら世界とも戦える！

「い、いきなり大声を出すな！前々から貴様は一体なんなのだ！私を愚弄しているのか！？私の事を嘲っているつもりか！」

「はあ？イミワカリマセーン。俺は真剣にお前の事が好きだ。そりやあもうぶつちやけた話、毎日毎日夢に見るくらいに好きだね。15年前にお前と出会って、それから毎日だ。お前の事を考えなかつた日はない。お前の事を想う度に胸が張り裂けそうだった。あの時お前に言われた一言一言を今でも鮮明に思い出せる」

「ならば何故だ！何故貴様は今まで会いに来なかつた！」

「言つたろ？俺はお前に相応しい男になるつて。それに、これだ」

夜天の書の格納領域から書類を取り出す。メガロメセンブリアの元老院に発行させたエヴァの賞金首取り消しの書状だ。

十五年前からコツコツと元老院の弱みを握り、権力にしがみ付こうとするクズ共を齧してまで手に入れた書状。手に入れたのは二年くらい前なんだがな。

「これを俺の署名入りで提出すれば、お前の賞金首は完全に失効となる。もう、追われる事もなくなる。今の麻帆良にいる限り失効じゃない。完全に失効だ」

「何故だ……？」

「何故つてそりやあ、お前の意思を無視して賞金首を取り消していいか分かんなかつたし……」

「そりではない！何故私の為にそこまでするー？その書状を発行させのも一筋縄では行かなかつたはずだ！下手をすれば英雄といえども命の危険だつてあつたはずだ！」

何故私の為にそこまでする！私には貴様の事が理解できない！」

「さつきから何遍も言つてんだろーが！俺はお前の事が好きなんだつて！好きな奴の為に命掛けんのは当たりまえだろーが！」

さつきも言つたろうが！俺はお前のためなら世界とだつて戦つてやるつてなーそれくらい好きなんだよー！」

「そんなものが信じられるか！」

「そりかよ……だつたら、こいつでござつだ」

格納領域からギアススクロールを取り出す。それも最上級の。このスクロールに記された内容は魂にまで刻み込まれ、約定を違える事は出来なくなる。

約定を破らざるを得なくなつたとき。その時は死を持つて対価を払う事となる。スクロールに記された内容はたつた一つ。

國後要是エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを裏切らない。

それは全てでの裏切り。誓つた愛も、誓つた約束も、全てを裏切る事は許されない。

また、これは保険もある。もしも、もしもだ。もしもエヴァンジエリンが死んだならば、その時俺は約束を違える事となり、死を迎える。

「既に俺の署名はしてある。これにお前が署名すれば、俺はお前を裏切らない。たとえ暴力で縛られようが、俺はお前を絶対に裏切らない。」

まあ、こんな書類なんか無くたって、俺はお前を裏切らないがな……まあ、俺の事を信用出来ないのは仕方ないさ。英雄なんて呼ばれてるんだからな。

正直な話、英雄なんて称号はいらねえ。俺は、お前だけの、たった一人だけの英雄になりたい。お前がピンチになつたら颯爽と現れて、どんな状況だつて挽回してやる。

お前が助けてと叫ぶなら、俺は幾らだつてお前の為に戦う。体が滅びようが、心が砕けようが、幾らだつて戦つてやる。俺はそんな、お前だけのヒーローになりたいんだ」

「……フツ、お前は本物の馬鹿のようだな」

「ありやりや、まあ、馬鹿つていうのは承知さ。何しろ15年間も片思いを続けて来たんだからな。

まあ、お前が、俺の事を嫌いで、会いたくもない、あるいは恋人になんかなりたくない。そう思つんだつたら、このスクロールには署名しなくてもいい。

「この賞金首の失効の書類だけは出させてもうづがな」

「だから馬鹿だと言つていい」

「はあ？だから何が馬鹿なんだつて？正直な話、頭はそんなくねーんだ。論理系の魔法使いつつても、武闘派だからな」

「さつき、言つただろう。お前が十五年間片思いだとな。それは間違いだ」

一陣の風が駆け抜けた。エヴァンジエリンのロングヘアが風に靡いた。今の言葉は、風が招いた幻覚だったのか。

「私もだ。15年前。お前と出会い、私が吸血鬼だと言つても、態度を全く変えない所か、告白してきたのは貴様が始めてだ。そして、杖を預けられた。

それから毎日だ。お前の事を考えた。毎日夢に見た。あの時のお前が笑顔が、言葉が、全てが忘れられない。

お前の仲間である、ナギ・スプリングフィールドを見つけ、お前の行方を聞いた事もあった。それが原因でここに縛られてしまったが……。

15年間、私もお前を想い続けた。私の事を忘れているんじやないのか、あの時の言葉は嘘だったのか、あれは幻だったのか。そう想う度に胸が張り裂けそうだった

「え、あ? その……?」

「何度も言わせるなよ。私はお前が好きだ。15年前のあの日、お前と出会い、その時から私は恋に落ちていた。恐らくは今まで生きていて、初めてのだ」

そう言つと、エヴァは俺の手からギアススクロールを奪い取り、自分の指先を噛み千切る。ギアススクロールは魔力が込められた自分の血で書いて効果を發揮するのだ。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルは國後要を裏切らない。

死が二人を別つその時まで、二人は互いを裏切らず、二人は約定を違えない。

国後要是その命あるまで、エヴァンジョン・A・K・マクダウエルを守り続ける。

エヴァンジョン・A・K・マクダウエルは、その命在るまで国後要を支え続ける。

新たに書き加えられた四条の約定。あわせて五条の約定。

「さあ、署名したぞ。刻め」

「いいんだな？もう二度と解除する事は出来ないぞ？マスター・オブ・グリモワールとまで呼ばれちやいるが、そういうた解呪はできないんだ」

「フツ、愚問だな。私はお前に惚れている。そりゃあもう、医者でも草津の湯でも治せないくらいにだ」

ギアススクロールを放り、解放のキーワードを唱える。スクロールは解け、俺とエヴァの体の中へ、魂の中へと刻み込まれていく。防衛反応か、夜天の書が起動しかけたが、押さえ込む。騎士甲冑が展開されてしまったが、ギリギリで防衛プログラムを停止させられた。

「これで、お前は私を裏切れなくなつた」

「ああ、俺はお前を裏切れなくなつた」

一拍起も、再び口を開く。

「そして、お前は俺を裏切れなくなつた」

「ああ、私はお前を裏切れなくなつた」

どちらともなく歩き出し、肉体の年齢を一〇歳にまで戻し、エヴァと同じ皿線となる。

そして、どちらともなく差し出された唇が重なつ合つた。

第七話 転校生と変態と初恋と（後書き）

やべえ、何この主人公。自分の脳味噌が如何に腐っているか理解出来ました。

なんでエヴァがこんな変態に惚れてるんだとかいう突っ込みはしないでやつてあげてください。きっと変態好きなんです。

あと、主人公は原作の頃からエヴァが好きでしたが、現実で会って一目ぼれしちゃってます。

また、エヴァも一目ぼれみたいなもんです。自分の事をそのままに見てくれると思ったんでしょう。

激しくくせこ告白でした。黒歴史を思い出したよひし、壁に頭を打ちつけたりました。

第八話 バカッフルと告白と眞実と（前書き）

アスナはクールです。原作みたいに馬鹿ではありません。まあ、武闘派ですけど。

第八話 バカップルと告白と真実と

俺とエヴァは、ずっと抱きあっていた。互いの体の熱を分け合つかのように。まるで一つの彫像のよう。元

「ん、ちゅ……エヴァの唇、暖かい」

「は、ふ……あふ……カナメもだ」

互いの舌を擦り合わせ、唾液を交換して嚥下する。それはまるで媚薬のように俺を狂わせる。

「エヴァの舌、甘いよ。んくつ……」

「はふ……馬鹿……」

エヴァの形のいい頭を右手で抱きすくめ、左手を体に回す。エヴァの暖かな体の感触が肌を通して伝わってくる。

このままずっと、エヴァの感触に溺れていたい。しかし、何時までもここに居ては人に見られてしまう。名残惜しいが唇を離す。

エヴァの唇からとろりと垂れた唾液がぬめって見え、どうしようもなくその姿が淫靡に見えた。

「はあ……」

エヴァが甘い吐息を漏らし、フローター・フィールドで作ってあった椅子に座り込む。もう一つ新しくフローター・フィールドを作つておくか。

「……」

「……」

も、気まずい……互いに求め合つてキスしたけど、今考えたらファーストキスじゃないか。80まで生きてきてファーストキス……なんだか嬉しいけど悲しいぞ。

しかし、俺のファーストキスの相手がエヴァだなんて……幸せで死にそう。

「ふ、ふふ……嬉しいな」

「？」

「この日が来るなんて思つてなかつた。正直な話、あれから一度も会つてなかつた訳だし……拒絶されるのが閑の山かなつて」

「わ、私もだ。あの日から一度もお前は私に会いに来なかつた。私は相応しい男になるとか言い出してな……本当は私と会いたくなつたのかと思つたぞ」

「んな訳ないつて。あれからもー、俺はお前にベタ惚れですよ?命を投げ打つくらいにベタ惚れです。ほら」

フローティングの椅子から降りて、エヴァの頭を胸に抱く。

「ほり?聞こえるつしょ?俺の心臓、こんなにドキドキしてん?

「ああ……聞こえるぞ。こんなにもドキドキしてる。今にも飛び出しそうなくらいに震えてる……口吹色の波紋疾走は使えないのか?」

「使えないよ。使っても、絶対に使う事は無いぞ。エヴァと一緒に居たいからね」

エヴァを抱き上げ、俺の膝の上に座らせる。

「こんなにもドキドキして、十五年間も想い続けるくらいに俺の想いは強い」

「私もだ。ほら……」

そう言ひと、エヴァが膝立ちになつて俺の頭を抱く。エヴァの甘い匂いが鼻腔をくすぐる。僅かに自己主張している膨らみに耳を押し当てるごとに、心臓が早鐘を打つ音が聞こえる。

「私も、こんなにドキドキしている。十五年間想い続けてきたんだ。私の想いは支えきれないほどに重いかも知れないぞ?」

「んなもん、支えきつて見せるつて……何しろ、俺はお前にベタ惚れだからな。むしろ重い愛は『」褒美です」

「フツ……私はお前のそいつたところに惹かれたのかも知れないな……なんでも受け止めてくれるような寛容さ。

私の事すらも平然と受け止めて見せた……私は、お前に期待してもいいのだ」「……」

「ああ、任せろ。なんだつて受け止めきつて見せらあ。でも、同性愛だけはカンベンな!」

「私にもそんな趣味は無い。フフツ……」

エヴァが俺の胸にもたれかかってくる。俺の胸、今は女なのでちゃんと自己主張している箇所に、エヴァの小さな自己主張している部分が当たる。

そして、俺の首筋に鋭い痛みが走る。恐らく、首筋の肉を噛み千切られた。頸動脈が損傷し、そこから勢いよく血が噴き出しが、我慢するのとポーカーフェイスは得意技なので一瞬だけ身を強張らせたが、その後はそのままに受け入れる。

今日は満月ではない。あと9日で満月だ。なので、エヴァは吸血鬼としての力は無い。だから、俺の首筋を噛み千切つたのだろう。エヴァの唇が首筋に当たる感覚が分かる。流れ出す生命の水をエヴァは貪るように飲み込んでいく。エヴァの可愛らしい舌が、首の傷口に差し込まれていく。

じゅるじゅると音を立てて啜られる血液。俺は性的快楽にも似た感覚を全身に感じながら、エヴァの頭を優しく撫でていた。

「ん……抵抗もしないとはな……」

「何でも受け止めきつて見せるって言つたろ？それにまあ、悪い気分じゃないし」

噛み千切られた箇所を指で軽く擦り、魔法で完治させる。俺にはハイフリック限界が無いので通常の治癒魔法でどんなに深い傷でも治せる。

流石に腕が吹っ飛んだり、血液が一気に失われた場合は魂の情報を元に魔力で作られた擬似物質を生体に変える方法で治すが。しかし、ギリギリまで飲みやがったな。多分、今起き上がつたら貧血で引っくり返る。そもそも魔力で身体機能を強化してなかつたら、失血死寸前だ。

「んで、俺の血のお味はビーですか？」

「まず、お前が処女であり童貞だといつ事は分かつた」

「ヘアツ！？」

「精液や経血というのは魔術的な意味を強く持つからな……誰かとまぐわった事があれば、血液に複数種類の魔力を感じる。

お前からは正真正銘お前の魔力の味しかしてない。まあ、強いて言うならば男と女で魔力に違いが出るから、似たような味が同時にするのは不思議だつたが……悪くない」

「くー……血の味ねえ……頭がおかしくなりそつだから気にしないでね」

血の匂いを嗅ぐと、体が騒いで仕方ない。自分で言うのもなんだが大概トンデモナイ女だよな。

「じゃあ、俺はヒュアの扇を貰うとしてきたんだが……」

そう言つと、少し強引にエヴァの脣に口付けた。鉄の味がしたが、それすらも舐め取るように口内を搔き回してやる。

かのように強く口内を蹂躪していく。

互いに唾液を奪い合ひ、かのよひに舌を搔き回し、あわてて舌を引く。」

「ん、はあ……」

「と、唐突だな、お前は…………んつ…………」

互いが口を離し、一度息継ぎをすると、再びキスを始める。奪い合うかのよつこ、求め合ひ。

唾液を嚥下しあつ。エヴァの白い首が艶めかしく動き、それだけで俺の心臓は更に鼓動を早める。

「んあつ、あん……」

「む……はふつ……」

互いの吐息すらも逃さぬかのように、俺とエヴァは口付けを交わし続ける。遠見の魔法を感知したのでジジイの部屋に次元跳躍攻撃を放つ。消えたな。

「はあー……」

「はつ……はつ……はあ……」

俺とエヴァの間に唾液の橋が掛かる。それが蟲惑的だった。

「血の味がした」

「馬鹿者……当たり前だ」

少しすねたようにエヴァが俺の胸に顔を埋める。小さなエヴァの体を守るように抱き締め、空を見上げる。

太陽は鬱陶しいほどに燐々と照り付けて来る。今は四月の初めなので日差しはそれほど強くないが。

「いい天気だな……」

「フン……私にとつては嫌な天氣だ」

「そうだな……なら俺にも嫌な天氣だ。何しろエヴァが不機嫌になつちまうからな」

「私は別に……お前が居れば……」

「ああもう一エヴァつたら可愛いんだからあー」

「わっ、たっ、たっ！」

エヴァを抱き締めると頬擦りをする。本当にエヴァは可愛いんだから。

その後、何をするでもなく、エヴァと一緒に昼寝をした。授業なんてサボリです。15年中学生してる人と60年以上前に中学校を卒業した人には授業なんぞ無駄なんです。

Side アスナ

今日、転校生が来た。多分、……というか、間違いないカナメだろう。なんで女装してるんだろうか……そもそも何故窓から入ってくるんだろう？

まず間違いなく学園長の悪戯だと思つてもいいんだけど、自分からやつたと考えてもいいかもしれない。

名前はハ神はやてだつた。国後要と何の関係性も見えないんだけど、どんな風に考えた名前なんだろう……それとも別人？

そう思つていたけど、無造作に遮音結界と認識阻害の結界を張つたから、少なくとも関係者なんだろう。物凄い告白を始めたのには驚

いたけど。

その後、このクラスに居る大物の魔法関係者、エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルと幻想空間で戦いを始めた。

そこで見た光景はちょっとと思い出したくない……というか、カナメにはあんな趣味があつたんだろうか？まあ、カナメだという確信は取れた。あんな魔法が使えるのはカナメだけだし。

カナメは一時間目が終わる前にどこかに行ってしまい、エヴァンジエリンも三時間目の途中で居なくなつた。殺し合ひしてないでじょうね……？

少し不安になりながら、エヴァンジエリンが大抵サボるときに向かう屋上へと、購買で買つたパンを持って向かった。

そこで、カナメが相変わらず意味不明な魔法で空中に椅子を作り出し、エヴァンジエリンと仲良さそうに寝ていた。予想外過ぎたわ。

「ねえ、これはどういう状況なワケ？」

「はい。マスターは国後要様と恋人同士の関係となりました」

恋人！？「これも予想外過ぎたわ……」カナメは大抵の場合、予測の斜め四十五度上を螺旋飛行した上にバレルロールしてからね……。ちなみにアルの場合はそこに木の葉落としが加わる。

「また、その際に最上級のギアススクロールによって契約を交わしました」

最上級のギアススクロールって言つたら、魂に刻み込んで強制的に約定を履行するタイプじゃない。下位版のギアススクロールは精神に刻まれて僅かな抑止力しかないのだ。

例えば、魔力を使わないという約定を交わしたとすると、魔力が使いつづらくなる程度にしかならない。だが、最上級のギアススクロー

ルは永久に魔力が封印されてしまう。

もしも約定の不履行が起こった場合。その時は死を持つて償わなければならぬレベルのギアススクロール……本来なら国同士の約定に使われるものよ？

といふか……アレって確か一枚二千万ドラクマくらいしなかつたつけ？（一般的庶民の日給が一ドラクマ）まあ、紅き翼の面々はCMだのにも出てたし、CM一本で五百万ドラクマとか貰つてたしね。（資金体系は中世の頃と酷似している。一般庶民が一ヶ月二十ドラクマあれば生活出来るが、貧乏貴族でも年収は数万ドラクマを越えるのが当たり前）

「その後にマスターの賞金首が完璧に失効されました」

「嘘おつ！？」

こればっかりは流石に驚いた。何しろエヴァンジェリンは600万ドルの賞金首だ。罪状を数えるとしたら、死刑を千回執行してもお釣りが来るくらい。

もしもエヴァンジェリンが自らの意思で慈善事業でもし始めたら話は別だけど、他の人間が勝手に動いて賞金首を失効にするなんて。というか、カナメがあの本（夜天の書のこと）で何かしてたけど、あれつてもしかしたらその為の情報収集だったのかしら……？

前にまほネットを完璧に掌握して見せた事もあつたし……それくらい出来てもおかしくないわね。十年もあれば元老議員相手に無茶苦茶な要求を飲ませるくらい出来るはずだし。

「カナメって本当にビックリ箱みたいな奴なのよね……」

「ビックリ箱……ですか？」

「そうよ。大抵の場合、何か困ったことがあって聞きに行くと、大抵解決してくれるのよ……」

例えばタカミチの呪文詠唱が出来ないのも、道具に頼る事になつてはいるが解決している。前に死んだ小鳥を生き返らせたのも見たことがある。あれは魂が残つてたからできたらしいけど。他にも時間遡行をして見せたりね……未だになにがどうなつたらあんなことが出来るのか不思議でならないわよ。

そもそも二十年前の戦争は私は道具として使われてたからあまり覚えてないけど、初めてナギと出会つたときはラカンとカナメは居なかつたけど、たつた一人で戦況をひっくり返して見せた。

戦いは数というよう、本来なら如何に強力な個人であろうとも数の軍勢相手には無力だ。魔法使いにそれは余り通用はしないが、相手が魔法使いならば同じなはずなのだ。

だといふのに本当にたつた一人で戦況をひっくり返した。一般兵が数十人がかりで倒す鬼神兵を千の雷を乱発して薙ぎ倒し、軍艦を叩き落す。一騎当千の働きを見せた。

それは莫大な魔力も原因だけど、ナギには類稀なる戦いのセンスがあつた。千の雷を感覚で使いこなし、我流の格闘技で兵士を薙ぎ払う。

そしてカナメは尋常ではない制御能力で千の雷レベルの広範囲殲滅魔法を同時に連発しまくるという馬鹿げたレベルの攻撃をしたりしていたらしい。

「本当に、ビックリ箱みたいな奴よ。今度は女装して転校してきたと思つたら本物の女になつて、果てにはエヴァンジェリンと恋人になつてるなんてね……」

本当に恐ろしい奴よね。そういうえばカナメのアーティファクトってどうなるんだろ。誰とも契約していないし、見てみたいわね。

ラカンがナギとの契約で伝説の武具を取り出せるアーティファクトなんだから、ナギ並みの素質があるエヴァンジェリンとの契約だから、凄いものが出そうね。

んで、アーティファクトの種類は従者によって決まる。ラカンがナギとの契約で千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタ・キーリオーン・プロソーポーン）が出た。

それで、ラカンがそこらへんの魔法使いと契約したとしよう。普通の魔法使いだ。実力は並み。そうだとすると、千の顔を持つ英雄と同じ効果のアーティファクトが出る。

ただし、千の顔を持つ英雄とは明確な違いが出るだろう。例えば普通の武器になつたり、一本しか出せなかつたり。種類は従者によって決まり、位は主人によつて決まるのだ。

だから、ナギが主人になれば大分効果の強いアーティファクトとなる。ナギと同等の力があるエヴァンジェリンなら、大分チートな物が出るだろう。

しかし……もしもカナメが主人になつたらどうなるんだろうか。カナメの魔法使いとしての実力は凄まじく高い。広域殲滅魔法を同時に複数発動して完璧に制御したり。魔力量だけで言えばナギの30倍近い。

関係は無いが気の量もラカンの一十倍以上だ。未だに気の量は増えているらしいから、どうなつてるか恐ろしい。あんな小さい体の何処にアレだけ莫大な気が眠つてるのだろうか？

兎角、カナメを主人としての仮契約はまず間違いなく伝説級のアーティファクトが出ると考えて間違いない。いや、下手したら神話級のが出かねないわね。まあ、私は絶対にハマノツルギが出るでしょうけど。

もしもエヴァンジェリンを従者にしたとすれば、彼女は吸血鬼だからウロボロスとか出そうね。神話級だとしたらヨルムンガンドとかケツァルコアトルかしら？エヴァンジェリンは西洋系だからケツァルコアトルは無いわね。

彼女は吸血鬼だから、死と再生、不老不死はピッタリ当て嵌まるわね。それに女性だから子を産むという点でも再生は当て嵌まる。まづ間違いなくこれね。

カナメが従者だとしたら何かしら……？後衛型の魔法使いだから杖が出そうだけど、殴り合いでナギやラカンに勝つんだから武器が出てもおかしくないわね。でもラカンのアーティファクトでも杖が出るし……。

武器は要らないと判断されて補助系統の装備が出てもおかしくないかな？でもカナメの持つてる本つて魔法の制御や術式の構成、それから色んな記録や計測も出来るからいらないような……。

でも、他のは想像出来るわ。徳性は多分知恵……方位は中央、色調は虹ねスゴイ人生送ってるらしいし。星辰性はたぶん月。男にも女にもなれるんなら、正確には違うけどアンドロギュノスみたいなもんでしょう。

ああ、日本にはその考えが少ないわね。男は太陽から生まれ、女は大地から生まれる。そしてどちらでもあってどちらでもない両性具有は月から生まれるとなっている。

不毛の大地であり、自らは輝けず太陽の光で輝く。どちらでもあってどちらでもない両性具有にはピツタリだろう。称号は流石にわかんないわね。

それにしても、カナメのアーティファクトには本当に興味があるわね。なにになるのかしら？あとエヴァンジエルンのも気になる。どうか、仮契約で終わるのだろうか？本契約に入りかねないわね。本契約に関しては18禁だからね。でも本契約になるとアーティファクトの性能が更に上がるわ。アルのアーティファクト、イノチノシヘンで説明すると、効果時間が爆発的に増えるとかね。完全再生が一時間とかになつてもおかしくないわ。

まあ、私が本契約してもなにも変わらないでしょうね。私のアーティファクトは私専用の物で、これ以上の変化が起こらないから。一応ハリセンにはなるけど、あんまり意味無いわね。殺傷能力が無くな

るから便利だけ。

ああ、知的好奇心が押さえられないわね。エヴァンジエリンとカナメは元々旧世界の人間だから、こっち側の伝説の武器類が出るに違いないわ。どんなになるか興味が尽きないわね。

伝説級が出るのは確定として、それ以上の神話級の物が出る可能性もある。本当にたのし『キーンコーンカーンコーン』み……。

「ねえ、今のつて……」

「はい。始業開始直前のチャイムです」

「うわーっ！」

トリップしそぎてた！その後、私は急いでパンを詰め込んだ……授業には間に合ったわ。

Side out

Side カナメ

夢を見ていた。とっても意味不明な夢だった。なぜかといえば、相良軍曹と神宮寺軍曹がコマンドサンボで戦っていたから。意味不明すぎた。そもそも全部作品が違うだろ。

ここがネギまで、相良軍曹がフルメタ、神宮寺軍曹がマブラヴ、そして俺が似非リリカル。本当に意味が分からない。まあ、あえて言うなら俺は他の世界の魔法やらなんやらも我流で再現したが。

「ふわあ……ああ、よく寝た」

指を鳴らして時計を開く。腕につけている通信専用デバイスの機能だ。通信専用とは言えそれくらいはある。デバイスは強いて言うなら携帯電話みたいなものだし。

空中に開かれたディスプレイには既に五時間目の授業が終わつたであろう時間が記されていた。寝すぎたかね。

俺の上に覆いかぶさるようにして眠つているエヴァの髪を撫でながら空を眺める。茶々丸はとこうと、寝る前と全く同じ姿勢を取つていた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。昼頃にアスナが来てたみたいだけど、なんかあつたの？」

一応起きたんだけど、アスナだから別にいいかなつてそのまま寝ただ。用があるなら起こすだらうし。

「はい。マスターについて幾つか質問された後、何かについて考え込んでいたようです。時折亥いていた言葉から推測した結果、マスターのアーティファクトについてだと推測されます」

「ああ……なるほど」

俺とエヴァが仮契約か本契約をした場合、どんなアーティファクトが出るかって言う話だらうね。まあ、俺もどんなアーティファクトが出るか気になるけど。まず間違いなく伝説級のアーティファクトが出るだらう。下手したら神話級。Fateで言えば宝具だ。何しろナギと契約したラカン

のアーティファクトはゲート・オブ・バビロンモードキだし。

とはいっても、ラカンのアーティファクトは大した事は無い。伝説級の武器と言つても、この世界の武器には概念という考えが無い。Fat eの武器が凄まじい性能があるのは、元から強い力もあつたが、それ以上に信仰と概念の強さだ。

宝具は武器としての切れ味は確かにスゴイだろう。俗に言つ名刀とかだ。だが、百年前のナマクラと現代の名刀で斬りあつたら現代の名刀はスッパリ切れるだろう。

それだけに年月の重みは強いのだ。何しろ宝具は概念の重みで切つていると考えてもいいくらいだからだ。ラカンのアーティファクトは強力な魔力と高い性能を持つがそれだけだ。

無制限に大量に出せはするだけ。現代の人間でも作れるレベルの武器だ。とはいっても、買つとしたら一本数百万ドラクマを越えるだろうけど。

まあ、エクスカリバーとかデュランダルとかも出せるらしいが、普通の武器と変わらないそうだ。とはいっても切れ味なんかは結構スゴイらしきけど。

「まあ、俺も結構気になりはするけど……」

なんかエライ物が出そいで恐いぞ。聖王の鎧が使える武器が出てきたりしてな。アハハハハ……出たらどうしよう……。俺とエヴァの力量からすると、出てもおかしくない。

エヴァは原作だと凄さが分からぬだろうが、とんでもないレベルの魔法使いであることは確かだ。ナギに匹敵する強さであると考えて問題ない。

とはいっても、ナギは魔法剣士より、エヴァは生糸の魔法使いだ。接近戦が出来ないわけではないが、近距離戦闘に持ち込まれたら勝ち目は低いだろう。とはいっても低いだけで勝つ可能性はあるが。エヴァは得意ではない属性の魔法も平然と使えたりする。例えば原

作なら雷の斧とかな。あれは一応上位古代語魔法だ。威力は中の上程度だが、雷が得意属性ではない魔法使いでは使うのは難しいだろう。

更にはエヴァは正反対の氷や闇といった属性が得意だ。氷と闇は五行思想で言うなら水に入る。雷は木になるので、思いつきり苦手だ。というか木は水を吸うので確実に負ける属性である。

更には上位古代語魔法を平然とぶつ放す力。原作で言うとえいえんのひょうがの事だ。あれは最上級の魔法だ。俺も一応使えるが、結構難しい。俺の使う魔法は魔力を方向付けて放つているだけなのだ。制御は精霊系と段違いで難しいが、感覚が違う。ネギま魔法が光だとしたらリリカル魔法はレーザーって感じだろう。

断罪の剣も最上級レベルの魔法だ。一本出すだけでも滅茶苦茶難しいのに五本同時に発動する事が出来る。確実に世界最高の魔法使いだ。ちなみに俺は十一本出せる。断罪の剣はリリカルでいう魔力刃なので、結構簡単に出来る。

実際の所、主側の魔力量で決まるわけだが、エヴァの魔力量はナギにほんの少し劣る程度だ。まあ、直接的な戦闘になつたらエヴァの方が術式の構成や制御が上手いので、エヴァの方が魔力を無駄なく使うだろう。

ほぼ確実にチートレベルの武器が出てくる。そりゃあもうとんでもない奴。デビルズ・オーガンとかイシリアルとか古き月の力とか使えたりしそう。え? なんでそんなマイナーなもんばかりつて? なんとなくだ。

「んな事考えても仕方ないか……エヴァ、エヴァ」

軽く呼びかけ、肩を揺する。

「つ……起こすな……」

後五分とかじやなくて、キッパリと拒絕されました。

「殺すぞ……」

殺害予告までされてしまった。

「仕方ないな……」

H'ヴァを転がし、仰向けにする。そして、形の良い顔に自分の顔を含ませる。

「んつ……」

十秒、二十秒、三十秒……だんだんとH'ヴァの眉が苦しげに歪んでいく。

「んーつーー?」

よつやつと苦しげなつて口を開けると、顔を真っ赤にして転がつて逃げた。

「な、なこをしてるーー?」

「田覚めのキス。一回やつてみたかった」

「や、そつか……」

次は私も……とH'ヴァンジH'リンが考えているのを要が知る由も無い。ところで最近主人公の事を漢字表記にした覚えが余り無いのは氣の所為だらうか。

「そろそろ放課後になりそうだし、戻ろうか？」

「ああ」

フローティングフィールドを消し去り、結界も消し去つておく。仲良く手を繋いで降りていくと、階段を上ってこちらへと来るアスナが居た。

「ああ、もう起きたんだ。じゃあ呼ばなくともよかつたかな」

「何か用でもあんの？」

転校パーティを開いてくれるわけでもないだろうしな。あれはネギがショタだつたから起つたのだ。どうせ雪広が何かしたに違いない。

「うん。アレから必死に頭を悩ませて見たけど、結局のところ考え方付かなかつたから。二人が仮契約したらアーティファクト見せてくれない？」

「それを本気で言つてるなら俺はお前の正氣を疑う」

「**駄目**元だから別に見せなくてもいいわよ。どーセいつかは見ることになるだろ？」

「そうかい」

なにやら顔を紅くしているエヴァの手を引いて家に向かう。ああ、俺の家ですよ？私の晩飯をご馳走してやらねばならんからな！

「アスナも来るか？今日は豪華に行こうと思つてゐるしな」

「いいの？…？じゃあ行くわ！」

実を言うとアスナも結構食いしん坊である。なぜかつて？ネギ達との修行の敵に徹底的に痛め付けて、沢山食べれば強くなれると教えたなら馬鹿みたいに食つようになつたのだ。

ちなみにだが、沢山食べると強くなるのはうそではない。沢山食べれば体を作り直すための材料が大量に供給されるので、体が素早く作り直されるのだ。当時は子供だったからプラセボ効果もあつたな。意思の力つていうのは結構大切なもんなんだ。何も考えずに特訓するよりも、こんな自分になりたいという明確なイメージを持つだけでも体の出来具合は変わつていくのだ。

話を戻すと、子供の頃に食べた味は舌が覚え、脳が好みの味として覚える。子供の頃から野菜を食わせていれば、大きくなつてからも野菜を嫌わないようになる。

ジャンクフードばかり食わせてればジャンクフードが好物になるのはこれが原因だ。菜食主義者の子供は大抵菜食主義になるのもこれが原因だ。偶然食べた肉の味に病み付きになつて肉食主義なつたりもするが。

んで、これが原因でアスナは俺の飯が好物だ。元が王族なのでどうかとも思ったが、長い封印の所為で料理の味なんぞ覚えていないらしい。しかし纖細な舌は残つていたので、俺の味付けをバッチリ覚えているというわけだ。

ちなみに、ネギと小太郎も俺のメシが好物だつたりする。なんでかつて？ロンドンほどじゃないがイギリスの料理は雑なのだ。目分量なんて目ぢやないぜ。

「ふふ……腕がなるなあ」

「今から楽しみね」

「……（一瞬母親みたいに見えたというのは言わぬが華か）」

華だろうね。

その後、家に帰つてエヴァに家族を紹介。ここは英雄の巣窟かと言われた。エヴァにだけこつそりと皆が人間じゃ無い事を説明していました。驚いてたなあ……。

まあ、俺の魔力さえあれば修理できる事と、完膚なきまでに破壊されても常時取られているバックアップデータで復活できること以外は人間と変わらんし。

強いて言うならリンフォースが一番人間離れしているな。ヴォルケンリッターは元々は人間だったわけだし。まあ、ユニゾンデバイスも元は人間だったのかも知れないけど。

まあ……ヴォルケンズが人間だったとしても4000年以上前の話なんだけどね。ヴォルケンリッターは元々は最強と名高かつた騎士たちの生態データの記録だったのだ。失われ行く記録を残していく夜天の書に一番最初に記された記録だ。

それを見つけた奴が使い魔の作成技術を弄つて、ヴォルケンリッターとして作り出したのだ。ちなみに、他にも騎士のデータはある。俺への負荷を考えなければ幾らでも出せる。シグナム三十人とか。邪魔だから出さないけど。

んで、今は晩ご飯の調理中。今日は人数も多いし、沢山作らないとね。だから早めの調理だ。

「このクッキーを作った馬鹿は誰だあ！」

「ひえう！？ わ、 私です……」

部屋の隅っこで縮こまっているシャマル。なんとはなしにテーブルに置いてあつたクッキーを摘んだら、何故かシャリシャリという音がして、鉄鎧の味がしたのだ。

「こんな劇物を置いておくな！ 店売りのクッキーに見えたから食いつまつたじやねえか！」

「「、「めんなさいいへへへ！」

良くある料理漫画のように見た目だけは美味しそうに作るのは難しくない。実際の所、見た目だけ美味しそうに作るのは難しくない。

無色の調味料で酷い味付けにすれば匂いはともかく見た目は美味しい見えるだろう。だからって鉄鎧の味がするクッキーを作るのは凄いと思う。だって匂いを嗅ぐとバターの香ばしい匂いがするんだ。

「や、 そんなに酷いのか……？」

「レシピ通りに作らせれば普通の味にはなるわよ。でも、自由に作らせてると、酷いモノになるわ。シャマルルーレットっていう遊びがあるくらいだからね。

シュークリームのシューの中にシャマルさんの料理を入れるのよ。それを間違えて食べたら……私は病院に運ばれたわ」

アスナがつかれきったような顔で呟く。そして俺が続いて自分の症状を教える。

「俺は病院に運ばれて重度の胃穿孔だと診断された」

「あたしは呼吸器の重度の炎症に胃潰瘍」

「私は肺結核に似た症状を発症した」

上から順に俺、ヴィータ、シグナムである。ザフィーラは一番最初に食べたので、俺が治療してやった。シャマルは何故か平氣である。

「私には食わせてくれるなよ……封印状態の私は普通の人間と変わらんのだ」

「ハハツ、安心しろつて。最近は強羅と憎羅とも仲良くなつてきたんだ。強羅と憎羅には俺から言つて置くよ」

「ええ、私からも言つておきましょつ。強羅とは将棋の勝負をつけねばなりませんし」

「誰だ強羅と憎羅つて!？」

「賽の河原にいる鬼。どうやら俺の両親は死んでないらしい」

どうも気になつたので探しているのだが、どうやらここからいつまど離れた世界が俺が元居た世界らしい。

移動するのは無理でも、覗くのには成功した。俺が死んでから、まだ三ヶ月といった所のようだ。時間の流れが違すぎる気がする。けどまあ、俺がその世界を見るときに、世界をつなげたから、時間の流れはこちらと向づが同期することとなる。

軽く説明すると、世界という箱の一部をチューブのよう伸ばし、離れた世界にそのチューブを突き刺す。そういう事によつて覗いたのだ。

この世界と向うの世界は三つ離れているから、通るほど六を作るのは難しい。

仮に行けたとしても、行つて大丈夫だろうか？

今の俺はどう控え目に見てもハ神はやてであり、ヴォルケンリッターがいる。更にはエヴァンジエルン。確実に騒ぎになるな。ヴォルケンリッターには俺が神にお前等を貰つたという事とアニメにお前らが居たという事も説明したが……困惑するだらうなあ。教えるのは拒絶されそうで恐かつたけど、隠し事なんてしたくなかったから正直に説明した。そして俺の事を認めてくれた。嬉しかった。

「そういえば……」

「うん？」

「俺は、もともとこの世界の人間じゃない

「魔法世界の出身か？その割には日本人らしい容姿に名前だな？」

「いや、違つんだ。俺は、言葉どおり、異世界の出身なんだ。平行世界とでも言つべき場所の」

「平行、世界……魔法理論に真つ向から喧嘩を売つていいな？」

確かに。魔法理論というのは文字通りの理論だ。物理学みたいなもんで、永久機関が作れないのと同じようなものである。主要なものでは、時間移動は出来ない、平行世界の移動は不可能、死者の蘇生は不可能。といったように。ちなみに俺は全部出来たりする。死者蘇生は条件があるが。

「俺はそこでは極普通の高校生でな、当時は確か16歳だったが。何の冗談かは知らんが、神の手違ひつて奴で死んだ」

「神? 本当にいるのか?」

「いぬらしげ。」こが俺の夢でも無い限りはな。そこで、その爺さんは俺に言った。」のまま死んで輪廻転生の環に入るか、異世界に新たな命として生まれ変わるかと」

「後者を選んだ……そういう事か?」

「まあ、な……転生する世界も選ばせて貰えてな。俺の元居た世界では漫画として描かれてる世界、……この世界に転生してきたんだ。ビツヅツツツヘ。」

「なにがだ?」

「いや、だからな……」

「私は今、ここに、いつして生きている。そして私の前には国後要が生きてこる。それだけだ。言つただろう? 私はお前を裏切らないと」

「ああ……だから俺は……ヒガアを裏切らない為に話した」

「それで十分だ。お前は私の事を見てくれている。誰かに聞いたでもない、その漫画とやらで見た私でもない、イマノコに生きている私を」

「ヒガア……」めさん。変な」と言つて

「フン、次からはふざけた事を言うなよ。私は私でお前はお前だ。
それでいい」

なんともまあ、豪胆な人（？）だ。俺の恋人は。平然と認めてしまつていて。たとえここが漫画として記されている世界であろうとも、この世界は確かに存在していると。

まあ、そんな事を言つてしまつと、この世界にもゼロ魔やらがあるのだが、あちこちの世界を覗くと、それらしき世界があるのだ。無意識に夢でそういう世界を見て、それを自分で本にしてしまう人が小説家なのでは無いだろうか？まあ、それも些事だ。

「つと……鍋が噴いてるな」

遮音結界を解除すると、鍋が噴く音が聞こえてくる。話してゐるうちに鍋が噴いていたようだ。味が落ちては敵わん。火加減を調節する。火加減を調節し終えてもとの場所に戻る。アスナは何も聞かない。遮音結界を張つていたと言う事は聞かれたく無い事だと分かつているから。

人の心の領域にすかずかと土足で踏み込むような無粋な輩ではないのだ。幼いながらも聰明であつた事を思い出すな。

「しかし、まあ……お前の親か。おのように奇想天外な人物ではないだらうな？」

「氣も魔力も確認されてない世界だからね。多分、あるにはあるんだろうけど、魔法文化自体が存在して無いんだと思う。

何日か覗き続けたけど、魔法技術はなさそう。國家機密のある場所とかも覗けたし。だから、普通の人間だよ」

この世界は国家機密がある場所には大抵の場合魔法的な処理が施されている。国の機密に関わるともなると魔法の存在を知つてしたりするのだ。

ところよりも、そういうた奴等は魔法使いの家系だつたりする場合が多い。魔法障壁だけで銃弾は防げるし、魔法の射手は対戦車ライフル並みの威力がある。

國家の機密を守ることは魔法使いにも意味がある。国家機密には魔法使いの事も含まれているのだから。

「さて、そろそろ出来るぞ。アスナ、シグナム呼んで来い」

「はいはい」

何時もはこの時間、庭で鉛入りの木刀を振つてゐるはずなので、アスナに頼んで呼びにいかせる。使えるもんは使うんです。ヴィータには皿を並べてくれるよう頼み、シャマルは盛り付け。ザフィーラには運んでもらう。ちっちゃい体で頑張るザフィーラくんかわいいです。いかん、また変な思考が出てきた。

その後は楽しくやつた。四時過ぎから作つていたから、ちょっとばかり作りすぎた。まあ、うちの人間は全員腹一杯に胃袋が詰まつているような奴等ばつかないので全部なくなつたが。

アスナには門限平氣かとも尋ねたが、そこらへんは魔法生徒だから問題ないらしい。つまる所、夜に外出しても許されると言つ事だ。いいのかそれで。いいんだろうな。

という訳で、みんなでゲームしてます。スマブラだよ、スマブラ。どうでもいいけど、スマブラはXよりもDXの方が面白いと思つ。

「ヌフフフフッ……」

「アーツ！」

「フツ、ハツ、セツ、ヤツ、トオーツ！」

「らめえええええええ！」

上から順に、俺、ヴィータ、リンフォース、アスナである。俺はミュウツーを使つてゐる。一番好きなキャラ。でも得意じゃない。得意なのはロイ。

ヴィータはキャプテンファルコン、リンフォースはこどもリンク。アスナはゼルダ姫である。アスナは何故かゲームが致命的なまでに下手糞なのだ。

リンフォースはそれなりにゲームをする。特にロックマンが好きらしい。ロックマンDASH3は何時出るんだと一日一回は言つてゐる。俺も言つてるけど。お気に入りはゼロシリーズ。だが口に出るのはオメガのセリフ。レプリロイドと共に感でもあるのだろうか。アスナをみんなでぼっこんぼっこんにした後、二人が俺に向かってくる。スマブラで一番強いの俺だしね。ミュウツーは最弱キャラと言つても過言ではないので囮まれると即死ぬ。

しかし、俺はその程度では負けはしない。辛くも一人を叩きのめした。やつぱ俺TUEEEE!!

「良ゲーをやつた後はクソゲーをやるべきだと思つ。といつ訳で、バンゲリングベイを用意した」

「真面目にやると結構面白いんだけどな

「当時の子供には凄い不評だつたぞ」

リアルでプレイしてたからね、俺は。この世界で換算すると、

俺つて1968年生まれなんだよね。こっちにきたのは1983年なんだけど。大戦終わった頃には既にファミコン発売してたし。

「そんなに不評なのか？」

「というよりも操作が難しい」

当時のラジコンみたいな操作法だつたからな。面白いことには面白いのだが、機動予測をして攻撃しないと攻撃が口クに当たらんのだ。だんだん頭が疲れてくるし、何でゲーム如きにそんな苦労をしなくちゃいけないのか分からなくなつてくる。

「あと、オプーナも用意してある。これはシステム自体は面白いんだが……」

「キャララザで失敗してるよな」

うん。俺は口クにやつてないけど、ザファイーラがやつてるの見たし。ちなみにだが、ザファイーラはゼル伝シリーズがお気に入り。その後、アスナは帰つた。外泊は流石に不味いからね。

「仮契約をするぞっ！」

「いきなり何？」

「言葉どおり、仮契約をするぞ」

別に異存はないので、デバイスを使って足元に仮契約用の魔方陣を描く。

デバイスによつて展開される魔方陣は魔力によつて空間に描画され

てるものなので、術式としての意味さえあつていれば問題ないのだ。だから仮契約にも使える。

ちなみに、陣の種類は双方主従契約だ。俺が主で従者、エヴァも主で従者という事になつていて。どっちも魔法使いじゃないと出来ないけど。

陣の中心に立ち、エヴァと唇を重ね合わせる。何度も繰り返した行為といえど、やはり少し恥ずかしい。陣から光があふれ出し、契約が完了する。

目の前に現れたカードを手に取る。俺がエヴァのマスターカード、エヴァが俺のマスターカードを。ハッピーハッピーカードをエヴァに手渡す。エヴァもハッピーハッピーカードを手渡していく。

「……境界を渡る王。アーティファクトは王の財宝」

「真祖の女王。アーティファクトは靈長の殺害者」

なにこのチートアーティファクト?…とりあえず呼び出してみると、宝石で飾られた小さな鍵が出てくる。これが宝物庫の鍵となつていい。触つているだけで宝物庫の中身が分かるな。

エヴァの方を見ると、白い犬が居た。本物の犬というわけではない。式神に近いものだが……「冗談じゃない」

抵抗する事が出来ない。殺害されるビジョンしか思い浮かばない。等しく靈長の殺害者と言つ事か。

俺は慢心王の宝具、全ての宝具の原典が収められている宝具。生憎と俺は英雄ではないので、どの宝具も使いこなすことは出来ない。単純に使えるだけだ。それだけ十分な効果だが。

エヴァは魔法使いにはピッタリのアーティファクトだ。人間が相手ならば抵抗も出来ないで殺害されるしかない最強の式神。プライミツツ・マーダー。

ハハツ、ワロス。俺が主になると、こんなとんでもないアーティフ
クトが出てくるのかよ。

「カナメ……」

「ん?」

エヴァに押し倒された。今日布団取り替えたばかりのベッドが心地
よい。

「本契約……しようつ?」

「い、いやいや……それは」「う、なんといつか……条例違反といつ
か……そんな事ないか」

俺、80歳。エヴァ、600歳。わあ、全然問題無いね！

「私とするのは……いやか?」

「それはないつ……いや、だけどせ……」「う、なんといつか……」

「フフツ、日本特有の奥ゆかしさといつ奴だな？生憎と私は中世の
ヨーロッパ出身でな……それに、自由気ままに育てられた……だか
ら、欲しいものは手に入る主義だ」

そう言つと、エヴァは俺の服を剥がし『省略されました。続きを読む
むにはエヴァ可愛いよエヴァと書き込んでください』（書き込まれ
ても続きを書きません）

ハハツ、太陽が黄色いね。でも、今日は素晴らしい日だよ。エヴァ、可愛かつたお。ちなみに、処女だつたみたいですよ。自分でも言つてましたし。というか、吸血鬼に為り立てとは言えど、腕力は常人を遙かに凌駕してたんだから、抵抗くらい出来ただろうし。

ああ、それと……エヴァは生理は来てるそうですよ。600年間も大変ですね。10歳の誕生日って言うのは数え者なくて満年齢だから、来ててもおかしくはないですし。まあ、早期初経ですけど。

出来たらどうしよう……認識阻害でなんとでもなるけどさ……不味いよねえ。いや、出来るかどうか、そんな事を考えて仕方ないじゃないか。今はこの幸せを噛み締めよつ。

第八話 バカップルと告白と眞実と（後書き）

主人公とエヴァ、最後まで行つてしまつたの巻き。

アーティファクト解説。

王の財宝
ゲート・オブ・バビロン

形状は宝石があしらわれた鍵のようなもの。属性は剣なので正確には鍵剣とでもいうべきもの。英語訳するとネズミが押し寄せてくるので禁止。

ありとあらゆる宝具の原典が収められている。ちなみに最強の原典は乖離剣工アである。乖離剣工アはエヌマ・エリシユというバビロニアの創世記叙事詩の事であり、乖離剣工アは世界そのものと言つても過言ではない。それゆえに空間を切り裂いて空間断層を引き起こすといふことが出来る。士郎が解析できなかつたのは情報过多と、剣としての形をしてはいるが、実態は叙事詩であり粘土板等だからである。

ありとあらゆる宝具の原典は文字通りであり、全ての宝具が存在している。ただし扱い手で無い限りは真名解放は不可能。

しかし、宝具はそれだけ強力な武器である。A級の宝具ともなれば、ただの武器としても破格の性能である。また、所持しているだけでも大抵の武器は効果がある。例えば草薙の剣を扱い手ではないとしても、持てば水の加護があり、雷切ならば真名解放が出来ずとも雷を切り裂ける。

宝具が壊れることは滅多に無いが、壊れても内部に納めれば数十日で修復される。また、内部は時間が経過していないため、食物が腐つたりもしない。そして、宝物というのは何も武器だけではなく、

宝具以外にも財宝が納められている。それは食物だったり酒だったり装飾品だったり。この世の全てが納められていると行っても過言ではない。

内部から宝具を雨霰と発射することが出来る。

仮契約状態では全ての宝具はただの武器としてしか扱えず、武器は一本ずつ出すのが精一杯。それでも十分チート性能だが。

本契約に移行したことにより、全ての宝具の扱い手となる。また、無制限に宝具を発射可能。全ての宝具の真名解放が出来る為、ギルガメッシュよりも強力である。流石に宝具を出すタイムラグはなくならない。

どうでもいいが、ギルガメッシュは古代ウルクの王であって、バビロンとは何の関係もない。なので王の財宝が文字通りのバビロンのものだとすると、英雄王でもなんでもなくただの泥棒である。

元ネタ、Fate/stay night

靈長の殺害者
ブライミッシュ・マーダー

白い獣。獣という分類なのは、見る人によって形が変わるからである。ちなみにカナメには白い大型犬に見え、エヴァには白虎のように見えている。

式神とも使い魔とも言いがたいが、生物で無いとも言いがたい。何とも説明しにくい物体だが、生きているのは間違いない。

人類に対する絶対的な殺害優先権を持ち、人間は抵抗することもなく殺されるしかない。亜人も人類に含まれるので、対抗出来るのは悪魔や式神等の使い魔なのだが、ザフイーラと対等に渡り合つ程の強さなので、アシュタロトなどの魔王レベルでない限りは倒すのは不可能と思われる。

命令を聞くのはエヴァンジエリンとエヴァのマスターであるカナメ

だけである。

仮契約状態では命令を聞く事しか出来ない。本契約に移行したことにより、会話が可能に。また、使い魔と同じように人間形態に変化することが可能となる。その場合はエヴァンジェリンを銀髪にした容姿となる。

実は今後一切使われる予定のないアーティファクト。

元ネタ、Type-moon作品

どうでもいい元ネタ紹介。

デビルズ・オーガン DEVILS DEVEL CONCEPT
シリアル 輝光翼戦記天空のユミナ
古き月の力 月と貴方に花束を

一十万アクセス突破記念雑談（前書き）

最近アクセス解析でアクセス数を見れる」とによつやく気付いた馬鹿な私は。

一十万アクセス突破記念雑談

要「一十万アクセス突破ですよー。というか、普通は一万アクセスとか五万アクセスの時に始めてやるべき。そつするべき」

エヴァ「気付かなかつたから仕方ない。そもそもアクセス解析が何か分かつていなかつたくらいだからな……」

要「まあ、それは置いとして、純粋な疑問とお便りに返答を出します」

エヴァ「よし、幾らでも質問するがいい」

要「はい、エヴァが説明眼鏡を装着したので、早速質問に移りたいと思います。

えーっと……『要つて誰ですか?』だそうです……」

エヴァ「……この作品の主人公の名前を漢字表記にしただけだ。皆にカナメと呼ばれているから忘れるのも仕方ない」

要「はい、テストの時にも間違えて『国後カナメ』と書いてしました。ちなみに、国後は『くなしり』と読みます。苗字の元ネタになつたのが某エロゲの男の娘主人公だつたりします。意外な共通点ですね。ちなみに、元ネタのエロゲでもポンポン性転換してます」

エヴァ「誰もそんな事は聞いて居ない。カナメの処女は貰うが。では、次に移るとしよう。『本契約でアーティファクトの効果が変わっていますが、オリ設定ですか?』だそつだ」

要「オリ設定ではありません。まあ、本契約でこうなるかは分かりませんが、原作では本契約によつてアーティファクトの効果が変わることが説明されています。原作の楓のアーティファクト、天狗の隠れ蓑。内部の家に住むことは出来ても時間制限があり、出る必要がある。ただ、本契約する事によつて、内部の家に一生住む事も可能である。だそうです」

エヴァ「実際の所、仮契約というのは謎が多いものだ。仮契約カードの絵柄も契約の精霊が描いてるとも言われているが、事実かは判明していないし、アーティファクトが選ばれる基準や何処から出てくるのかも判明してはいない。一説によると、アカシックレコードとも呼ばれる全ての始まりの場所から、その人間の始まりの要素と組み合つたものを選んでいるとも言われるがな。だが、アーティファクトは誰かが作つて物であることは間違いない。原作の、のどかのアーティファクトには製作者がどうだのという一文が見える箇所があるしな」

要「そちらへんは研究者に任せましちゃうね。じゃあ、次の質問です。『結局夜天の書は一体何時の時系列のものなんですか?』だそうです」

エヴァ「いい質問だ。要の持つ夜天の書は八神はやでの下に転生するはずだった闇の書を掠め取り、神の力でバグを修正しただけだ」

要「おかげで、本来なら失われるべき機能や、失われた魔法も残つてます。リンクフォースが居るので夜天の書からの読み込みで魔法を使つてもタイムラグは少ないです。ただ一つ言うなら、本来ならなかつたはずの八神はやとの生活の記録は存在しています。平行世界の自分達という意味での視点では見ていています。神様の計らいでしょうか? どうでもいい事ですが、夜天の書には蒐集機能も残つ

てて、使ってリンクアーコアを集めれば、無限の魔力を手に入れる事も出来ます。チート具合が加速するのでしませんが」

エヴァ「案外簡単な質問だつたな。では次の質問に移るうか『リンフォースは食いしん坊だそうですが、メシは何処に消えてるんですか?』」

要「ユニゾンデバイスは生きているのでメシを食べてもしつかり吸収します。でもトイレには行きません。きっと消化吸収率が100%なんでしょう。その癖に大量に食べているのは何ででしょうか?ちなみに、守護騎士プログラムであるヴォルケンズは、DNAではなくプログラムで体が構成されている所だけが違いなので、汗もかけばトイレにも行きます」

エヴァ「俗に言つ食べても太らない体质、という奴だ。まあ、私も吸血鬼として体が固定されているから、太る事も殆ど無いがな……吸血鬼は血をエネルギーとして利用するから、普通の食物はエネルギーになりにくい。一口血を飲めば、一日何も食わずに生きていけるほどだ。まあ、普通の人間でも血は栄養になる。人間の血は大量の鉄分を含んでいるから、大量に飲むことは出来ないが、少しづつ血を飲んでいけば、数週間は生きていけるそうだ」

要「まあ、血液は飲むと吐き気を催す成分を含んでいるので、大量に飲むと吐きますね。そう考えるとエヴァのシンジくんやアスカは凄いですね。ちなみに、吐き気がするのは共食いを防ぐための成分による影響です。では次の質問に行きましょう『ネギの心の強さはどうくらいですか?』なるほど、これはいい質問ですね」

エヴァ「心の強さなんて、ラカンのパンチ力はイチローのホームラン百万本分みたいな説明しか出来んぞ?（単純に比較とかが出来な

いという意味です）要が悲惨な実験場に連れて行つたために、人間の醜さを理解している。あの実験場は獣人にとっては完全な悪だが、エンリルは主宰神（）であり悪がある。人間にとつては純粹な正義も悪も存在していない事を理解している。説明はしづらいが、自分達を襲つてきた敵を殺すくらいはするだろう。あのヘルマンを見逃したりはせず、心臓やら靈核やらを取り出して、石化の解除を調べるくらいはする」

要「ただ、助けられる人は出来るだけ救おうとするし、出来ることなら殺す事はしないでしようね。そこらへんが甘いともいえますが、そこがネギのいい所でしょう。ちなみにですが、原作ではネカネしか助かっていませんが、今作ではスタン爺さんも助かっています。実はスタン爺さん、原作では好きなキャラの一人だつたりします」

エヴァ「悪魔の石化は凶悪だからな、では次の質問に行こうか『性転換魔法つて本当に誰得だつたんですか？そもそも何で生まれたんですか？』というか、女力ナメが変態すぎませんか？」だそうだ

要「痛いところついてきましたね。性転換魔法は実際には誰得ではありませんでした。女になりたい男とか男になりたい女も居ましたし、騎士の家系で後継ぎが生まれず、子供を男に変えたりといった具合に使われてました。騎士は体が資本なんで、男の方が有利なんですよ。あとは、あるじゃないですか、烈風カリンでも男装して騎士やつたりとか。あれをガチで男になつてやつたわけです。じゃ、次の質問行きましょうか」

エヴァ「女力ナメの説明がまだだ。もしも要が女だったら？という風に精神が再構築されており、女としての要の精神は非常に弱かつたという事になっている。その為、人を傷つける事を嫌い、自分が

傷つく事も嫌つっていたわけだ。その為、重度のヘマトフィリアやネクロフィリア、そしてマゾヒストになってしまったというわけだ。これは本文でも説明してあつたぞ。こゝそりシヨタコンだつたりするが、「

要「じゃ……次の質問に移らうか『カナメ可愛いよカナメ。男の娘とかご飯三杯はいける。カナメー！俺だー！結婚してくれー！』だそうです。誰ですか貴方は。結婚しません。俺はエヴァと結婚します」

エヴァ「要は私のものだからな！では、眞面目な質問を見るとどうか。『カナメは具体的にどれくらい強いんですか？本当に最強でチートレベルなんですか？』だそうだ」

要「自分で言うのもなんですが、チートレベルなのは間違いないです。近距離戦は喧嘩殺法ですが、ラカンやナギと殴りあうくらいは出来ましたしね。魔法に関してもチートレベルです。ラグナロクはSランク砲撃魔法ですが、それを数十発同時に制御しますしね。ちなみにですが、雷の暴風はAランク砲撃。デイバインスターと同等だと換算してます。ナギの雷の暴風は大量の魔力を込めているので、AAA+レベルはあります。人と同じくらいの砲撃ですから、大きさはスターライトブレイカークラスですね。それ以上の砲撃を数十発同時です。魔法使いとしては最強といつていいです。広域攻撃魔法はデアボリックエミッショングラスですね。それ以上の砲撃を攻撃も平然と出来ます。というよりも、俺は広域攻撃魔法の方が得意です。資質としては収束魔法の方が得意なんですが、拡散タイプ、ちなみに収束魔法はなのはの方のスターライトブレイカーとかの事ですね」

エヴァ「攻撃は得意だが、反面回復魔法は余り得意ではないらしい。まあ、記録されてる魔法を使うのだから、不得意もクソもないそしだがな。ただ、解呪は全く出来ないらしい。」
「うちの封印や呪いは、リリカル的な魔法とは相性が非常に悪いのだ。リリカル的な魔法は科学を発達させた結果の魔法であり、封印というのも物理的でりながらもアストラルに近い方向の力だ。こっちの魔法は神秘を使う魔法だ。例えばヤドリギで心臓を貫かれて死んだ不死の神が居たが、その影響でヤドリギは非常に強い不死殺しの力がある。ヤドリギで作られた槍で貫かれれば、私の傷は中々治らんだろうしな」

要「説明が長くなつたな。では、そろそろ終わりにするといようか？」

エヴァ「ああ。だが、この回は本当に必要だったのか？」

要「そんなものの俺に聞くんじゃない。それじゃ、お便り（感想）まつてまーす。どんな下らない質問にも真面目に答えますので、感想下さい」

エヴァ「感想が増えれば更新が早くなるかもしないぞ？」

要「それじゃ、お疲れ様でしたー」

一十万アクセス突破記念雑談（後書き）

何とはなしにやった。後悔はしていない。

8月6日の午前一時くらいに修正。

第九話 神と異常性と顔合わせと（前書き）

一ヶ月ぶりくらいの更新です。すいませんでした。
パソコン壊れる 液晶壊れた よし、買い替えた！サイフの中身が
アリマセーン。というわけでして、数日前によつやく買い換えたば
かりなんです。

第九話 神と異常性と顔合わせ

頭が痛いでござる。朝起きたらすぐ近くにエヴァが居て、驚いて転げまわったのだ。頭から地面に激突したのは言つまでも無い。痛む頭を押さえながら、昨日何があつたかを思い出す。

「あう……」

すぐに恥ずかしくなつて、外を走り回りたくなる衝動に駆られた。頭のどつかでは今の自分は顔を真つ赤にして俯いていて、その手の人からしたら相当に萌える姿だろ？といつ下らない考えが走つているが。

「そ、そつだ、朝ご飯。朝ごはん作ろ？。朝ごはんは一日の活力。そう、朝ごはんがなれば人は頑張れない。」

そもそも、朝ごはんが重要視されるのは朝食を摂る事によって胃の活動を活発にし、脳を活性化させることによる。

一概にそつとは言えないが、朝食を摂ることによって血圧を高め、眠気を覚まし、意識をハッキリとさせることが出来る。

また、空腹を感じていな場合でも胃の内容は空っぽの場合がある為に、食欲がなくとも摂る事は必要である。

そして、朝食を毎朝必ず摂るのは生活リズムを整えることにも効果があり、体内時計の調節に重要なこともある」

自己弁護みたいな感じで朝食の重要性をペラペラと語り、扉を開けるところで自分が全裸だという事に気付く。

再び顔を真っ赤にして着替える。始業式は金曜日だったので今日は休みである。ゆとり教育のため、去年から土曜日は全て休みになつたのだ。

まあ、俺は当時は立派な魔法使いとしての仕事ばかりだったので、特に関係はなかつた。だが、今なら言える。ゆとり教育つていいもんだ。学力の低下は俺には関係ない。

たつた一日でも精神がガリガリと削られるのに六日も学校に通つてられるか馬鹿野郎。前世は家で遊んで学校行つて寝る生活だつたけどね。おかげで浪人しちやつたけど。中学浪人は俺だけだったよ。

「あさあさあさあさあさー」はーん、しつかり食べようあさーはーん

気を取り直して、歌いながら下に下りていく。今日の朝はんは何にしようかな？

冷蔵庫を開いて、今日の朝食について考えをめぐらせる。今日の朝飯はサツパリと行こうか。

ちゃかちやかと料理を開始し、何時よりも一人分多い朝食を作つていいく。こういうのつて幸せだなあ。

何となく幸せな気分になりながら玉子焼きを切り分けていく。うーん……ラノベとかマンガだつたら女の子がやつてる事なんだけどなあ……。

まあ、料理は趣味だし、別に気にすることじやないしな。魔法世界には男尊女卑なんぞ殆どないし。

そもそも、男尊女卑って言うのは非力な女は大した事ができないからって言つ風に生まれたものだから、魔法つていう物が日常として存在してる場所では肉体強化魔法があるから生まれもしなかつた。というか、魔法世界では女性の方が強い魔力を持つ事が多いので、どちらかという女尊男卑が生まれる可能性が高い。

「よし……後は米が炊ければ

炊飯器を見てみると、もう炊けるようだ。全員分の茶碗を用意して、炊飯器の前で待つ。炊きたてよりも、少し待つ方が美味しいんだ

けどね。

ふと思ひ。しゃもじと人数分の茶碗を手にして炊飯器の前で突つ立つて いる姿は、かなりシユールなのではないかと。どうもでいいや。炊飯器が米が炊けた事を知らせる音を鳴らし、俺は早速炊飯器の蓋を開けてしゃもじで混ぜる。なんで混ぜるかは知らんが、やるものらしい。

一口米を取つて食べる。「うん、相変わらず美味しいな。まあ、米研ぎは小学三年生からやつてたから……かれこれ70年近いが。そりゃ上手いわ。

「うふ、あたいつたらてんせいね」

ふと頭に思い浮かんだ言葉を言ひ。この世界に東方ないんだよなあ……首領蜂はあるんだが。そもそも65年以上前のこと良く覚えてるよなあ。

といふか、人の記憶つて150年分くらいしか保存できないんじやなかつたつけ……？俺、大丈夫かな……？

『それなら心配はないぞい』

唐突に脳裏に声が響いた。

「うひやあうあーーー？」

『なんじゃ、そんなに驚くことなかれ!』

『普通は驚くわー! いきなり話しかけてくんなーとこつかアンタ誰?』

思念通話の要領で返事を出してみる。

『なんじゅ、忘れたのか? わじじゅ、お主を送り出した神じゅ』

『ああ、神か』

あの意味不明なまでに輝いてて、美しいトリプルアクセル上座をかましてみせた。

『うむ、その神じゅ。最近ではクワドラブルアクセル上座を練習しておる。さて、脳の件じゅが、それは問題ない。

おぬしの恋人である吸血鬼も既に600年以上生きておるが、昔の記憶をしつかりと覚えておるじゅろ?』

『ああ、そういうえばそうだな。というか、なんで上座の練習なんしてるんだよ……』

『神はやる事がなくてのつ……!』には時間の流れという物もないせいでも、ありとあらゆる世界の娛樂を集めてはあるが……すぐに飽きてしまつんじゅ。

まあ、そんな事はどうでもよろしい。おぬしの脳は既にわしの方で調整を施してある。一応、永遠に脳がパンクすることはないじゅる。

長すぎる人生に狂つてしまふかもしれんがの。そこらへんはおぬしのほうでなんとかせい。人の精神構造というのは脆弱じゅからの『

『そうだな』

長すぎる生は別れと孤独を生み出す。あと百年もすれば紅き翼の人間は皆死んでいるだろ? ラカンは長寿種族だが、それでもいつかは死ぬ。

ネギやアスナもいすれ死ぬ。不死ではなくとも不老である俺は置き

去りにされてしまうのだろう。何れは別れを知らなければならない。けど、俺にはエヴァがいる。シグナムが、ヴィータが、ザフィーラが、シャマルが、リインフォースがいる。共に永久を生きる事になるかもしれない仲間がいる。

それだけで人は安心できる。自分と同じ立場の人間がいるだけで人は幾らか安心できるものだ。人つて言つのは姑息で汚くて弱い。だからこそ自分を必死で綺麗にしようと頑張る。

けど、最初つから綺麗な奴もいる。人間は誰だつて弱いけど、きっと強くなれる。俺はそう信じてる。あのナギのように、まるで輝いているように見える人間がきっと居るつて。

自分が弱いからこそ誇りを持つて生きる人間も居る。エヴァが自己弁護と維持の為に女子供は殺さないという矜持も輝いて見える。その誇り高さに。

俺もそんな人間になりたい。だから、救える命は救いたい。手を差し伸べて、その手を取るなら、精一杯助けてあげたいと思う。つと、話が脱線してしまったか。まあ、兎に角、脳味噌がパンクする心配はないって事か。

『おつけ、ありがとな』

『なに、アフターケアも仕事のうちじゃ』

転生させるのって仕事だったのか？

『おぬしの場合はちょっと違うの。人を転生させるのも神の仕事ではあるが、おぬしのように強大な力をつけての転生は滅多にない。人を転生させて遊ぶような神はおらぬしの。というか、人に力を与えられるのはわしのような最高神だけじゃ。最高神はわしの他に二人だけじゃし』

爺さん、あんた最高神だつたのか……あんな輝いてて、見事な土下座をする神が最高神なんてな……。

『フレンドリーが信条じやからね。兎角、おぬしのよつて記憶を持つて転生するものは滅多におらぬが、おぬしのようにこじらのミスで死んだものにはしつかりとアフターケアをせねばならんのだ』

なるほどねえ。

『あ、そういうわけじゃ。それではの』

そう言ひつと、神の氣配っぽいものは消えていった。

ふと手元を見ると、しつかりと朝ご飯の準備を終えて、テーブルの上にみんなの朝ご飯を並べていた。主夫根性が染みついてるって奴か？

どうでもいい事かと思いながら、王の財宝から何故か入っていた銅鑼を取り出して殴った。

この銅鑼、明確な名前はないが、かなり高名な品らしい。王の財宝にはこいつたものも結構あるのだ。名前がなくとも素晴らしい効果があつたり、美しいものだつたりと。

一頭の龍が絡み合っている彫金が施されている。王に献上される程の品だ。売り払つたら一体どれだけの価値があるのか、考えるだけで恐ろしい。

ちなみにだが、銅鑼の音は凄い。寺の鐘並みといえれば分かるだろうか？少なくとも近くに居たら耳を塞ぎたくなるくらいにこわいらしい。

ましてや俺は強化した拳で殴つた。

銅鑼が一回転して後頭部に激突しかかつたが、何とか回避した。ち

なみに、家の周りには遮音結界が張つてあるので問題ない。

家のあちこちでどたばたとした音が響き、一番最初に部屋に入ってきたのはシャマルだつた。多分だけど、シャマルは起きてたのだろ

う。

「なにかあつたんですか！？」

「朝」」飯もう出来たよ」

「……もしかして、呼ぶためだけに？」

「うん」

「何処から出してきたんですか……こんな大きなもの……」

真ん中が見事にへこんでいる銅鑼を見て、シャマルが呆れたような顔をする。そりやそうだろ、俺だつてこんなもので起しあれたら呆れる。

「うん、俺のアーティファクトみたいなもんかな……」

「じゃあ、契約したんですか？」

「ヤニヤニとした笑みを浮べながらシャマルが尋ねてくる。うめえ。

「見せてあげようか」

モーション登録した動作。つまる所指パツチンで王の財宝を解放する。背後の異空間から、大量の武器が顔を覗かせる。

一つ一つが莫大な魔力を秘めた宝具だ。それも全てがAランク宝具。真の名を解き放てばたつた一つの宝具の効果でSSSランク魔法を遥かに凌駕した威力を見せる。

所持者の魔力を集積、增幅、光に変換し、究極の斬撃として解き放

つ星が鍛えし神造兵装エクスカリバー。

世界を焼き尽くしたとも、レー・ギャルンの筐の中でシンモラと共に在り、九つの堅牢な鍵によつて封印されているとも言われ、剣とも杖とも枝とも言われるレーヴァテイン各種。つまる所、剣としての、杖としての、枝としてのレーヴァテイン全でが。

原罪の名を冠するメロダック。太陽剣グラムの原型であり、グラムは時流れて王の選定に用いられたカリバーンとなつた竜殺しの最強の魔剣。

一度鞘から抜き放てば人を殺すまで戻らぬ呪われし魔剣ダイインスレフ。太陽神ルーが所持したとされるブリューナク、五つの穂先から五の光を放ち、一突きで五人を殺したとされる槍。

槍を向けた軍勢に必ず勝利を齎すとされ、投じれば何者も避ける事が出来ず、持ち主の下に戻るとされるグングニル。

敵の必殺の一撃に対し因果律を捻じ曲げてカウンターを返す、究極のカウンター兵器フラガラッハ。全て撃たれればまず死ぬだろう。どうでもいいが、フラガラッハはFat eでは鉛のような塊だったが、アレは伝承保菌者が作り出した物で、実物と同じであつて別物の存在だからだ。本来のフラガラッハは普通の剣の形をしている。

「ひえええ～～！」

焦つて逃げ出すシャマル。続いてシグナムとザフィーラが飛び込んでくる。一拍遅れてヴィータも突つ込んでくる。

「なにがあつた！」

「襲撃ですか！」

「カナメに手はださせねえ！」

うん、もう一度と銅鑼で田覚まししない。朝っぱらからカオスで困る。ちなみにリインフォースは既にテーブルについている。何時の間に？

「いや、朝ご飯だよ」

そう言って、俺はテーブルを指差す。早く食べたくて「さあつづいていふリインフォースが見える。

「今日は趣向を変えて、一発で起きて見せようと思つて」

別に俺がクソ眠いのに何時までも寝こけてるのが腹たつたわけじゃないぞ？ 皆は納得してないみたいだけど、強引に納得させた。皆を待たせるのも申し訳ないので、心苦しいけどヒヴァを起しきりとしよう。という訳で、自分の部屋に戻る。

ちなみに、俺の部屋は一階にある。リビングに一番近いという理由で選んだ。広さとしては家の内で一番田になる。

扉を開けて、俺は鼻血を噴き出して止血し、また部屋に入つて鼻血を噴き出した。ヒヴァが裸のまま寝てるんだよ。

陽光を浴びる白い肢体がどうにもこうにも……げふんげふん。さて、起こすとじよう。極力エヴァの体を視界に入れないようにして、エヴァを振り起こした。

「う……んん……」

「起きなさい……私の可愛いエヴァンジエリン……今日は600歳の誕生日……お城に行つて討ち入りをする日ですよ……」

だつておかしいじゃないですか、魔王を退治しに行くのに120Gとヒノキの棒ですよ？ 兵士よりも扱い悪いじゃないですか。

兵士は鉄の鎧に鉄の槍と剣ですよ？ どう考へても配分おかしいで

すよね？むしろ国の総力を挙げて出兵すべき、そうすべき。

国の総力を挙げれば、小国でも千人は兵士出せるよね？たとえ一ダメージしか『えられない』としても、一ターン一千ポイントですよ？」

「……ゲームの根底が思いつきり覆るだらうが……」

あ、反論が帰ってきた。

「というかさ、王様つて後生大事に宝物庫に宝物入れてるじゃん？俺が王様だったら、勇者に草薙の剣とエアの剣渡して、アイアスの盾渡して、鎧はメギヨンギルズ。

具足に韋馱天の靴だろ？それから籠手にイルアン・グライベル。他にも予備にミヨルニルとかレーヴァテイン持たせるね」

「伝説のオンパレードだな……下手をすれば世界が滅びるぞ……」

「むしろアレかもね。勇者の御者みたいな人が死体の装備を剥ぎ取つて、次の勇者に渡すみたいな。27番田の勇者が旅に出た！みたいな。

きっと、王様は精神が病んでるんだね。おお、フランスよしんでしまうとは情けない。とか言ってるのを92番田の勇者がナニイツテンノ？みたいな顔で見てるんだよ」

「さつきから耳元で訳のわからんことをほざくなあー」

鋭い拳が飛んできて、俺の顔面に激突。ヴィータにやると、案外会話が進むんだが。

「いってえ……朝飯が出来たよ」

「ん……。ああ、やうか」

ちぢりと下半身を見るH・ヴァ。とれつと零れる白い肌をた、「省略されました。続きを見るなど許せん」

「と、兎に角、朝食が出来たので着替えてから来るよつこ」

「ああ、分かった」

僅かに頬を染めて体をシーツで隠す。ぐ、ぐわつ、俺まで恥ずかしくなるじゃないか。

一人で顔を紅くして、エヴァが着替えるまで待つ。そして、居間に案内して、朝食の点呼を取る。

「いただきます」

俺の声に皆が畳和し、朝食をとつ始める。ふと視線を感じたので、そちらを向いてみると、ニヤニヤしたシャマルが居た。

「やのうはおたのしみでしたね」

「死ね」

「ひどいー。やまもつと紅くなつたりすげきでしょーー?」

「いぬせえ、チャーハンぶつけんぞ」

シグナムとガイータはなにやらわかっていないようだ。お前ひ、一応俺よりも長く生きてるだろ?

まあ、それはどうでもいいか。ザフイーラは匂いで分かつてこるよ

うだ。リインフォースも分かつたようで、少しだけ頬を染めている。静かになつたなと思ったら、シャマルが氷付けになつていて。ああ、エヴァにやられたんですね。分かります。

「これで静かになつた」

「ああ、いいんじゃね。」これで

こんな感じで、朝食を終えた後にシャマルを解凍してやつた。氷付けにするのは物理的な氷結ではなく、封印側の氷結なので、体に傷は出来ない。

私の朝ご飯があ！と泣いていたが、茶化したお前が悪いのである。大人気ないって？今の俺は14歳なので子供だ。

「さて、私は帰るぞ」

「ああ、送つてくぞ」

「ふむ、では頼むとするか」

「では、お手を拝借」

ナチュラルに手を取る事に成功し、エヴァの手のすべすべさに感動する。

まだ、朝の冷たい空気が溢れている閑静な住宅街を一人で歩く。この道がもっと長ければいいのに、時間がもっと遅く進めばいいのに。

「要、私は……お前の事を好きになつてよかつたと思つていい

「うん？なんでだ？」

「お前はこんなにも真摯になつて私を愛してくれる。これでも長く生きてきた。人を見る目はあるつもりだ。

お前が私を見る目は、とても優しい。まるで、父親のよつと暖かさと、母の包み込むよつと優しさ。その一つを感じられた」

「うーん、それって喜ぶべき事なのかな？」

「誇れ。お前のその優しさは、誇つてもいい所だ。お前に愛された私は、幸せなんだと思う。

なぜ、お前は私を好きになつたんだ？」

「やつだなあ……最初は容姿、次に純粹な興味。次は同情。それから守つてあげたいと思つた」

「まさか正直に話すとはな。しかし、容姿か。まあ、人間の第一印象は容姿で決まるものだしな」

「Hヴァアのその苦惱を僅かでも理解したいつていうのは、きっと傲慢なんだろうけど、それでも守つてあげたい、理解してあげたいと思った」

「フン……契約に記されたとおり、私を命乞ひの時まで守り続けてくれるのだろう?」

「そして、Hヴァアは俺を命乞ひの時まで支え続けてくれるんだろ?」

「当たり前だ。私は、尽くす女だぞ?」

「そつか

言葉無く歩く。沈黙が心地よい。ただ触れ合つ手の暖かさだけが伝わる。

気付けば、エヴァの家まであと少しどこか所まで来ていた。名残惜しい。楽しい時間ほど早く過ぎ去るところは本当なのだろう。

「それじゃ、また、畠田……」

「ああ、明日。また会おう」

手を振つて別れ、家へと歩き出す。風が通り抜ける手が寂しく感じる。明日になれば会える。そう考える事にした。

家へと戻り、掃除を始める。一時間ほどかけて家を掃除したが、引つ越してきたばかりなので大した汚れもなかった。

それから冷蔵庫の中を見て、買い物に向かう。度々家に誰かが遊びに来るだらうし、食材を備蓄しておくのは悪いことじやない。

腐らせる事もないだらうし。それくらい我が家の食料の消費速度は速いのだ。そう思いながら、買い物袋を抱えて家を出る。ビニール袋があつても困るしな。

ちなみにだが、外に出るときは、14歳の姿で出る事にしている。今は女の子という事になつてるので、スカートなども履く。男の尊厳何てとつぐの昔に捨てたよ。

適当に買い物を終え、家に戻つて冷蔵庫の中身を整理。シャマルがなにやら泣いてるが知つたことではない。

「よし、終わつと」

パタン、と冷蔵庫の扉を閉め、リビングのソファーに座り込む。スカートを履いてると、色々気をつけなければいけない事があるしな。

まあ、性転換してると、それも自然と出来るようになるのだが。しつかりと内股で歩くようになつてゐるしな。不思議なモノである。なんとはなしにテレビをつけると、麻帆良のトーンデモ映像が流れ出す。オリンピック選手がここに来たならば、自信喪失するに違いない映像だらけである。

100メートルを平然と数秒で走りきり、砲丸は百メートル単位で飛び、走り幅跳びは助走無しで砂場を飛び越え、垂直高飛びで校舎の屋上に登る。

平然と多脚戦車が闊歩し、人間と見分けのつかないロボットが会話し、背負えるレベルの機械で空を飛び、本物と遜色ない動きをする動物を模したロボット。

科学に関しても数十年先を行つてゐる。といふか、まず間違いなくオーバーテクノロジーだらけである。量子コンピューターとかあるんじやないだろうな。

一番凄いのは、地脈を利用した超大規模認識阻害結界だ。数百平方キロメートルの学園都市を完全に覆う認識阻害結界。永続的にこれだけの範囲をカバーしているのだから、作った奴は天才だろう。麻帆良の非常識さを再確認し、自分の非常識とも再確認しておくれ。やれやれだなあ。

「かーなめー！」

唐突にリビングのドアが開き、ヴィータが飛び込んでくる。そして、そのまま飛んで、俺の胸へと飛び込んでくる。

なんとも子供らしい行動だが、これでも俺よりも遥かに年上なのである。ひとまず、飛びついてきたヴィータを受け止め、そのままくるつと回転させて、自分の膝の上に座らせる。

「どーかしたのか？」

「おつ！ゲーム買って来たから、一緒にやろうと思つたんだ！」

手元の袋を見ると、個人経営らしきゲームショップのビニール袋を持つている。

「今日発売されたばつかなのに、滅茶苦茶安かつたんだ！」

「そこのへんも麻帆良は非常識だからね」

新作ゲームがサンキュッパで貰えてしまうから、色々と間違つてゐ所が多い。利益出るのかな？

「じゃ、やろうか

という訳でして、いそいそとゲーム機の準備を開始する。未だにP-S2は現役だ。まあ、三年前に出たばかりだから当たり前なんだけどね。

DSも来年当たりに発売されるわけだし。麻帆良は技術が進んでる所為で、現在が2003年だという事を忘れそうになる。
そんな感じで昼の時間を潰し、あつという間に夜となる。今日は顔合わせという事になつていてるのだ。ちなみにだが、俺はハ神はやってという事になつていてる。

なので、夜天の書は使わない。別に夜天の書がなくても、俺の脳味噌は異常進化を起こしているので、下手なパソコンよりも処理能力がある。

マルチタスクも40個前後まで増えているし、思考加速で神速モードキまで出来てしまつたのだ。ここへん、俺が異常だという事がよく分かる。

24時になる少し前、家を出て世界中広場へと向かう。人、結構い

るなあ。ほら、巨大掲示板の管理人みたいな唇をした人が居るよ。

「おお、来たかの」

「時間どおりやと思つとったんですけど、遅れてしもたかなあ？」

「ふおふおふおふお、ワシ等が早かつただけじや。実際、時間まで余裕はあるしのう」

確かに、腕時計で時間を確認すると、24時になる一十分ほど前だ。

「では、紹介しようかの。彼女は八神はやてくじや。見た目に似合わず素晴らしい魔法の使い手じや」

「ようじくおねがいします～」

「佩こり」と頭を下げる。心象はいい方がいい。わざわざ敵対する理由もないし、なにより面倒だ。

「得意な魔法は特になし。苦手な魔法も特になし。得意な格闘技も特になし。苦手な格闘技も特になしです～」

（その、得意っていうのは秀てるって意味だから、なにもかもが平均以上に出来るって意味でいいのかな？）

（うん。それでおく）

「では……実力を知りたがるものも居るじゃねえ、立候補するものはあるかの？」

パパッと上げられた手は、高校生らしき女生徒とタカミチの手だ。

「ふむ。では、まずは高音くんとやつてもらひて、次はタカミチくんとやつてもらおつかの」

両方にやらせるつもりか。時間が掛かるのは好きじゃないんだが、高音とやらはやつてもと呪きのめそう。

といつて、他の監が移動し、物が壊れないように対物保護結界を展開する。どうせ、誰も気付いてないだろうけど。

「私の名は、高音・D・グッズマンですわ。よろしくおねがいします」

「ハ神はやてや。よろしく〜」

突っ立つたまま詠唱を開始したので、瞬動で一気に接近して顎に掌底を放つ。終了。

「では、次はタカミチくんにお願いしようかの」

ペニッヒと高音とやらを投げ捨て、今度はタカミチが俺の前に立つ。

「どれだけ強くなつたか……確かめさせてもらいますよ」

「ええで。思う存分掛かつて来いや、手加減はしたつたる」

言つと同時に、無音拳が飛んでくる。それを回避し、氷結魔法で足場を凍らせ、足の裏に魔力刃を発生させる。

一気に滑り出し、タカミチへと接近していく。当然ながら、タカミチもマヌケではないので、無音拳で迎撃をされていく。

地面から伸び上がるよう、氷のアーチを形成し、空中に舞い上がっていく。飛行魔法との併用で、加速していき、俺の移動箇所を予測したタカミチが無音拳を放つが、俺の滑った後の氷を破壊するだけ。

嫌がらせ、俺も無音拳を放つていい。空中で相殺された無音拳が甲高い音を立て、タカミチが感掛法を発動させ、俺も感掛法を発動させ。

「相変わらずのバグキャラですね……」

「ハハハハ！ なにを当たり前の事を言ってるんや！ そんなんは大昔に通った道やないか！」

「そして、僕はそれに憧れてきた！」

放たれた豪殺居合い拳。俺が放った豪殺居合い拳と激突し、爆音を立てる。

「ああ、ギアを上げてくれ！」

「応つー！」

両手で連射されていく、豪殺居合い拳。秒間数十発放たれる高速のパンチ。それと同時に感掛の力が放たれ、周囲で激突していく。やがて距離は狭まり、インファイトへと発展していく。

「シッー！」

「シャツー！」

拳と拳の応酬、拳が激突し、鎌のように鋭く放たれた脚が交差する。激突のたびに、莫大な感掛の力が周囲に撒き散らされていく。

スウェーバックで俺の拳を回避したタカミチが、バク転をしながら、俺の顎目掛けで放たれた蹴りを、こちらもバク転で回避する。同時に着地した所へ、俺が四肢を使つた瞬動で一気に急接近する。咄嗟に腕を組んだタカミチの腕の交差した箇所に、拳を突き入れる。そして、吹き飛んだタカミチが校舎の壁に着地し、瞬動術で戻つてくる。それと同時に放たれた、感掛の力が込められた蹴りを、側転するようにソバットで相殺。

「ハ、ハハッ。ここまでとは……」

「私も、修行を欠かした事はあらへんのや。そつそつ簡単に負けるわけにはいかへんで」

「僕も、修行を欠かした覚えは一度もありませんよっ！」

感掛の力をタカミチが解き、今まで準備していたらしき魔法を解放する。術式の構成が読み取りづらいが、恐らくは雷の暴風。しかし、放つわけでもなく、タカミチはそれを握り込み、体内へと取り込む。

「術式兵装……禁断の闇の魔法やな？」

「そう、僕は凡才でしたから。誇れるのは、鍛え上げた拳だけ。なら、それをいかせるものを使うしかない」

「ええで。せやつたら、その覚悟を見届けたる。私に拳を届かせてみい！」

蒼白く輝くタカミチが、迅雷の如く駆ける。まるで弾丸の如き速さで放たれた拳を、上へと弾く。

弾いた勢いで後方に飛び上がり、虚空瞬動で加速度をつけた蹴りを、後方に飛んで回避する。更にタカミチが加速し、正拳突きを放つ。余りにも速い。この速度、少々見誤っていたようだ。先程、後方に飛んだあと反撃するつもりだったが、予想外に速く、反撃に移れなかつたのだ。

「ハアアツ！」

裂帛の気合と共に放たれた拳。それを、正面から合わせた拳で殴り飛ばす。チッ、面倒だな。

常に出しつぱなしにしてあるアーティファクト、王の財宝から無銘の刀を取り出す。無銘とは言う物の、五尺に及ぶ大太刀、物干し竿だ。（アサシンのと同じ）

「いくでえつ！ 神鳴流奥義！ 百裂桜花斬ツ！」

周囲に放たれた氣の斬撃。詠春の使つていた神鳴流奥義を適当にパクッた技だ。詠春に見せたら、免許皆伝されてしまつたが。それを、高速で移動していたタカミチは回避する。今のを避けるつて、本当に成長したんだなあ、タカミチ。

「刀まで使えたんですね……そもそも、今の技つて……」

「10年前に会得したんや！ サムライマスターのお墨付きやで！」

「それは凄いっ！」

言うと同時に、タカミチが俺へと拳を放つてくる。それを刀を使って

払い、斬空閃を放つ。当然ながら回避される。

「それは邪魔やな。神鳴流奥義！斬魔剣式の太刀い！」

放された最速の技。避け切れない状況を作り出してやつたので、回避は不可能。咄嗟に展開された障壁を素通りし、タカミチの内部で荒れ狂っている雷の因子を切り裂く。

霧散した雷の暴風の術式が消え去り、タカミチが通常の状態へと戻るが、既に魔力が殆ど残っていないのだろう。

感掛の力は消耗が激しい。タカミチは常に最高出力でやっていたのだから当たり前だ。凡そ5分前後の感掛の力最大出力。加えて闇の魔法。

闇の魔法は基本的に夜の眷属。まあ、吸血鬼が使う事を前提とした技だ。膨大な魔力を使う事が当然となる。基本的に凡才でしかないタカミチには辛いだろう。

「コイツで終いにしたるっ！死んだらアカへんてタカミチイ！」

「おおおおおおう！」

タカミチが嵌めているグローブタイプのガントレット、アイドネウスが先日追加した単発式カートリッジシステムを使い、カートリッジをロードし、タカミチの体内へと魔力が流れ込む。

強引に駆け合わせれ、生み出された感掛の力が一気に増大し、巨大な力となっていく。

「神鳴流決戦奥義！極大雷鳴剣！」

「豪殺居合い拳んんんつー！」

激突した力は拮抗し、次の瞬間に豪殺居合い拳は打ち碎かれ、タカミチは雷電の中へと飲み込まれる。

俺は着地すると、意味も無く刀を振り回し、鞘に收める。燕返し練習しよう。

「つむ。そこまでっ！勝者はハ神はやくんじゃ！」

「タカミチさんは、私が治療しちゃます~」

ボロ雑巾のよくなつてしまつたタカミチを拾い上げ、皆凄いモノを見るような目をしていて、肉体年齢を一気に二十歳まで引き上げ、タカミチを背負いつ。

「学園長はん。タカミチさんはうちで治療しますんで、借りときます。明日には10歳ぐらい若返つて戻つてくるんで~」

「本当にうれしいから恩ごのつ……」

若返りの薬とかあるからね。不老不死の薬とかはないけど、獣化薬とか巨人薬とかもあるし。

まあ、そんな感じで、俺はタカミチを拉致して帰つた。悪戯をする為にだ。

家に連れて帰つたタカミチを、治療し、服を全部引き剥がして捨てる。ベッドがないので、俺の部屋のベッドに寝かせるしかないしな

……ククッ。

今朝、エヴァとやつてしまつたベッドだが、既に洗濯は終えてある。日曜日でよかつたと思った日だったね。

ひとまず、俺も服を脱ぎ捨て、全裸でベッドに潜り込む。ブラジャーとか、締め付けられる感じがして好きじゃないんだ。楽なんだけどね、締め付けられるから。サラシを巻こうか？まあ、どうでもいい事かと思いながら、俺は眠りに落ちていくのだった。

Side タカミチ

やはり、要さんは凄い。彼は僕の憧れの人だった。サウザンドマスターよりも強くて、伝説の傭兵剣士であるラカンさんとも殴り合いが出来て。

始めて会つた時、あの人は僕と同じくらいの年齢に見えて、更に言うとスカートを履いていたから、女の子だと思っていた。

アレが初恋つてものだつたんだろう……要さんが男だと知つて、修行に明け暮れたのは悪いことじゃないと思つ。

必死で修行した。彼等の背中に追いつく為に。紅き翼の一員として、彼等に追いつける為に、必死で技を磨き、体を苛め抜いた。

それでも、彼等は果てしなく遠い。僕には才能がない。生まれつき呪文詠唱が出来ない体质だつたから。けど、要さんが、それを解決するための方法を示してくれた。

デバイス。よくは分からぬけど、この世界に普及している精靈を元に使う神秘の魔法に対し、徹底的なまでに突き詰めた科学による魔法。強いて言つなら、茶々丸くんのようなものらしい。

呪文詠唱を肩代わりし、少ない魔力を補うために圧搾保存された弾丸を使う、僕のためだけに作られたデバイス。お陰で、僕は魔法が使えるようになった。

呪文詠唱が必要な魔法が使えるようになつて、エヴァに教えてもらつた闇の魔法……僕は幼い頃に住んでいた町が戦乱で焼かれ、呪文

詠唱が出来ない落ち零れつていうコンプレックスがあつた。

僕にとっては、中々相性がいい魔法だつた。まあ、魔力が少ないので、多用できるものでもないんだけど、お陰で、更に強くなれたと思う。

けど、それでも、彼等には届かなかつた。けれども、昔は要さんに攻撃を当てる事は愚か、氣を使わせる事だつて中々出来なかつた。けれど、感掛の力を使わせる事が出来た。驚いてくれた。

少しでも届けた事が嬉しかつた。もっともつと、修行をして、頑張りたい。せめて、その背中へと辿り着きたい。そう思ひ。

意識が覚醒へと向かつていぐ。昨日は要さんに徹底的に叩きのめされた。多分、だけど医務室で目覚めるんじゃないかな。

覚醒した脳が状況を把握する。なんだか、甘い匂いがする。嗅いだ事がないような気がするけど、なんだか好きな匂い。

なんだらうつと思い、目を開ける。そして、僕の目に映つたのは。

「知らない天井だ……」

知らない天井だつた。けれど、ベッドに寝かされているのは間違いない。ひとまず、起き上がりつと思つて見ると、自分が服を着て無い事に気付く。

そうか、考えてみると、最後の技つて、氣を雷に変換したものだから、感掛法は切れる寸前だつたし、服は使い物にならなくなつてたんだらうつ。

服が用意されているといいんだけれど……そつ思つて、こゝが誰かの部屋だという事がわかつた。
ここは洋室だけど、和室で言うなら1~2畳くらいの広さの部屋だ。綺麗に整頓されていて、部屋の持ち主は几帳面な性格だという事が分かる。あるいは綺麗好き。

パソコンデスクの上には、かなり大掛かりな機械。何だか見慣れない

い機械ばかりだから、こここの部屋の持ち主はパソコンが趣味なんだろつか。

旋盤のようなものの上には剣なんかの武器がある事から、魔法の関係者らしい事は分かる。明らかに魔力が籠ってるし。
誰の部屋だろうかと思い、立ち上がりろうとした所、誰かに引っ張られるような感触を覚えた。驚いてそこへと視線を向けると。

「あ、ザザザギモ……！？」

声が出なかつた。というか、意味不明な声が出た。そこには、一矢纏わぬ要さんが居て……ベッドのすぐ横には麻帆良女子中等部の制服が掛けた事から、間違いなく要さんなんだろう。

何で服を着てないんだとか、男だったはずなのに、柔らかそうな二つのふくらみがあつて、息子さんがいなくてなんで観音様が居るんだとか、色々な疑問が渾然一体となつて、脳味噌がショートしそうだつた。

要さんに留つたマルチタスクで思考を並列化し、何とか自分を治めようとする。そうしていると、要さんが目を覚まし、部屋の真ん中で正座している僕に気付いた。

「…………にしてんの？」

「え、その、といつか、何で要さんがここに……？」

尋ねかけると、要さんは頭を軽く振り、ベッドから降りた。寝起きがいい人だなあ。と思つた瞬間、僕は首も折れよと言わんばかりの速度で顔を逸らした。

要さんは服を着ていない。そして、今は女性になつてゐるのだ。白い肌が陽光に照らされて、奇妙な色氣を伴つてゐる。

「昨日、タカミチがボツコボコになってしまったからな。謝罪の意味も含めて、家に連れて来て治療したんだ。

そこで、客間を準備して無い事に気付いてな。仕方ないから、俺の部屋で寝かせたんだ。ベッドは一つしかないから、同じベッドで寝た。おく？」

「な、なんで服着てないんですか！？といふか、女性だつたんですか！」

「服を着てないのは、いつも全裸で寝てるからだ（嘘だけど）。性別に關しては、俺は性転換魔法が使えるとだけ言つておこつ」

相変わらず非常識な人だ……昨日の幻想空間での戦闘で、うすうすそうなんじやないかとは思つてたけど……。

「あー……タカミチ。その、なんだ……元気だな」

「はい？」

要さんの視線をたどつてみると、そこにはギンギンに元気になつた僕の息子が居た。咄嗟に手で隠す。

「思ひんすけど、これつて逆なんじや……」

隠そともしない要さんに目を向けるも、そんな事には興味がないと言わんばかりに、着替え始めた。というか、今身長とか縮みましたよね？

大体14歳くらいになつた要さんは、しっかりと女性モノの下着を身に付け、その後、麻帆良女子中等部の制服を着込んだ。似合つてゐるなあ……つて違う違う！

「まあ、実際の性別は男だ。今は学校に通う為に女になつてはいるがな……どうでもいいが、生理痛は中々辛いぞ。腹を吹っ飛ばされるのとは、また違った辛さだ」

「凄まじい比較の仕方ですね。といいで、服、貸してもらえません？」

要さんが服を着て、何とか落ち着いてきたマイサンを隠しながら聞いて見ると、要さんは影の倉庫から、黒いスーツを取り出し、それを僕に投げ付けた。

しつかりと、下着とシャツなどもある。買っててくれたのだろうか？だとしたら何時？と思ったが、気にしないことにした。彼等に常識を求めない方がいいからだ。

要さんは、翡翠色のビー玉のようなマジックアイテムを使って時間移動を平然とするしね。あれ、一個作るの一週間くらい掛かるらしいから、そこまで非常識じゃないけど（文珠。ふざけて感掛けの力を収束したら出来てしまつたらしい）。

「さて、まだ朝も早い。どうせだから朝飯を食べてけ」

「あ、いいんですか？それじゃあ、駆走になります」

「結構怪我してたしな。腹も減ってるだろ」

やつぱり、要さんは優しい人だ。まあ、修行は厳しいというか、鬼というか、凄まじいけど。

特にエクストリーム耐久バトルなんて、考えたくもない。修行というよりも拷問だ。大怪我しても、強引に魔法で治され、一日中戦闘し続けなければいけないし。

さて、今日はいい日になりそうだ。これからも頑張ろ。来年はネギ君も来るし。

第九話 神と異常性と顔合わせと（後書き）

番外編のアンケートをやうついよし、まずはリリカルな世界に行つた要とか……妄想してたら書いてた。アンケートを取つてから書くべきなのに。

まあ、それはそれとして、要に行かせたい世界を選んでください。

- ? 要ヒヴォルケンズとエヴァがリリカル世界に。
- ? 要ヒヴォルケンズとエヴァがゼロ魔世界に。
- ? 要ヒヴォルケンズとエヴァが東方世界に。
- ? 要がFat e世界に召喚。
- ? 要ヒヴォルケンズとエヴァがオリジナル世界に。他にも現実から召喚された奴が居たりする。

? 以外書く気はあんまりありません。まあ、選ばれたら書きますけど。選ばれなくても?は書きますけど。むしろ、?ばかり書きますけど。

修正しました。ガントレットとしか書かなかつたら誤解されるのは当然でした。ポケットにも手は突つ込めるようになつてます。要するに、皮手袋に鉄板を貼り付けたようなガントレットなんです。拳の敵に当たる部分を金属で保護するっていう白兵戦には使わない奴です。ガントレットというよりもナックルガードに近いんですけど、金属を使ってるのでガントレットと表記しました。

第十話 学園祭とネギ来訪と戦士は既ひや（前書き）

バカテスト一問目。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（ ）を練り上げ（ ）を構成し（ ）に（ ）を譲渡し（ ）を発動させる

ネギ・スプリングファイールド。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（魔力）を練り上げ（術式）を構成し（精靈）に（魔力）を譲渡し（魔法）を発動させる

教師のコメント。

はい、正解です。とはいっても、これは魔法学校で習つ内容ですが。

犬上小太郎。

気の使い手は、気を使う際に体内で（生命力を気合）で練り上げ（適当に術式）を構成し（獲物）に（気）を譲渡し（必殺技）を発動させる。

教師のコメント。

勝手に問題を改竄しないで下さご。それと、気合はござりませんし、適当に術式を編み上げないで下さい。

国後要。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（下らない言葉）を練り上げ（ギヤグ）を構成し（泡の城で働く女性）に（童貞）を譲渡し（魔法使い卒業）を発動させる。
ちなみにだが、俺は先日魔法使いを卒業した。言つて置くが、好きな相手とだぞ。80歳まで守り抜いた童貞でした。

教師のコメント。

下ネタはやめてください。あと、恋人が出来た事に関してはおめでとうござります。

祝福のエール・リンインフォース。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（リンカーコアを励起し魔力を練り上げ（デバイスによつて術式）を構成し（デバイス）に（魔力を）を譲渡し（魔法）を起動させる

教師のコメント。

魔力が溜められている箇所はリンカー・コアというのですか。初めて知りましたが、一体何処で決ましたのですか？

なんだか怪しい箇所が多いですが、正解にしておきます。あと、貴方が祝福のエールと書いた場所は、ファミリーネームを書く場所です。貴方は国後でしたね。要さんの養女でしたか。

高畠・T・タカミチ。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（情熱と気品）を練り上げ（優雅さと勤勉さに加えその他諸々）を構成し（速さの精靈）に（魔力を）を譲渡し（世界を縮める魔法）を発動させる

教師のコメント。

貴方は要さんと会つたびに回答が滅茶苦茶になりますが、洗脳でもされているんですか？

それとですが、凡帳面な貴方には珍しく、余りにも字が汚すぎて解読できなかつたので、過去視の精靈を使ってみたところ、感掛法を使つて字を書いていましたね。

読み上げ精靈が居なかつたら、〇点になるところでしたよ。次からはもう少しゆっくり書いてください。

ジャック・ラカン

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（魔力とか）を練り上げ（適当に術式）を構成し（適当）に（なにか）を譲渡し（魔法とか）を発動させる。

教師のコメント。

とか、適當、なにか、とか。適當に魔法を使わないで下さい。って、貴方は氣の使い手でしたね。

それはそれとして、問題の文脈が意味不明になっています。誰になかを譲渡したんですか？最後にはめんぢくさくなつて投げ出しましたね？

下の箇所に、『奥義・めんぢくせつ・ふねんつ・』の図（ナギとの殴り合いのシーン参考）とか、問題用紙に落書きをしないでください。

アルビレオ・イマ。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（魔の渦巻く器を励起し、魔の力を）を練り上げ（外れた法をその身で再現し、魔の法）を構成し（遍く万象に宿る精靈）に（魔の力）を譲渡し（魔の法）を発動させる

教師のコメント。

答えはあつていますが、わざわざ言い回しを凝らせなくともいいです。

遅れてきた厨二病ですか？え？厨式病？なにが違うんですか？字面でしか分からぬいギャグをかまらないで下さい。

何となくバカテストをやつてみたかった。

第十話 学園祭とネギ来訪と戦士は眠りか

暖かな時間が流れていぐ。退屈な毎日で、けど幸せな毎日で。意味も無い話題で盛り上がりがつたりして、恋人と甘い睦言を囁いたり。

穏やかで、緩慢で、楽しい時間が過ぎ去っていく。これから一週間後に、麻帆良の学園祭が始まる。今回のイベントは、麻帆良学園全校の人間の鬼ごっこらしい。無論の事ながら、参加するつもりはない。

そんな中、俺とエヴァは学園祭を回る計画を立てている。言うまでもないが、クラスの行事に手なんか貸さん。一応、大人なので手を貸すのもアレだしな。

「で、二田田はまず、明らかに地雷だらうと分かるこの出店にだな……」

「無駄な事は無駄ではないといつ奴か？まあ……それが楽しいのも確かだ」

「そそ、心の贅肉つていうのは必要なもんよ。今の声優ネタね」

「声優ネタ？」

「ああ、じつちの話。多分だけど、俺以外には理解出来ないから」

まあ、あかいあくまの事だね。心の贅肉とやらを嫌つてたけど、そんものは生き急いでると変わらない。

意味も無く一晩中友達と語り合つことは無駄な事だらう。だが、それはつまらない事か？意味も無くバイクやらで高速を走るのは何の役にも立たないだろう。だが、それは本当に無駄な事か？

若い頃に長さなかつた青春の汗は、老人なつた後に涙となつて流れ出るであろう。誰の言葉かは知らないが、いい言葉だ。

バカを見てバカと笑うバカになるな。バカを見て一緒にバカをやれるバカになれ。それが人生を楽しく生きて、楽しく死んでいくコツだ。

趣味なんてそれの具現化みたいなもんだ。プラモデル作るのも、ゲームやるもの、将来の為になんかならない。だけど、それは人生の糧になる。俺はそう思つてる。

「んで、昼飯は俺が用意するよ」

「最近、茶々丸が仕事がなくて嘆いていたぞ」

「悪いが、こればっかしは譲れんな。家事は俺の趣味だ。強いて言うなら鍛錬も趣味だが」

「そりゃ」

最近は弁当作つて持つていくから、その時にエヴァの分も用意してくんだよね。んで、エヴァはうちに泊まる事も多いから、滅多に飯が作れなくなつたらしい。

使わない部屋も大して汚れないし、茶々丸は機械だから、飯を食べたりもしない。かと思えば、茶々丸にはしっかりとした感情がある。だから不満も暇も感じるのだ。

「というわけで、当日は俺が弁当を作つていくぞ。駄目か？」

「別に不満はない」

「んじゃ、俺が作るという事で」

今から早速、当田の弁当のメニューを考え始める。色々と作りたい物があるが、やはり食べやすい物をチョイスすべきだらう。まあ、それはそれで後で考えるとして、今は学園祭の時に回るべき場所をまとめなければいけないわけだ。

「んー、学園祭といえばだけど、来年の学園祭に何かあつたような……？」

「私を見ても分かるわけがないだろ？」

「そりだよなあ……記憶探索の魔法でも探してみるかな……？」

「記憶捜査の魔法を使うことも出来るが、お前の対魔力を突破するのは不可能だろ？」

「まあ、バグキャラですから。そりやすやすと突破されるわけにもいかんしな」

そう簡単に突破されていたら、今さら俺はここにいない。戦争やつてんだから、外道だろ？となんだろ？と使われるのだから。二十年前の大戦で、紅き翼のメンバーに呪いが飛んできたり、ギアスを掛けようとしてきた奴は数え切れない。

まあ、紅き翼のメンバー全員が大魔力もちだったのだから、そう簡単に呪いにかかるたりはしない。当然、突破されることもあったが、解呪が使えないわけではないのだ。

「さて、結局のところ、この次はどうするのだ？」

「そうだなあ……まあ、後は普通に冷やかして回るとしようか」

ペいつとペンを放り投げ、地図を折りたたむ。しっかりと仕舞つておかないと、間違つて捨ててしまいそうだ。

「今から学園祭が楽しみだな」

「フフ……私も久しく楽しみになつてきたな」

二人で笑いあい、何をするともなくゆつたりと流れる緩やかな時間を楽しむ。

最近は特にすることもなく「家でぐだぐだと過ぐす毎日である。夜の仕事は家から誘導弾発射で片付けてる。

俺のマルチタスクを全て開放すれば、数百発全ての弾丸を精密制御することも可能だからだ。

「それはそうと、今日も晩飯食べてくのか？」

「愚問だな」

「あいあいー」

「今日も平和だ。」

特に意味もなく毎日を過ぐし、ようやく二期が訪れた。今までの日常も中々に楽しかった。

しかし、これからは物語の主役であるネギが訪れるのだ。これから物語が始まつていく。それと同時に、嘗ての弟子が旅立つていくのだから、楽しみにもなるというものだ。

いつもどおり、早めに家を出て、あまり人が多くない道を歩き出す。手は前でカバンを持つていて、内股で歩く。無意識でこれがやれるのだから、性転換魔法は凄い。1

そんなことを思いながら、大して人もいない教室に入り、自分の机に今日使う教科書類を放り込む。後は待つだけだ。

やがて、几帳面な性格の奴らから順にやつてくる。アスナは少しばかり遅めに来るくらいだ。エヴァは一番最後。一緒に来る場合は違うが。

「ねえねえ、昨日の歌番組見た？？」

「見とらへんなあ。あんましテレビ自体見へんし

会話は適当に交わすだけ。そもそも、通じる話題があまりないのでから仕方ないともいえるだろう。

まあ、マルチタスクを使って会話をしているので、他のタスクでは別のことばかり考えている。もしくは夜天の書を介してネットみたり。そんな感じで、朝の時間を過ごすうちに、外の廊下を誰かが歩いてくるのが分かる。単純に五感が鋭いだけだ。気配を読むのは得意じゃないし。

扉が開き、伸びた手が黒板消しを掴む。そして、赤毛の青年が入ってくる。年齢は俺たちよりも少し上くらい。とは言うものの、別人

種の年齢の見分けとか分からぬし。

何ヶ月も一緒にいれば見分けくらいつくけどね。大分会つてなかつたから、結構変わったなくらいにしか思えない。

「あれ、新しい先生かな？」

「わー、結構美形じゃん。年幾つくらいかな？」

「あたし達よりもちょっと上にしか見えないね。大学出たばかりかな？」

その通りだ。この学年の人間は14だから一才年上つていうことになるな。思うにネギってハイスペックだよな。

魔力量はA A Aランクで魔法の習得も習熟も早い。その上、自分オリジナルの魔法を開発出来るほど発想力や構築力に優れている。アレが正真正銘の天才って奴だろう。もしも魔法使いになつていなかつたとしたら、天才的な科学者とかになつていたに違いあるまい。

「ええっと……今学期、このクラスの教育実習生として教師をすることになった、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくおねがいしますね」

二口つとネギが微笑む。今の微笑だけで、幾人かの女子生徒が撃沈したな。普通に美形だし、優しそうな風貌だからなあ。

ちらつとエヴァを見てみるも、ぼんやりと本を読んでるだけだ。俺の視線に気付くと微笑を返す。釣られて俺も微笑を返す。

「ハイハイハイ！質問は麻帆良のパバラッチである、私に任せてもらえるかな？」

相変わらずすりさつしたい奴だな。何かパパラッチつて言つ奴を勘違いしてゐる節があるしな。

原作でも、魔法を知つたらそれを広めようとするし、警戒してゐる最中だつて、いづのに仮契約大会なんて開きやがる。死にたいのか？バ力な戦場力メラマンみたいだよ。自分が死ぬわけないとか、自分が危険に巻き込まれるわけがないって考へてるんだから。あれほど厄介な奴もない。

考え方も独善的だし、自分しか見えてないつて奴だ。障害にならないうつに殺した方がいいかも思つてしまつくらいだ。

「じゃあ、まずは年齢だね。年は幾つですか？」

「ええっと、数えで15ですから、皆さんと同じ年ですか？」

「うーん。じゃあ、飛び級つて奴？それじゃあ、何処から来たの？」

「イギリスのホールズつて所から来ました。ゼノギアスは関係ありませんよ」

「は？ゼノギアス？まあいいや。身長と体重、それから趣味は？」

「身長と体重は最近計つてないので分かりません。趣味はアンティークのコレクションです」

「じゃあ、恋人とかいる？」

「居ませんよ。それ所じやあつませんでしたし」

枯れてるな、お前。俺よりも遙に若いくせこ……。

「最後に、このクラスで気になる人は？」

「やつですねえ……」

ネギはちらりと名簿を見ると、次に教室を見渡す。目に魔力を込めてだ。

「ハ神さんとエヴァンジェリンさん。それから神楽坂さんですね」
俺は単純に容姿が似てるから。エヴァンジェリンは賞金首だから、
神楽坂は昔からの知り合いだからだろう。単純すぎワロタ。
俺に関しては魔力を封印してるから分からないだろうけど、エヴァ
ンジェリンは探れば魔力があること自体は分かるからな。

「じゃ、ありがとうございました～♪

朝倉はニシシと笑いながら席に戻り、なにせらメモ帳を取り出して
書きとめ始める。「面倒だなあ。寝ちゃおうか？」

まあ、ネギはまじめだろうから起こされるな。指先に大気中から集
めた魔力を集中させ、机を叩く。

魔力を始めた極々僅かな、人間の可聴領域外の音が響き渡る。俺は
夜天の書でモニタリングしてるので、音が把握できるのだ。
何度も音を鳴らして調律し、丁度いい音階を見つけたら、その音を
一定のリズムを持って鳴らしつづける。エヴァは気付いているのか、
耳に魔力を込めてレジストしている。

他の人々は気付いていない。世界中の戦場を回っていた真名ですら
気付かない技だ。というか、こんな技自分でも出来るとは思ってな
かつた。

効果 자체は単純。認識力が落ちるだけだ。ただし凄まじく凶悪なほ
どに。恐らく、ネギの服を剥ぎ取つても気付かれまい。殴り飛ばせ

ば気付かれるだらうけど。

五分ほど続け、ようやく全員に催眠が掛かる。まだまだ修行が足りんね、ネギ。というわけで、屋上で昼寝でもしようか。

といつわけで、やつてきました屋上。ベルカ式の認識阻害結界を開し、その中で座り込む。昼寝するための座布団とかもあるけどな。こういった結界は魔法を知るものならば認知は出来る。だが、俺はここで隠密タイプの結界を展開しているのだ。

そのため、殆どの魔法使にはコレを認識できない。なぜならば、存在の根底から違うのだ。同じなのは魔力を使うだけ。だから、ベルカ式の結界を知らない者は気付けない。

単純に違和感を見つけるのが上手い魔法使いとかなら、結界があるのは分かるだろ? 何処にあるかまでは分からないだらうけどな。

「アレが要の弟子か」

「戦場に放り出しても生きていけるへうこには強くしたつもりだよ
「僅かな殺氣にも反応できていたからな。まあ、それなりといつたところか」

「俺は魔法なんか教えられないからね。守護騎士総出で戦闘技術を
片つ端から叩き込んでやつたよ」

「…………よく生きていたな」

しおつちゅうチャチャゼロと剣をあわせているシグナムを思い出したのか、僅かに遠い目をしている。

「殺してくれつて言われたことならあるけど、死んだ」とはなかつたよ」

「一体どんな修行をしたんだ……？」

「俺、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、リインフォース▽ネギ（丸腰）で24時間無制限バトルしだけだ。ネギにさばける本当にギリギリの所で手加減をしつづけた。コレが終わつた後は、かなり強くなつたと思つぞ」

「漫画みたいなことを本当にやつてのける奴が居るんだな……」

「この世界漫画だしね。主人公補正つてあると思つよ。鍛えたら鍛えた分だけ強くなるし。あんなの理不尽だ。

60年掛けて改造した体は、100時間全力疾走フルマラソンが魔力、気なしで出来たりするが、ネギも追いついてくるのだ。もうやだこの主人公。

「しかしあま……この結界は便利だな

「うん？ああ……古代ベルカ式の封鎖領域の事か。時間隔離ははしてないけど

「デフェングスデアマギー……ドイツ語に近いが、微妙に違うのにつたな。確か、ベルカ語だつたか？」

「そうだよ。他には飛翔魔法スレイプニール。砲撃魔法ラグロナク。広域攻撃魔法、デアボリックエミッシュョン。ブラツディダガーとかね。全部ベルカ語。不思議と地球と共通点が多いんだよね。ニッヂチルダ式は普通なんだけど、古代ベルカ式になると、北欧神話とかの

言葉が入るんだよね」

ドラウプニールとかもありそうだよな。他にはゲイボルクとかベルタとかモラルタとかも。こっちはケルト神話だけだ。

「それと、毎回毎回古代ベルカとつけるが、何か違うのか？近代ベルカとか現代ベルカでもあるのか？」

「そうだよ。近代ベルカ式っていうのもあるんだけど、アレはちょっと違うかな。近代ベルカ式はミッドチルダ式の術式上でベルカ式をエミニュレー・ションした魔法だから。

古代ベルカ式は一種のレアスキル扱いかな。それだけで聖王教会に対するコネになりそうなものだから」

「ふむ……よく分からんな。しかし、私には使えんのか？」

「正直な話、難しいかもね。方向性が違いすぎるから。治癒術師を魔法剣士にするようなもんだ。デバイスがあればいいんだけど、機材も設備もないしな……」

そのため、俺に出来るのは現在あるデバイスの整備と、簡素なデバイスの作成くらいだ。機材と設備があれば、ロストロギア認定されるデバイス作るのに。

術式を教え込めば、以前に渡したシユベルトクロイツを砲身にして古代ベルカ式の砲撃魔法くらい使えると思つんだがな。適正があるか分からないし。

いや、600年前って言えば、聖王が死んでない頃か？なら、ベルカ全盛期か。適正は血と共に薄れてつた訳だし……使えないこともないか？

でも、エヴァはヨーロッパ出身だしなあ……いや、出身地は関係な

いか。教えれば使えるか？仮に使えたとしても、常人の演算能力と構築速度じゃ、ラグナロク作るのに一分掛かるしな（Sランク砲撃魔法なので当たり前です）

「正直な話、俺が教えるとなると、弟子の末路は三つしかないしなあ」

「何だか予想できるぞ……死ぬ。生きているが使い物にならない。生きて優秀な魔法使いになる。の三つか？」

「正解は、生きているだけ。生きているが一生動けない。半分廃人の優秀な魔法使いだ」

「最悪なのばっかりだな！？というかネギはどうした！？」

「廃人じやないけど、まあまあ優秀な魔法使いつて所だ。二番目が中途半端に終わってるわけだ。

ちなみに、優秀って言つのは紅き翼でもやつてけるつていうのを基準にしてある」

「優秀じゃなくて世界でも有数の魔法使いだぞ。それは」

「単純に戦闘技術を育て上げてるだけだからね。それ以外は知らんよ」

「ああ、戦闘者としてか。ならば頷けるやもしれん」

余程才能がない限り、紅き翼でもやつていけるレベルにまで持つていくことは可能だ。戦闘が強いのではなく、戦闘を上手くすればいいのだから。

まあ、細かいことは省くが、紅き翼は強い魔力もちや突出した力の持ち主が目立つが、詠春は突出した力の持ち主ではない。だが、詠春は生き残ることが上手く、戦闘が上手かった。

そのお陰で、あいつは最後の最後まで生き残ることが出来たのだから。

「デバイスが用意できるといいんだけどなあ。用意できるのは守護騎士と俺の杖の模倣品だけだ。

個人用に微調整をしてあるから、エヴァージャ三割くらいしか使いこなせないだろうな。

仮にエヴァ用に調整しても、適正がな……シグナムのは炎熱変換向きの構成し、グラーファイゼンもだ。クラールヴィントは治癒タイプだから、フェラーリ並に扱いが難しいぞ」

「そうか……」

「夜天の書なら扱えなくもないが、コピーするのは現実的じゃないな。概算で百年単位で時間が掛かる」

何しろ夜天の書の内部データの整理を、手に入れて数ヶ月ほどから始めたのだが、未だに終わっていないのだ。つまり、60年以上経つてる。

整理だけでそうなのだから、コピーするとなるとどうなるのやら。部品自体は即座にコピーできても、データは直ぐにコピーできないのだ。

「ま、いざれはエヴァ専用のデバイスを作るよん。楽しみにしててくれ

「フフ……楽しみに待つとしようか」

そんな感じで、俺は壁に背を向けて寝転がり、エヴァは俺の上に座る。そして、穏やかな日の光を浴びて眠りについた。

察知。

対象の敵意、および害意……有。僅かながらの殺氣。

行動選択……迎撃を推奨。攻撃を受けた場合の損傷の可能性は軽度

……結論、痛いのは嫌だ。

選択結果……Aランク複数誘導弾による対象の迎撃……ヒット。迎撃対象の現存を確認。

魔力による攻撃の無効化を確認。迎撃対象の魔力励起を確認。迎撃対象の気の励起を確認。迎撃対象の気と魔力の合一を確認。該当技法の閲覧……ヒット、感掛法と推定。

麻帆良学園において、感掛法の使用可能対象の検索……タカハタ・タ・タカミチ及び神楽坂明日菜。タカハタ・タ・タカミチは出張のため不在。

先ほどの魔力攻撃無効化を魔法完全無効化能力と推定……対象の迎撃を承認。右胸内ポケットのスローライニングダガーに気の伝導。投擲。回避。

投擲、回避。投擲、回避。投擲、投擲投擲投擲投擲投擲。有効命中数、0。迎撃対象への警戒レベルを3に。

ブラッディダガーの複数生成を開始、生成成功。生成数32。当魔法を多重弾核へと変更。成功。射出。回避。迎撃失敗。

警戒レベルを5へと移行。ブラッディダガーの多数生成開始。成功。生成数1200。飽和攻撃による地形改変攻撃の開始。地形改変による周辺被害の影響。結界内部の為、魔法関係者のみ存在。修復は容易。

攻撃開始。対象に命中を確認。内部魔力の暴走励起を開始……轟音。

爆破の成功。対象に爆破エネルギーによる損傷を確認。

マルチタスク最大分割。最高強度バインドの複数形成。総数68のバインド射出。半物質化魔力による対象捕縛の成功。マルチタスク統合。半眠半動睡眠の再開。

.....

.....

.....

目が覚めると、鎌で雁字搦めにされたアスナが居た。バインドの色は銀色といふか白色。俺の魔力光だ。

「楽しいか？」

「楽しくないわよー喧嘩売つてんのー!?」

「そりゃ。で、なんでそんなことになつてる

「あんたにやられたのよー早くといてくれないー!?!?」

「そりゃ

多分、寝てる間にやつたんだろうな。マルチタスクを使えば、完璧に脳を休眠させないで起きることも出来るし。もう少し見てたかったが、一先ず解除してやる。

「全く……何時の間に屋上に移動したのよ?」

「一時間田が始まつた直後」

「あんた本当に授業受けの氣ないわねーーー？」

「ハツハツハツハ！」

「笑うんじやない！」

「気が込められた拳が俺の顔面に炸裂するが、それは残像だ。

「全く……分身に授業受けさせるわ、認識阻害で抜け出すわ、仮病で休むわ……まじめに授業受けた事あるの？」

「ないに決まつてるだろ」

「堂々と答えるなーーー」

蹴りが放たれるが、やはり回避する。当たるわけがないだろう。

「戦争が終わつて一十年。今まで馬鹿馬の如く働いてたんだぞ？ 一年くらい休ませや」

「はあ……要が頑張つてるのは分かつてゐるナビや、なんで学校に来たわけ？私は義務教育だから学校に來てるだけだし……」

「そんなの、決まつてる。エヴァに会つためだ

未だに俺の膝の上で眠つてゐるエヴァの髪を撫ぜる。まるで綿糸のように柔らかい髪。何もかもが愛しい。

「はあ……ほんつとーにメロメロよね」

「まあな。大分生きてきたけど、ここまで恋に燃えた事はなかつたな。まあ、でも……同情と傷の舐めあいもある、のかな」

俺は不老だ。自分で望んだ事とは言え、辛い物がある。不老にした理由は幾つかある。まず、別荘で修行をする時に年を取らないため。ヴォルケンリッターと永遠を歩くため。

そして、エヴァと共に居るため。永遠に生きるという幸運を、傷の舐め合いで癒す。それがないと言えば嘘にもなる。

「だが、俺はエヴァの誇り高さに惹かれた。そして、少しでも苦悩を分かち合おうとも思つてゐる」

「そ……まあ、別に文句はないわよ。元老院が何ていうかは知らな
いけどね」

「ござとなれば全部叩き潰す。それだけだ」

「それもそうね。あんた達、紅き翼はそうしててきたもの。ナギだつて、気に食わないから戦争に参加した。気に食わないから世界だって敵に回した」

「ま、やつこひ事さね」

穏やかな会話は終わり、膝の上のエヴァが目を覚ます。アスナが近づいてる事にも気づかないって、不味いんじゃないかな?

それとも、俺が居るから安心してくれたんだろうか? そうだったら嬉しいんだがなあ。

「む……神楽坂明日菜か。一体何の用だ」

「あんた等が早速授業を抜け出したから文句言いに来たのよ。第一に、どうやって抜け出したわけ？気付いたら居ないとか、驚くじゃないの」

「超音波催眠術をやつただけだけ？まさか戯言シリーズのノリでやつたら出来るとは思わなんだ」

「「」、これだからバグキャラは……！まあいいわ……いや、よくないけど、ひとまず置いといて。

ネギがこの学校に来たわけだけど、あんた達はどうするつもりな訳？」

「基本的に不干渉だ」

「外に出て正義の魔法使い等のやつかみを置つ必要もないしな。わざわざ呪いを解こうとは思わん」

「やっぱ、そうか。とこつかまあ、ネギって現時点でも要が出した課題を何個もクリアしてるわけでしょ？」

弟子の卒業試験の後に、何個か依頼出したりして聞いたわよ？見習い魔法使い卒業なんて、建前みたいなもんでしょう？」

「賞金首を10人狩つて來い。総計100万ドラクマの賞金手に入れろ。もうメンンドイから自己流奥義生み出して來い。この二つだな」

「最後が随分投げやりね……」

「別に達成できなくてもいいしな」

実際の所、向上心を高められれば何でも良かつたわけだ。俺を倒せつていうのを提案しようとしたら、ヴォルケンリッター総出で止められてしまった。

冷静になつて考えてみると、凄まじい無理ゲーだった。俺つて、リインフォースを除いたヴォルケンリッター総出で掛かつて互角つていう、チート臭い戦闘力になつてしまつたしな。

「実際の所、ネギの戦闘力はかなり高くなつてるしな。だが、格闘術がな……実戦経験がまだ少ない。」

ナギに近づいてはいるが、本格的に格闘術を習わないといけない。ナギは自己流だが、センスがあつた

「そうよね……ナギって魔法使いの癖に反則級に接近戦上手いし。ていうか、ラカンと引き分けたんだからね」

「かく言つお前も天才的なセンスがあるんだがな……」

「それは知つてゐる。でも、バグキャラじゃないわよ」

「ナギに匹敵する莫大な王家の魔力があり、ありとあらゆる攻撃魔法を意思次第で完全に無効化し、年齢一桁の頃には既に究極技法を習得。

天性の格闘センスがあり、接近戦においてはシグナムですら一日置くほどの実力。また、上位古代語魔法である燃える天空の使用も可能」

「十分バグキャラだな。うむ。そもそも、肉体年齢五歳の子供が如何に英雄に守られていたとは言え、戦いの日々で生き残れる訳がない

い。

元祖バグキャラの私が保証しよう。神楽坂明日菜。貴様はバグキヤラだ

実は、アスナもバグキャラ。ネギは開発力がバグキャラ。こつそり覗いた所、原作にもあつた巨人殺し（ティタ・ノクトノン）と千の雷を直射型に変更したSSランク相当の砲撃魔法。

燃える天空を球体として圧縮。一部分を解放し、そこから膨大な熱量を放射し、着弾地点から150メートル前後を高温で焼き尽くす広範囲殲滅魔法。

燃える天空と永遠の氷河を改良、統合し、巨大な氷塊を発生させ、その中心に燃える天空を発生させ、全体反応型水蒸気爆発を起こし、周囲を破壊しつづくす広範囲殲滅魔法。

何故か広範囲殲滅魔法が多いのは俺の影響じゃないと信じたい。ついでに言つと、一つの魔法で協会に売れれば一生慎ましやかに暮らしていけるだけの金が手に入る。

更には俺の脳とアクセスしている夜天の書の話を聞いて、脳に直接電気信号で情報を焼きつけ、書類の内容を完全に記憶するという魔法まで作りやがった。

原作では攻撃魔法が15個くらい。他に補助やら治癒やらを含めても50も習得してなかつたのに、今のネギは使おうと思えば、俺が提供した魔法書の魔法全ての使い方を完璧に理解していやがる。メルディアナ魔法学院の禁書書庫にも忍び込み、今ではどれだけの魔法を覚えたのか知りたくもない。少なくともサウザンドマスターを名乗れるのは確か。

「フウー……麻帆良学院はバグキャラのすくつか……！」

「巣窟よ。つていうか、私がバグキャラって……」

「んなの知ってるよ、バカレンジャーじゃあるまいし。ボケたんだから突っ込めよ。何故か変換できないとか。あと、バグキャラは当然だろ」

「ふいんき（変換できない）という奴か。いんたーねつと、というのも中々に奥が深いものだな……」

「エヴァンジエリンが汚染されていく……それはそうと、バグキャラの巣窟ついでじうこう事よ？」

「紅き翼のメンバーが7人居るんだぞ？ 閻の福音であるエヴァ、當時戦えたならば、紅き翼で戦功を立てることも出来た明日菜。

既にナギに届かんとしているネギ。なんだか最近ジャックに似てきて嫌な感じの「タロー」

実際、スケベとかではないのだが、言動というか、適当にやつた技とか、ネーミングセンスとか……そこら辺が妙にジャックみたいに。犬神流適當奥義・獸牙変化とか言って、30メートル近い巨大な狼になられた時はマジでどうしようかと思った。あれ、下手したら古龍並みに強いよ。

というか、そこらの町で、それなりの腕利きの結界術師と封印術師を何人か呼んでくれば、龍樹を倒して、国の守り神にも出来るレベル。ネギは、殺すだけなら出来そうだ。

「タカミチはタカミチで何時の間にか闇の魔法なんて習得してるしかし、術式構成が拙かつたな……鍛え直してやらねばならんか？」

「やめて！タカミチが死んじゃう！」

「そ、そうだ、タカミチは私が教育しておいつーうんーあ、あれで
も一時期は私が師事していたんだ！」

「そつか？なら、エヴァに頼んだ方がいいかもな。俺がやったのは
エクストリーム耐久バトルだけだしな」

俺の言葉に、二人がゴクリと唾を飲み込む。

「なんだか、聞きたいような聞きたくないような……」

「が、頑張つてよーなまはげ扱いのエヴァンジエリンなら恐いもの
なんてないでしょー？」

「私にだつて恐いものくらいある！だが、参考までに聞くとしよう
……エクストリーム耐久バトルとは具体的にどういうものだ？」

「別荘を使って、一日中戦い続けるだけだ。何時襲つてくるかも分
からない、休む事も気を抜く事も出来ない。

怪我をしても医療班が回復。死んだら地獄から引きずり戻しても
う一回殺す。魔力がなくなれば供給。気がなくなれば供給。
たとえ泣き叫ぼうが、喚こうが、24時間が経過するまでは絶対
に終わらないバトル。それがエクストリーム耐久バトルだ」

「SAN値が凄まじく削れそうな修行だな……下手したら恐怖やら
痛みやらで発狂するぞ？」

「私なら死んでも「メンだわ……」

「発狂したら殴つて治す。死んでもゴメンなら一回死んでから来て
もらおう」

「悪魔！鬼！アンタの血は何色だ！」

「私よりもよっぽど悪人みたいに思えるのは気のせいか！？」

「悪魔でも鬼でもいいよ。悪魔らしく修行をつけてあげるだけだから」

「更に悪化した！？」

こんな感じでエヴァとアスナで遊ぶ。確かにエクストリーム耐久バトルはしたが、そこまで酷い事はしていない。

生きる事への執着と、気配察知、及び咄嗟の反応、直立状態での休眠、警戒態勢での休眠なんかを徹底的に叩き込み、24時間戦えるバーサーカーにしただけだ。

タカミチのエクストリーム耐久バトルの使用回数は自主的な回数が11回。強制参加が198回だ。腕がもげたり、脚がもげたり、下半身がなくなったりしたが、それも俺が強制的に治療。

気絶したら死ぬので気絶をコントロールできるようになり、このくらいなら死なないから問題なしと、冗談抜きで痛みを無視出来てしまつたりする。

え？十分に酷いつて？なに言つてるんだ……俺だって気絶をコントロール出来るし、痛みを無視じゃなくて快樂に変換したり、殺した相手の血をじゅるじゅる啜るんだぜ、俺……。

「タカミチはこんな鬼畜な師匠相手によく頑張ったな……初めて会つた時から、戦闘力は大してないのに、危機感知能力と防御だけ異常に上手かったのは、この所為か……」

「タカミチ……強く生きてね……」

「おーい？なんだか俺が人でなしみたいじゃないか？」

「抜かず五発の人でなし」

「それ、セクハラだかんな」

本当に脈絡がないこと言いやがったな。ちなみに五発は平均回数。今まで知らなかつたのだが、この体、精力絶倫なのだ。

10歳児の体では、AVやらなんやらを見ても一切興奮しなかつたしなあ。どうでもいいが、この世界統計的に見て美形が多いというか、むしろ美形しか居ない世界なので、AVのレベルが高過ぎると思うんだ。

何故かエヴァを前にすると、10歳児所か5歳児でも勃つという不思議性能な体である。

「一昨日私を白濁液塗れにしたのは誰だ？」

「IJの小説が18禁になるんでマジで勘弁してください。俺です」

「先週、胸だけを一晩中責め続けた挙句、お預けをしたのは誰だ？」

「IJめんなさい。ペタンコな胸を舐めるのが大好きなんです。いや、エヴァのしか舐めた事ないけど。いや、胸責めっていうシチュが大好きって言うか。

いや、ちょっと夢中に成りすぎた。マジで勘弁。所で母乳が出るようになる魔法があつてだな……貧乳な子から出る母乳つて、巨乳の母乳よりも興奮する

「却下する。そもそもそんな下らん魔法を探すな！あと喧嘩売つて

るのか！？」

「実は、手足を自由自在に操れる触手に変化させる変身魔法があり、逸物を数倍の大きさに変化させる変身魔法があつたり。

出でぐる液体の量を100倍に増やしたり（2～3m¹なので、300m¹くらい）幻術で複数人に自分を増加させる魔法があつたりな…… HENT-AI文化は凄いな。後エヴァの貧乳最高。

僅かな膨らみと、それを恥らうエヴァが可愛いんじやないか。それこそが宇宙の真理」

「最後のは気の使い手が使う分身でいいだろ！？そもそも、そんなものを私に使う気か！？それと、やっぱり喧嘩売ってるんだろ！？買ひぞ！？」

「くつ、俺の処女を奪つた癖に、よく言つよ。それと、エヴァの膨らみかけの胸が可愛いのは事実。かく言ひエヴァも10歳verの俺の胸を散々触つて吸つたじやないか。

日本人だからエヴァと違つて正真正銘のペタソードだったのに。膨らみかけ所ぢやないぞ。エヴァはまだ、ふにつて感じだけど、俺はペタンだぞ、ペタンつて。そもそも胸所か乳首も膨らんでねえよ。恥ずかしいから止めてつて言つたのに止めてくれないし、魔力を封印して戒めの氷矢で縛り付けるし。あれ、レイプつて言ひんだぞ。いや、気持ちよかつたけど」

「そ、そそそれはだな！だ、誰かに奪われるくらいなら私が奪つてしまおうとだな！」

「胸に関してはなんだ……すまんとしか言ひようがない」

「別にいいのや……俺、本当は男だし」

「フー……現実逃避つて難しいわね。何でこの一人はいきなり口話を始めてるのかしら」

エヴァとこむやこむやラブ、世の中の喪男が見たら、血の涙を流すような内容を話していると、屋上の扉が開いて、誰かが入ってきた。

どうせ気づかれないだろうと思つて放つておいたら、平然と結界の中にそいつが入ってきた。

誰かと思って目線を向けると、赤毛の青年。加えて言つなら、美形である。まあ、ぶっちゃけた話、ネギなんだが。

「見つけましたよ。明日菜さん、要さん」

「つて、気づいてたのか……折角一年前から潜入してたのに……」

「魔力を封印しても、魔力タンクが消えるわけじゃないですから。魔法を開発する過程で、魔力タンクの透視ができるようになつたんです。」

そこまで馬鹿げた容量を持つ魔力タンクの持ち主は、師匠以外には居ませんよ」

なるほど。それならバレるかもしね。リンカー・コアとは魔力容量という言葉通り、大きさで魔力量が決まる。ナギや木乃香なら、握り拳くらいはあるだろう。

だが、要是その二十倍以上あるのだ。体にギッシリとリンカー・コアが詰まっていると言えば分かるだろうか?といふか、体からはみ出しないのが奇跡なくらいのサイズなのだ。

「それでは、これからもよろしくおねがいしますね。師匠」

「わーったわーった。つたく、折角驚かせよつと想つたのになあ

「さう上手く行くもんじやなかつたわね

「それと、エヴァンジエリンさんも。よろしくおねがいしますね

「フン……？ 悪の魔法使いである私とか？」

「まあ、賞金首の取り消しも通つたわけですし。今のエヴァンジエリンさんは一般人と同じですから。魔法関係者を一般人と言つていかは分かりませんけど」

「それもそつか

「考えてみればそうだつたとエヴァンジエリンは思い出す。かれこれ何百年も賞金首だつたのだから仕方ない。

前までは麻帆良を出れば、即座に賞金首が復活する手はずとなつていたが、既に何処に行こうとも自由となつてゐるのだ。

「さて、何でも僕の歓迎会を開いてくれるそつですでの、行きましょうか？」

「あ、そうさう、それよ。文句言つついでに一人を呼びに来たんだつた」

「アスナさん、しつかりと忘れてましたね。それじゃ、行きましょうか

仕方ない。行くとしようか。エヴァと手を繋ぎ、結界を解除し、俺達は教室へと向かった……。

さてと、これから物語が始まつてく。リョウメンスクナの復活、超鈴音の計画。それらを阻止する事は不可能ではない。寧ろ、力を増したネギならば容易い事だろう。

されど、英雄の活躍の影で涙を呑んだ人が居た事。人と人は必ずしも分かり合える訳ではない事を学べるはずだ。
しっかりと成長しろ。俺の弟子だ。でもまあ、少し失敗して、挫けた時は尻を叩いて後押しくらいはしてやるさ。

第十話 学園祭とネギ来訪と戦士は眠らぬ（後書き）

今回はあつと短いです。新しい妄想が沸きあがつて、情熱に身を任せたら、オリ主が木乃香の姉で、何故か詠春との子供を生んでいて、自力で燕返しを習得してた。

やつぱり自分の脳味噌は腐つていいのです。

思いつき外伝（前書き）

なんという無茶振り外伝。これは絶対に続かない。

思いつきり外伝

青年の命を奪う、朱色の魔槍は、唐突に溢れた光の中から現れた何者かによつて弾かれた。

「七騎目のサーヴァントだと…？」

蒼い獣のような槍兵は、驚愕するような声を上げ、光の中から現れた何者かの追撃を受ける。

槍を両腕で構え、それを受け止めるが、余りの一撃の重さに後退せざるをえなかつた。狭い場所で槍を振るうには不利と悟つたか、土蔵の外へと逃げ出した。

現れた何者か……それは幼い少女だつた。胴体を覆う黒い革製に見える服は短く、下着がギリギリ見えそつたほど短さ。されど、腰には太股を守る為のガードが。

上に来ているジャケットの肩は膨らんでおり、恐らくは内部にガードを隠しているのだろう。何よりも目を引くのが、背中に生える三対六枚の黒い羽。

手には十字を保持するための輪がなければ、十文字槍にも見える大きな杖。それはまるで、魔法使いのような姿。

「お前が、俺のマスターか」

「え？」

唐突に開かれた口から、青年へと尋ねる声。マスター？ 何の事だろうかと青年が思う暇もなく、次の言葉を紡ぐ。

「令呪を確認した。サーヴァント・ジョーカー。召喚に応じ馳せ参

じた。これより我が杖と翼、そして我が誇り高き騎士団は貴方と共にあり、貴方の運命は我等と共にある。

夜天の王と紅き翼、そして時空保安局最高評議会の名を持つて誓約しよう。ここに契約は完了した

十歳くらいにしか見えない少女は、いきなりわけの分からぬ事を言い出した。

「敵がまだ居るな……そこで待つていてくれ、主。すぐに掃討してくる」

言つと、幼い少女はいきなり搔き消えた。外に出たのかと思い、咄嗟にそちらへと向かうと、既に外で蒼い槍兵と対峙していた。

「よお……一応聞くがよ、ここで勝負は次に預けねえか？そこに居るマスターも、なにがなんだかわからねえって顔してるしな。

それに、お互ひ万全の準備を整えてからの方が、色々と都合はいいだろ？」

「断る。我等がベルカの騎士に一対一で負けはない。夜天の書の主としてここに引く選択肢はありえない」

「ハツ……よく言つた。だが貴様は馬鹿か！武器も構えず戦いの場に出てくる騎士があるか！」

見てみれば、幼い少女は何時の間にか先ほどまで持つていた杖を消していた。完全な丸腰。姿も戦闘向きとは言えない。槍の一突きで突き殺されかねない武装。

放たれた必殺の一撃。されど、それを幼い少女は神速の一撃によつて弾いた。

「素手だとお！？」

上へと跳ね上げられた男の槍。それを逃さず、幼い少女は鋭い突きを放っていた。

男は後方へと飛び退くが、幼い少女は一瞬消えたかと思うと、既に男の懷へと入つていて、肘撃ちを放っていた。

それを男は咄嗟に槍で防ぐが、ガードの上からでも尚、重い一撃は男を後方へと跳ね飛ばしていた。

「一つ聞かせる……」

後方へと跳ね飛ばされた男が、槍を構えながらも問い合わせる。

「貴様、何処の英雄だ……そのガキみてえな容姿でありながら、凄まじい威力の一撃。思い当たる節が一つもねえ」

「我等は法の番人。時空の守護者。正義の味方にも、正義の代行者にも非じ。我等は唯惡の敵なる者」

「ほお……どこの騎士団か何か？話を聞く限り、テメエは騎士団長みてえだが？」

「然り。我、夜天の書の主にして、最後の夜天の王。そして、我に仕えし五人の騎士……」

幼い少女が手を虚空に掲げると同時に、少女が左手に持っていた本が浮かび上がり、凄まじい速度でページが捲られていく。

それに伴い、その本が紫色の輝きを発していく。

合成音のような声。それが響くと同時に、幼い少女を中心として黒いものが周囲を覆つていった。

「これは……結界だと!? 貴様キヤスターか!」

相手の行動を許した失策を悟つたが、蒼い槍兵は神速の踏み込みを持つて槍を突き放つた。

一体どのような結界かは分からぬ。だが、召喚される魔術師は神代の魔術師の可能性すらもあるのだ。ならば、魔術師の家に組み込まれた魔術を流用するなど容易い。

蒼い槍兵は、相手が魔術師ならば、魔術を紡ぐ前に仕留める自信がある。先ほどの一撃は強化の魔術を用いた末に弾けたのだろうと当たりをつけた。

しかし、それは失策だった。追撃の一撃が如何に鍛度の高いものであり、人を殴るのに何らためらいが無かつた事。それを見抜けたのならば、分かつただろう。しかし、防ぐのに精一杯であつた彼にそれを求むのは些か酷であろう。

唐突に虚空から現れた剣。それを持って、ジョーカーはランサーの放った槍を弾き飛ばした。全てを真っ向から撃ち碎く剛剣。それは長年の研鑽の末に培つたものであろう事は一目瞭然であった。

「剣の騎士、烈火の将シグナム。主の勅命に拠りて、貴様を討つ」

何時の間にか、ジョーカーの姿が凛々しい女性騎士に変貌していた。ピンク色の髪をポニーテールに纏め、露出の覆い騎士甲冑を纏つた凛々しい姿の女性騎士に。

その手に持つ、炎の魔剣レヴァンティン。交換資質によつて発生した業炎が蛇のように絡み付いていた。

「へつ、おもしれえ……ああ？ 戻つて来いだと？……チツ、よお、セイバーだか何だか分からんが、マスターに戻つて来いと命令されちまつてな。

そこに居るお前のマスターも何が何だか分からんつて顔してるしよ。お互い、万全の状態で戦うのがいいだろ？ この勝負、次に預けねえか？」

「……よかうう。磐石の準備を整えてから再び来るがいい。その時、貴様を討つ。我が名はヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナム」「わりいが、真名は明かせねえ。だが、槍兵だつて事は見て分かるだろ？ んじやあな」

ランサーは槍を肩に担ぐと、そのまま何処かへと去つて行った。ジヨーカーはまた一瞬光に包まれると、元の姿に戻つていた。

「魔力が足りんな……リンカー『アとかの理が違うからか……一日もすれば、完全召喚も出来そうだ」

ジヨーカーは咳くと、何が何だか分からんといった様子のマスターの下に戻つた。

「何が何だか分からないって様子だな。マスター」

「あ、ああ。一体何が起こってるんだ？」

「それについては後で説明する。こつちに迫つてるサーヴァントと魔術師が一人。攻勢に出るか守勢に出るか。選んでくれ」

「あ、ああ、本当に敵かどうかも分からぬし、ひとまずは状況説明が先だし」

「甘い。甘いぞマスター。罷を張られて始末されてもおかしくない状況なんだぞ。まあ、別にいいがね」

再びジョーカーは何処からともなく十字の飾りがついた杖を取り出すと、肩に担ぐようにして持つた。そして、僅かに浮遊する。

「時間がないから手短に説明するが。今、この町では戦争が起きている。七人の魔術師と七人のマスター。それぞれが聖杯を奪い合う戦争をな」

「聖杯……？」

「奇跡を可能とする神秘の結晶。それが聖杯だ。つと、敵さんが来たぞ」

家の正門から堂々と入り込んでくる紅い外套を着たサーヴァントに、それに続いて走ってくる魔術師。

ジョーカーは無詠唱で魔法の射手をざつと1000本ほど展開し、一応の牽制となす。強い対魔力を持つ相手には殆ど意味の無い魔術だが、ないよりはマシだ。

「なつ、遠坂！？」

「こなんばんは……衛宮くん」

「あん？ 知り合いか？ マスター？」

「あ、ああ、一応……」

「じゃあ、顔見知りと仲良くなると辛くなるから、今のうちにサクッとぶち殺しておいた方が楽だぞ」

「だ、駄目だそんなの! 第一に殺すとか何とか……そいつのは言うもんじゃない!」

「……駄目だこりゃ」

呆れたといった調子で咳くジョーカー。紅い外套のサーヴァントと魔術師も呆れたような顔だ。

「はあ……もしかして、貴方聖杯戦争の事も口クに知らないマスターなんじやないの?」

「さつときジョーカーから聞いたけど、何が何だか……」

「やっぱり……それじやあまるつきりど素人つて事ね。中で話しましょひ。」この戦いのあらましを説明してあげるわ

場所は移り、衛宮亭（誤字に非ず）の居間に移り、状況説明が始まった。俺は悠々と席についてお茶を頂いている。うん、中々の味わい。だが、俺には負けるな。

机に置いてあつた煎餅もありがたく頂き、ボリボリといい音を立て食べる。やっぱり煎餅は醤油だろ。歌舞伎揚げも好きだけど。

Side 要

「緊張感のないサーヴァントね……」

「今すぐお前さん方に襲われてもどうともなるつてだけだ。マスターを木端微塵にされても、生きてれば治せるし、死んでれば地獄の底から引きずり戻して生き返らせるだけだ」

「あつそ……それじゃ、本題に入るわよ。聖杯戦争は聖杯の所有を巡つての戦い。マスターに選ばれた者にはサーヴァントと令呪が与えられる。

「これくらい」は貴方のサーヴァントから聞いてるかしら?」

「ああ、大体の所は……」

「令呪つてのは、この腕にある奴だよな?」

「令呪つてじうのは、サーヴァントに対する3度限りの絶対命令権。それを使えば、どんな理不尽な命令も俺に聞かせる事が出来る。あるいは、限界以上の力を發揮できる。例えば、この世界を滅ぼせと俺に命令すれば、三日は掛かるところを一日くらいで滅ぼせる

「ちょっと待て。そんな無茶苦茶な命令するわけないだろ」

「もしくは、俺が独断で世界を滅ぼそうとしたら、それを強制的に止める事も出来るつて事だ。分かつたな?」

「ああ、大体分かった。分かりやすい例え話だつたよ

たとえでも何でもないんだがな。

「付け加えて言えば、サーヴァントを令呪なしで従えるなんて不可

能だわ。何故なら彼らは人の手に余る強大な存在だから。

サーヴァントって言つのはね、実在した英雄たちの魂なのよ

「え……！？ 英雄つて、あれか？ 御伽噺とかに出てくれる……」

「そう、神話や伝説。数え上げればキリがない。生前の偉業により英雄と認められた人物は死後英靈の座へと迎えられる。

聖杯は彼等に七つのクラスを当てはめる事でこの世に召還する事を可能としたの。セイバー、アーチャー、ライダー、ランサー、キヤスター、バーサーカー、アサシン。

聖杯は召喚された英靈たちに相応しいクラスを当てはめてマスターに与える。まあ、貴方のサーヴァントはジョーカーなんていうイレギュラー要素みたいだけど

「ジョーカーはそのまんまの意味だ。ワイルドカード。つまり、七つのクラス全てに当て嵌まる要素を持っている。なんで召喚出来たかは知らんが。

更に言つと、全てのサーヴァントのクラススキルを所持している。マスターが居なくとも半永久的に現界出来るし

「なにそれ……！ どんでもない反則じゃない！」

「バグキャラとはよく言われた」

「まあいいわ……兎に角、そのサーヴァントとマスター同士を戦わせて、最後に生き残つたものを聖杯は主と認める。これがこの聖杯戦争のあらましよ」

「そんな……！ 人の命をまるでゲームみたいにやりとりするなんておかしいだろ！？」

「そうね。だけどその表現は正しいわ。選ばれた七人の魔術師達がサーヴァントと令呪を手駒とし、聖杯を目指して戦うゲーム。貴方はそのゲームに巻き込まれたって訳。

それじゃ、これから行くところがあるから。貴方もついてきて」

俺は腰巻と肩のガードを消して、もしも俺が成人女性だったらコンパニオンみたいな格好で外に出た。

何しろ、ノースリーブで股下十センチくらいしかないからな。しかし、下着は見えない。これぞ絶対領域である。

何やらペラペラ喋ってるマスターたちを見ないで、書店を覗く。魔法先生ネギまないかな……見つけたので、格納領域に入った金で全部購入しておいた。

これ凄いな。原作と全然違うやん。というか、俺が出てるぞ。マンガの世界のキャラクター召喚とか凄くね?歩きながら読んでいると、何時の間にか教会についていた。実に胸糞悪い教会だな。

「マスター。俺はここで待ってる。襲撃される事はないと思うが、気をつけて」

「ああ、分かった」

やはり、俺の辿った世界とは違うな。所々でネギが弱体化してる。まあ、そうしないと漫画にならんしな。俺も殆どサブキャラみたいを感じだし。

夜天の書でネットを閲覧してみると、魔法少女リリカルなのははないみたいだ。とらいあんぐるハートはあるみたいだけ。暫く待つていると、何やら顔色の悪いマスターが出てきた。

「マスター。顔が悪いぞ?」

「失礼だなお前……」

「訂正する。顔色が悪いんだ

「ああ、大丈夫。ちょっと気分が悪くなつただけだよ。ジョーカー。俺はこの戦いを見過さない。だから、マスターになる事を受け入れた」

「ああ」

「ちょっと頼りないマスターかもしれないけど、これからよろしく頼む」

「気にするな。サポートするのは俺の役割だ。」
「ちからね、頼む」

差し出された手を握り、握手する。

「それじゃ、行きましょ。夜が明けないうちにね」

「ああ」

言われたとおりに三人で連れ立つて歩く。ちなみにだが、俺は靈体化出来るぞ。誰も言わないからしないけど。

ぼくぼくと歩いていくうちに、何やらマスターがぼんやりと突っ立つている。

「どうした、マスター。馬鹿面引っ立て

「やつぱ失礼だなお前……」

「油断してゐる何処からともなく飛んで來た銃弾であほーんなんてなつても知らんぞ」

「ああ、すまない。ジョーカーがしつかりしてくれて助かる。俺は正直言つて半人前だし、聖杯戦争のことなんて全然分からない」

「フハハハ、頼りにするがいい」

こんな感じで会話をしているうちに、何時の間にやら分かれ道になつたのか遠坂がここからは敵だとわざわざ宣言してきた。何やら天然でフラグを立てているうちのバカマスターに呆れながら、こっちに向かつて歩いてくる魔術師に一応の臨戦態勢。

Side 凜

戦闘が始まる。ジョーカーが後衛でアーチャーが前衛。色々と間違つてる気がしないでもない隊列だけど、アーチャーは近接戦を好んでるし、ジョーカーの体格だと近接戦は難しいでしょ。

ジョーカーがいとも容易く無詠唱で空中に大量の矢。ガンドを強化したような物を作り出して、それを発射していく。時々繰り出される強力な魔術もバーサーカーの前には殆ど意味を成してない。ジョーカーはダメージを与えるのは諦めて、足場を破壊したり、単純な衝撃でアーチャーへの攻撃のタイミングを一瞬ずらしたりしている。これなら、勝てなくても負けはしないだろう。

「衛宮くん！逃げるわよ！」

「え、おい！待てよ遠坂！あんな小さい子を置いてけぼりになんか

出来ないだろ！』

「馬鹿ね！私達があそこに居ても邪魔になるだけなのよ！第一に、貴方のサーヴァントだつて見た目どおりの年齢じゃないんだから！あの姿はあくまでも全盛期の姿よ！」

「だ、だからって……女の子を戦わせるわけにはいかない！..」

「バカ！貴方本物のバカよ！私達が居なければ、あの二人なら隙を突いて逃げる事も出来るわ！貴方が居ても足手まとこになるだけ！」
そう言って私は衛宮くんの手を取つて走り出す。逃げなくちゃならない。最低でも私の家に。あそこなら、例えバーサーカーでも足止め出来るくらいの防衛魔術は組んである。

「二人でこっそり何処に行くの？置いてけぼりなんて酷いじゃない」

私達の前に、アインツベルンのマスターが立ち塞がつた。

「作戦会議でもするつもり？いいアイデアは浮かんだ？」

まるで、私達を嘲つよつて、無謀に姿を晒している。

「でも、どっちみちバーサーカーには勝てないわ」

そして、絶対の自信を持つて宣言した。

「だつて、バーサーカーはヘラクレスー古代ギリシャ最大の英雄なんだからー」

「ヘラクレス！？」刃物を通さない皮を持つ獅子、ヒュドラ、様々な功業を表す十二の試練を乗り越え、様々な伝説を残し、最後には神靈の域にすら連なったといわれる大英雄。確実に最大レベルの英雄。更には、日本においてもその知名度は高い。ゲームやアニメ作品などにも登場するほどの知名度だ。その信仰による力の増幅は侮れるものではない。

「認知度が強さに変わるのは知ってるわよね？なら、ヘラクレスにかなうものなんかいないわ。貴方のサーヴァントも、お兄ちゃんのサーヴァントもザコに過ぎないのよ…」

「それはやってみないとわからないよ。フロイドライン」

唐突に響いた声、それは、何時の間にアインツベルンのマスターの後ろに回っていたジョーカーのものだった。驚いて振り向くと、そこにはバーサーカーと戦うジョーカーの姿があった。これが、彼女の宝具？

「フフフ……いやなに、すまないね。君が余りにも私の娘に似ていって……とても可愛い娘なんだよ。その無邪気な所や、残酷な所を平然という辺り、余りにもソックリだ。何しろ、私に猛毒を盛つたり、バラバラに引き裂いたり、私以外の家族ＶＳ私というデスマッチを開催したり……あれ、おかしいな……？家族との思い出なのに、涙が出てくる……」

娘によく思われてないのかしら……って、そんなこと言つてる場合じゃないわよ！」

「私のバーサーカーは最強なんだから！貴方なんかただのザコよ…」

地面のアスファルトが軋む音が響く。咄嗟に振り返れば、そこには鉛色の狂った巨人が居た。その後ろにはアーチャーが。もう、間に合わない。死神の鎌ではなく、巨人の斧であろうとも、私達の命を奪うには間違いない。最早令呪を使っている時間すらもない。覚悟した瞬間に、その巨大な剣が振り下ろされた。

「フッ……」

そして、その剣はジョーカーに容易く受け止められた。ジョーカーの足元の地面は陥没し砕けている。だというのに、その手はまるで倒れてきたカラッポのダンボールを押さえているようだつた。力も入れているように見えないので、強大な脅力を持つであろうバーサーカーの腕力に拮抗している……否、拮抗ですらないのだろう。ジョーカーの顔は涼しげだ。

「ハツ！」

鋭く放たれた蹴り。バーサーカーの巨大な体が容易く打ち上げられる。そのままに放たれる閃光。バーサーカーの脳天に命中した一撃も聞いていないようだ。だけれど、ジョーカーはそんなこと一切気にせず攻撃を叩き込んでいく。

「ナイト・スカイ・ナイト・アラルブラ……來たれ雷精、風の精。
雷を纏いて吹き荒べ南洋の嵐！」

この呪文はラテン語？ラテン系の魔術師だったのかしら。

「雷の暴風！」

放たれた一撃。その一撃は、まさに暴風。雷を纏つた強大な暴風は

バーサーカーの強靭な肉体を易々と貫き、その上半身を容易く消し飛ばした。まさに圧倒的。魔術で強靭であるサーヴァントを容易く打ち破つたその力。まさにワイルド・カード。切り札となりえる存在。

「そんな……バーサーカー！」

AINZ·BELNのマスターの悲痛な叫びが響く、これで、勝利になるつて事ね。

「なーんて、言つとでも、思つた？」

「ほう？…どういう事だ？」

何時の間にかこっちに居たアーチャーが尋ねる。尋ねたつて返事は返つてこないと思つけど……。

「簡単よ。ね、バーサーカー？」

「…………！」

響いた咆哮。それは鉛色の巨人の咆哮だった。

私の頭の中で疑問符が駆け巡る。半ば反射的に振り向いたそこには、五体満足のバーサーカーが居た。

「バーサーカーは、十一の試練を乗り越えたのよ？なら、十一の命があつてもおかしくないでしょ？」

「蘇生魔術の重ねがけ……！でも、こっちにはジヨーカーがいるのよ！」

「残念。バーサーカーに一度通じた攻撃は、もう聞かないのよ。試練は乗り越えるものでしょ？なら、乗り越えた試練はもう効かないわ。残念ね？」

そんな……重い絶望が頭に圧し掛かったような気分だった。アーチャーには記憶が無い。だから宝具を解放できない。ジョーカーだって、そう易々と宝具を出すわけがない。あの力なら、バーサーカーを一瞬足止めできれば、衛宮くんを連れて逃げる事なんて容易い。当然、私達は轟り殺しにされるしかない。

「なるほどなるほど。それはいい事を聞いた。たったの12回でいいんだな？」

とんでもなく自信満々のジョーカー。もしかして、アレを十一回殺しきる自信があるのだろうか。

「紅き翼最強の魔導師であり、バケモノ。その真髄を見せてやろう。じやないか」

その言葉と同時に、ジョーカーが更に分裂した。今度は20体。やはり、これは宝具なのだろうか。

「ノンノン。これは宝具じゃないよ」

まるで私の考えを見透かしたような顔。思わず殴り飛ばしたくなつたけど、かなうわけがない。

「これはただの技術。どっちかといつとお遊びの技術だね。頑張れば誰だつて習得できる技」

セリフと同時に、中心に居た以外のジョーカーが全員突っ込んでいく。まるで袋叩きのような状況だが、バーサーカーには一切効いていない。やはり、一定ランク以下の攻撃は問答無用で無効化されるのだろう。

「私の本業は……魔導師なんだよ！」

セリフと同時、空中に大量の魔方陣が浮かび上がる。一つ一つが最低でも二十メートルはある。それが、12個。どれもが莫大な魔力を発していて、それが大規模な儀式魔術に等しいものだという事が分かる。現代の魔術師では、アレ一つを実行するのに数ヶ月以上の時間を要する。それをたったの数秒で……まさに規格外。

「その前に結界だな。夜天」

『ヤー。封鎖領域展開』

まるで合成音声のような言葉が返つてくると同時に、ジョーカーを中心として大規模な結界が展開される。恐らくだが、これは冬木全域を覆つていると考えて問題ないだろう。

「魔力を持つ人間だけを内部に取り残す結界だ。他の人間は全て結界の外。これは一種の異界空間だからね。幾ら壊したって結界を解除すれば元通りだ」

「うそ……そんなの、魔法の領域よ……」

「ああ、魔法使いだからね。出来て当たり前だよ」

今明かされる衝撃の事実。

「それじゃ、行くか…… 我が轟然たる魔力の胎動……！ 奥義！ ブラツディカリス！」

血の十字架。まさにその言葉に相應しく、その強大な魔術は十字架の痕跡を地面に残して発射された。

分身は跡形もなく。バーサーカーは辛うじて原型を残して。

「バーサーカー！」

「ハツハツハツハ、次はどうやって殺してあげようか？」

その後は一方的だつた…… バーサーカーの無力化でも解除できない、引っ張る力や弾かれる力を利用して、体を引き千切つたり。地中深くに空間転移で送り飛ばしたり。令呪がなくなつた後は、バーサーカーを宇宙に置き去りにしてきたり。

その内現れた青タイツの変態をテレビ見ながら倒したり。ボディコンのお姉さんとスピード勝負したり。侍っぽい奴の攻撃を無防備に全部受け止めても無傷で、侍が泣いたり。ローブ着た変質者に散々着替えさせられて、その時に性別が男で既婚者だと判明したり。金ぴかと宝具の撃ち合いをして勝つたり。

「体は剣で出来ている……」

「「」の体と力は借り物でも、思ひは本物で」

「血潮は鉄で。心は硝子」

「その涙の意味を変えるため、救われぬ者に救いの手を差し伸べる為、私は走ろう」

「幾たびの戦場を越えて不敗」

「強くなくてもいい、憐れみでもいい、同情でもいい、隣人に救いの手を差し伸べる勇気を持ちたい」

「ただ一度の敗走も無く」

「人を救うためなら悪魔にもなろう。神とでも戦つて見せよ。正義の味方じゃなくてもいい。私はただ、悪の敵であろう」

「ただ一度の理解もされない」

「その笑顔を守るため、私は戦おう。明日を守る為に戦おう。幾千幾百の年月を経ても、私は戦つて見せよう」

「彼の物は常に独り、剣の丘で勝利に酔う」

「この身死さるその時まで、私は平和の守護者であろう。遙かな昔、私の友であつた男に恥じぬ為に」

「故に、わが生涯に意味は無く」

「理不尽が許せぬと戦つた友が居た。世界を相手に共に戦つた友が居た。世界を救う為に命を投げ打つてまで戦つた友が居た」

「」の体は、無限の剣で出来ていた

「」

「私は彼等に恥じぬため。精一杯上を向いて歩こう。輝ける人に、私もなれるようだ！」

世界と世界のぶつけ合い。互いを否定しあう戦い。

「よひ、カナメ。久しぶりだな！」

「ナギ……」

「ガハハハハ！俺様が来たからには安心だ！最強の傭兵剣士、ジャック・ラカンさまに任せな！あ、依頼料は前金で三百万ドراكマ。十分で五十万ドراكマ。成功報酬に五百万ドراكマ寄越しな。もしくは……一杯奢れ！」

「ジャック……ああ、飲みに行こう。報酬も払うぜ……」

「フフフ……久しぶりですね。カナメ、戦いが終わった暁には、このスクール水着を着てもらえますか？あと、白スク水も」

「アル、お前も変わつてないな……」

「ああ、もう……頭が痛い……なんでカナメはこんな事が出来るんだ……」

「詠春……これがバグキャラの特権だ……諦めろよ」

「ククク……おぬしも変わつておらぬな。弟子の為に老骨に鞭打つて来てやつたのじゃ。感謝せよ」

「師匠……」

「やれやれ……俺は元検査官だぞ？直接戦闘は得意じゃないんだが……」

「そんな事いふなよ……ガトウ。お前の事だつて頼りにしてるんだぞ……」

「お久しぶりです。カナメさん。僕も助太刀に来ましたよ」

「タカラミチ……お前の腕、見せてもらひだ……」

「我等夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂死む事なし」

「！」の身に命ある限り、我等は御身の下にあり

「我等が主、夜天の王、國後要の名の下に」

「我等、雲耀の騎士団。朽ち果てるその時まで、主が下に」

「嘘……」

「フフフ……夫を支えるのは妻の役目。そして、私はお前を支え、お前は私を命ある限り守り続ける。契約は今此処に変更された。私は命尽きても尚お前を支え続け、お前は私を命ある限り守り続ける」

「ああ、分かつたよ……ヒヅアー！」

集結したのは、彼と共にあつた友達。余りにも純粹な想いと、暖か

な優しさ。それが詰まつた世界。他の英雄たちを召喚しえる固有結界。

そして、悲しさと孤独が詰まつた、無味乾燥で寂しい世界。それがぶつかり合つた。

思いつき外伝（後書き）

最後らへん手抜き。明日の12時からバイトなのにこんな時間まで
なにやつてんだろ。固有結界の詠唱は思いつきり頭捻りました。力
ナメカツコよすぎ?

固有結界についてですけど、この外伝以外に登場させる予定はありません。

詠唱の内容がエミヤシロウの信念に似ていますけど、きっと仮のせい
です。

本編書かないといけないのに、なにやつてるんだらつ。

どうにも書く気が沸きあがつて来ません。NEGにしたのが失敗
だつたんでしょうか。まあ、頑張りますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8229/>

ネギまで夜天の主(偽)

2011年2月4日15時30分発行